里見八犬傳　第二輯　巻一

特別
へ13
4304
2

八犬士傳第二輯自序

稗官新奇之談嘗含畜作者胷臆初
攷索種々因果無一獲焉則茫乎不
知心之所適辭如泛扁舟以濟蒼海
既而得意則栩々然獨自樂視人之
所未見識人之所未知而治亂得失
莫不敢載焉世態情致莫不敢寫焉

饗庭文庫

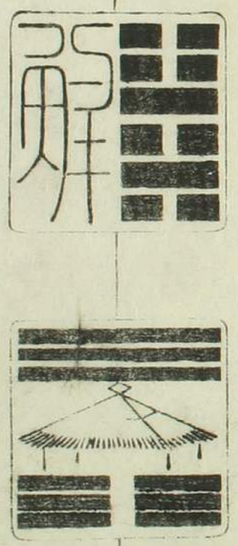
八犬傳二輯巻之一 序 一

N13
4304
2
<2001-304>

排纂稍久卒成冊猶彼舶人漂泊數
千里至一海嶋邂逅不死之人學仙
得貨歸來告之于人間也然如乘槎
桃源故事衆人不信之當時以爲浪
說唯好事者喜之不敢問其虛實傳
迨數百年則文人詩客風詠之後人
亦復吟哦而不疑嗚乎書也者寔不
可信而信與不信有之自國史絶筆
小說野乘出爲不啻五車而已屋下
加屋當今最爲盛而其言詼諧甘如
飴蜜是以讀者終日而不足秉燭猶
無飽焉然益於其好者幾稀矣又與
夫煙草能醉人竟無充飲食藥餌者
無以異也嗚乎書也者寔不可信而

信與不信有之信言不美可以警後學美言不信可以娛婦幼儻由正史以評稗史乃圓器方底而已雖俗子固知其難合苟不與史合者誰能信之既已不信猶且讀之雖好亦何咎焉予每歲所著小說皆以此意頃八犬士傳嗣次及刻成書賈復乞序辭於其編因述此事以塞責云

文化十三年丙子仲秋閏月望抽毫於著作堂南牕木樨花蔭



簑笠陳人解識

南総里見八犬傳第二輯摠目録

巻之壹　第十一回
仙翁夢葉富山　貞行暗獻靈書

同巻　第十二回
富山洞畜生發菩提心　沂流水神童説未來果

巻之貳　第十三回
遺尺素因果自訟　拂雲霧妖孽肇休

同巻　第十四回
飛轎使妾渉溪澗　鳴錫丶大索記總

巻之參　第十五回
金蓮寺番作擊讐　拓華庵手束留客

同巻　第十六回
白刃下鸞鳳結良緣　天女廟夫妻祈二子

巻之肆　第十七回
逞妬忌蟇六求螟蛉　固孝心信乃襖曝布

同巻　第十八回
簸川原紀二郎隕命　莊官舎與四郎被疵

巻之伍　第十九回
龜篠姦計賺糠助　番作遠謀托孤兒

同巻　第二十回
一雙玉兒結義　三尺童子述志

統計二十回其第一回迄第十四回既録于肇輯第一巻

山青堂蔵

○上青堂藏

巻舒在手雖無定
用舎由人却有功
三保谷の夢幻の破傘
風のとり
土田の土太郎
綱竹左衛門
交野加太郎
濱路
板野井谷郎

這の編第二の巻に至りて、伏姫の事畫せり。かゝれば第一輯第十回なる題目は、禁を犯して孝徳一婦人を亂す、腹を裂て伏姫八犬子を走らす。第十三回なる題をとりて前に出せしを、發端いまだ畫さねばとて、中に刊行せしもの也。その大さをえらせんとて、物語へはと後なるもその繡像は前に出せり。おほよそ六七巻十四回を前段とせまほしきを、かゝるは書肆の好む所に已ことを得ず。かくて毎編五巻を集て嗣出をなすになん。右の簡端なる出像中なるは、第三輯の巻々までも見えて、説出ものあり。その筆者五倍二綱乾左文二郎。土田土太郎。交野加太郎。板野井太郎。則これ豫てその發端のうちにして、八士のうち人へ定るのみに書肆が責を塞んとて、稿本へかゝる其初へ至らずしもがすら、いまだ考起さず。素より稿なくも画をあつく人後にその画にあはれなる迹あるところもあれど、縡大なるまでは筆の外との人手がかゝ到らぬ事どもかくもなるとあらず。只彼傳書剞劂の急なる慎るものあれば、正さずに違あり。とまでも例のなかばを看官察しねかし。

馬琴再識

南總里見八犬傳第二輯巻之一

東都 曲亭主人編次

第十一回 仙翁夢に富山に栞す 貞行暗に靈書を献ず

里見治部少輔義實朝臣は、山下麻呂安西が大敵を滅して、麻のごとく紊れたる安房の四郡をうち治め、威風上總の畫紛さへに靡ぬ武士なきところまでしかば、鎌倉の両管領山内顕定扇谷定正も、（康正元年成氏許我へ退去の後顕定定正両管領たり。）侮りがたくおもひけん、再京師へ執奏して、義實の官職をすゝめ、治部大輔になしてけり。かゝりしほどに歳と共にうち続けども、義實はいぬる年、安西景連に攻撃られて、篭城困窮難義の折、士卒の飢渇を救んとて、おもはずも一言の失によりて、最愛たる、おん息女伏姫を、八房の犬に倶せ。

渠ハ富山へ入りしのち絶くその安否を尋ぬれど世の人の幾度か隙を
窺まぐふ。いと悔しくぞ思召さ然とそろそろ出ぬ。彼渓澗ハ路狭く
ぶ方ざるのゆハさふ親ふも一切あらせどとも。樵夫猟人ふ。ふ
とのあつもせバ親胞兄弟ハ遭人より。ハ不ハ陥くるるべ。と
ひ。つハ曩ハ国中ふ徇ちらく。元良賤士庭をいらぎ。山神ちろのあり
とも。件の山ふ登ると称ふ。ハ首を刎ん。とぞ。
掟させふ。亦生憎ふ。あさるみとえハ。ものハ金碗大補孝徳
ろ。渠ハ安西景連ハ兵粮を借んとく。苟ふ出くゆ。今ふ。
ちとぞ謀られて擒とるるバ。果敢く命ハ隕ぬ。陣法ちる
べ。功あるべ。賞ハ辞ぬ。腹切く亡さまけ。親孝吉を禁めあくを。
末期ハ誓ひとあるべ。ハでその子と一城の主ハ。女婿ハ。

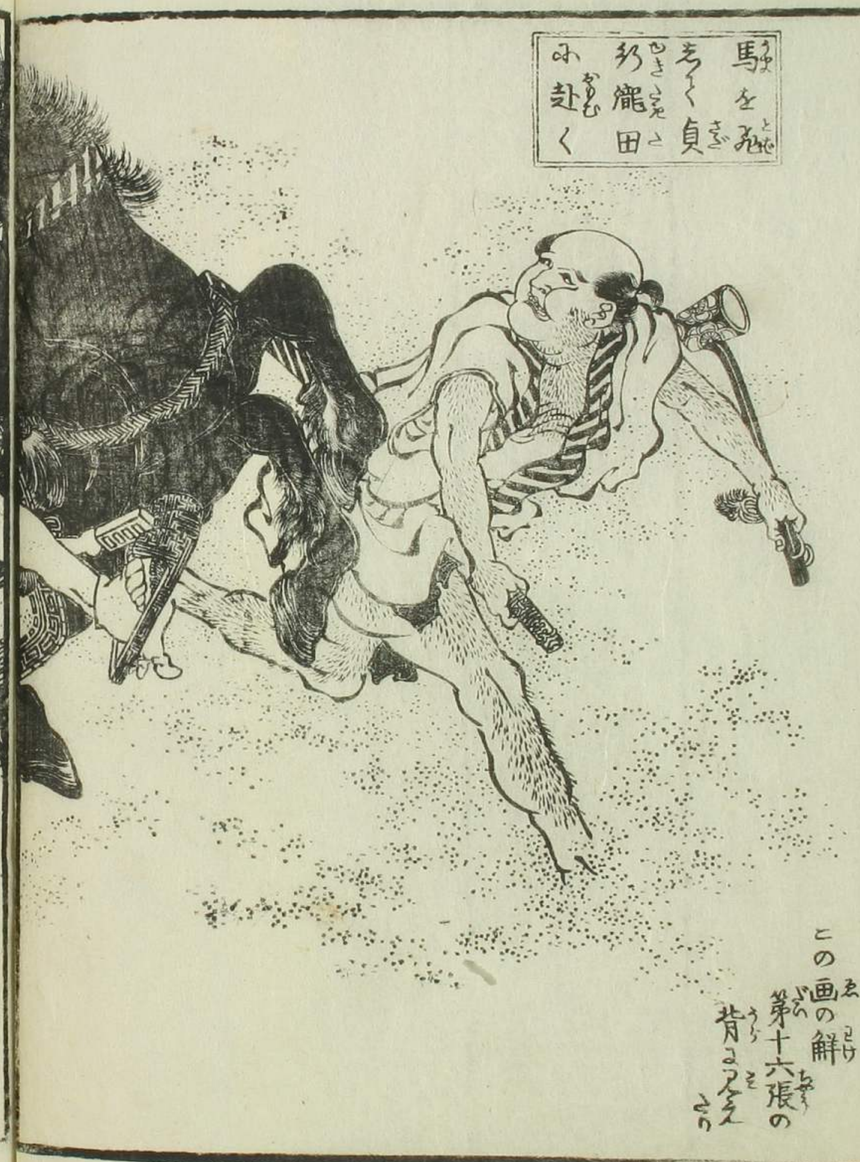
ひ。ものよふ化ぬ。まつせぬ。の八人の人盗ハ翫る月を。去歳ハ
今年ハ。ハ。渠ふ。ふ。ハ。ハ。
るるふ子ハ迷ハ親の常間ハ。ハ。賠ハ。
ハ現百万騎の歓ハ。ハ。ハ。智仁勇の三徳を兼ハ。
大将ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。
子ハ。ハ月ハ日伏姫ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。
明。ハ。ハ。渠ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。
ハ合ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。
ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。
よ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。
遂ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。

まつらさて彼山より歩きてく。おぼつかなくも伏姫を索ねあぐまるとさべくるりこぶ
中ゆ花へありこぶら。山道の凄じさふるを登りでかの麓より還るもあり手
末武家より給事て心ざる雄〻しきものへ郷導者より先ぶるこして辛〻く
こけ入る抜ろう。蚕崎十郎輝武が推流さるてろとい山川のあるこへを郷
導者もおそるるく渉さるど固より川の向ひるへ狭霧時るく立ちめこ水
音おどろ〻く。其処もつえぎ。まるるさるる。岸の茨より花ハ開どを刈乃
席より坐るおもち考く。毛骨ようよろのをあるべ躰く見首ようろ引久〻く。
こるるも本意を遂るるるく。只如此こと告ト甘ぶ五十子ハ又さるる。他
けべさくとるるるる。姫の患苦ハどやあるんひくやあるんと村肝のとる
ゑとうゆち〻量る。歎きの霧の離ゆへ見ぬ身ぞ形るるきこの世るるる人
畜の生を隔くいるまでも。あん甘るるへ雑をゆもとり〻火よるる夏虫の

焦るく物をるんより。るるるやゑん。口纔あんゑ。嗤きるげく泣ゆるる
故るぞ後竟るるゑ病著より外ゆるり。醫官ハ解火壺氷の術ゆゑを人さと
欲るるでも。その功杏林より満るゆるるく。験者ハ西部習合の符より邪と禳と
欲れどもその法枯木ゆ花さくのゆるり。月ゆまり日ゆるひく。りるるゆ治く
ゑんえさせるべ。実ハその疾さる。枕上より立よりく。みぶるる病苦紛るる
傳ゑの老女ゆが。殿のるるるるせるひゑ。とるるるゆるるて五十子ハ女の童
ゆより扶らるるく。ゆるやくるより身を起り。るるるへるるるて実のもん顔つ〻と
向上るゆ。験おちるるる。頬骨のるるきあるるるるる涙の露の玉の緒を頼
さくるるゑ形容ゆ。実もつ〻と。んつ頻ゆ嘆息り。けるゆ心地のるるゆそや今
ゑる五日強くるんまへゆやくおるるるるゆ。ゆるるゆもゑ。ゆのゆもゑ
つるく。乳長く保養るるべと屡めるべ。ゆ膝より措るゑく頭を掉医官を

何とまろうにとも。吹きまどふ痩臈ひく。逐ふぬ旅よ逝水のうづらふべくハ終らぬ
う。病こぶらふハ雖ゆ老るく人。そんまろうさんにも精〳〵ろめ。ようや蓬茅不死
の術不老の薬も何よせん。とてもかくても現身の生のうちのうるひでふ。あみと
くさ伏姫よ今下さびのあみよ〳〵あぶ。らへがための仙丹寿方とまてよま〳〵
たる薬ちを作らんとや此ようさび張たる。婦女の愚癡ぞ。僻みぞと諭
く〳〵ろ人。ろふあるとゐ國の為親のうめよ身を贄ふ〳〵く家犬よ伴まつ足
曳の山路を指てく入ます姫が。倩稀なる心操と類罕なる因果ぞとわりひ捐
させのひろぶ民ふ仁義の君ありとも。子ゆを不慈なる親とまろうさん。
いと憚あるとろう。國よ信を喪ひ。とそその子を棄させるふとも富山も君が
知〳〵めを四の郡の内ろとや。さとぶ年〳〵月毎よ安否と問せ。みづうらもいわれて
ろの〳〵ろまもせば迭よ憂苦を愛るよとろとものと絡〳〵ん。樵夫炭

焼牧童ホまろく件の山よ入るとも禁めるろいつゆぞや。よ〳〵や齋忌〳〵三蹟
所ろとも誠を推せば親ろり子ろり。國の守ろる威德ろく今ろ月姫を
恙なく彼山ちくよあるとやろや。ろろまく思ろるふ難くをあらぬ所約
ろろべ〳〵ろひたるせるろどや。是のを今救の孰ひよ結ろよ。ひつよ〳〵と恨ろう。
勸解つせふ〳〵ろ息ふ吻ゆ。ひろ口縋よて義実ハ默然ろる頭を擡ひ
ろ呼道理ろり。縁故を推とろふ。ろぶ一言の失より。子を棄恥を送ろる。
もん分ゆま〳〵ろひたろり。朽をくやろざろん人木石よあらざるふ恩愛の
絆ゆとろく執着の覊釋易ろぶと意の駒の程ふまゆく。まくよ煩悩ろ
犬を逐ひ公道とろ果ろく侮ろ浸まろのあふ本例再び乱ろと。懼ろひて
情を剖欲を禁めてろろぶ山児ホまろぶ彼山よ登ると吹聽ざりろハ姫が
ろろ恥ふ掩ひ愛よ溺まろく法を枉則を喻ざるろぶまろを民よまろせん



この画の解
第十六張の
背ろ

山青堂蔵

ゐるゐるとども。あん内ゐ歎き不便ゐり退きさく思慮をめぐらし。姫が安否を
ちらちとべく。母まさくいひ母へと諾ひ母へば五十子ハさてハれころ鮮ゐふ欬病
煩ひ臥ハいふ〜そよふ有ざうれ仰をさうん。ゆろ役へ憂きのめたるふそハ
いつ況ふ始ゐべれと。問まく雲時続吟ぐ。輙くもあふぬ呼ゐろ。あん内ゐ
ゐるよいそがさび遐くもどして吉左右あうん。あてふ内を愛し。候ひひ孫と叮
嚀ふ応く賦て武実ハ外面へ出母へ女の童ホがゆ孫ゐく。後ゐ跟き又先ゐ
立く。迴ゐ送りをまぬこのとれ武実の嬌男安房二郎武成ハ去歳ゐるゐ真
の野ゐ在城ちく。安西景連が殘黨武対成げ。彼処を沿めゐふのうふ。母うへ乃
も病著いと危し。と仰くて日ゐるゐ。老臣杉倉木曽氏元ゐ城をゐるゐ瀧田ふ
き
来まして母うへを真成ゐ着とゐるふ孝心等所ゐるゐざゐ武実ハ更闌ゐく宵ゐ
武成を招せて件の緯の趣をおちゐるく告ちゐ。ゐ荀ゐ五十子がゐ仰やとく

さけんゐるふ忽率ふ諾ひ。輝武を本ふ〜く。おそゐ見ぬ人もゐる山へ雉をゐ遣りて
姫を紡せんゐ。ゆや不敵のゐれあゐて。彼処へ使せんとゐゐとも事ゐ遂ゐて。ゐるゐ
威と賜〜く。その対も其処ゐ亡びゐん。とても叶くても難義ハ和殿ハ何と思ひゐふ。
と問せゐへば小勝武まく見某もとのゐハ侍女ゐ。ゐるゐ仰ゐ。ゐ
絶く。ひさ〜き嫁ゐの安否をちゐふ。ゐるゐ幸ひ最歓〜ゐへども賢慮
寔ゐその所以あり。呼絶此彼と人を撰く。家臣ふ仰対ゐく。ゐそもゐ。某ハ
三人ゐる。嫁君の武ゐとゐ〜ませば武成ゐ兼ゐて富山の奥へ。ゐけ登ゐ人ゐ。
索絶あゐで。ゐハ己べ見縦彼犬ゐ霊あゐて雲を起し風を鳴び人の目を惑ま
とも妖ハ徳ゐ勝ゐとゐり。母の慈善を盾とゐ。父の武徳を鎧とゐく。家傳の
弓箭をゐ狭ゐ人ゐ絶く障礙ハあゐ。ゐ命させゐ。と精ふ言ゐせゐらく
巻武捺ゐく。ゐや打立べ見乳色ゐる。ゐ実ハゐ武抗く。推禁ゐ頭とゐち掉

和殿はいへば血氣の勇のみ。智ある人は事に臨で。おそれて謀を好むといふぞかし。父
母在ときは遠く遊ばず。況危きに近くべからず。子として父もあらね和殿は家の
柱石なるに漫に早まりて過失あらば。悲しき不孝なるべし。さればとて吾も亦。祟を
おそれてくだくだしくいふにはあらねど生涯あひ見ることかたし。別れてし姫は玉匣手のもの
やくとせのけふに紀ぬ嫗をもなるとよりは綉せんと新獲れ呼約なりしが育める
わくおなりしさればとて今宵に限るとなれば再くもあるまでまどもあらんこの婦侍女
們までおもく猛為させく外へな洩さぬやひそと諭して許しあらば義成は又さらに
なりとも言葉あるべく畏りて退出する義実はそぞろに臥房に入らせ給ひ
ども寝もねまらぬとやせまし。かくやせまし と思ひ去るてもや暁ちかくなりし比ほく
どもまどろみ給ふ夢のうちに。富山の奥の溪澗の。ほとりなるこの山岸に立在す當下齢は
八十あまり百とせもちかき一個の老翁あり背後より来りて。義実にうちまもりて

あの山ふかく入らせ給ひなば。おん郷導仕らん。されどその川はこゆしがたし。右手のかたに樵
夫がかよふ一條の細道あり。去歳よりおなじこの山の樵を禁斷せられしかば荊棘
いやがうへに繁茂りて何処が路径ともしられず。僕既に枝を折りけり。或は草を
結びおきしなり。葉をそへてゆかば其処よりおん供仕らずとも迷ひ給ふべうもあらずと説示て
本意を遂させ給へ。彼方より進せ給へと指し給ふ。となるを義実は不思議のことに
おぼしめし。その名を問んとし給ふに忽地に見えずなりぬ。是華胥國の一夢にして
寐の夢憑むに足らずといへども。上なく心に意ふかくとめさせ給ふ。その朝も此彼と民の訴訟を
聴定め給ふ。ひまなく裡面に入らせ給へば土圭も未だ近き頃なり。浩処に一個の近臣郎党の
よしやありて恭しく額を著堀内藏人召に應じて。東條より来り上せりと
上ればは義実は眉うちよせて頭を傾け。こは貞行をよびかへるところに。五十子が
病著を惜のくみがたく来にけん。そはともあれかくもあれこれも問んと宣ふことあり。

よりて折ふるふ。おのく〳〵召せとくく。といそぐして且く左右を遠ざけつ。欣然として
候のふされば義人貞行はいとこく東條に在城をく民を撫育の仁篤く一郡
既に治まるあさまど日ふ三省の教をもちて且くも安坐せざりつづ勢に暇なけ
れば去歳より滝田へまうざりふ。ゆるしをうけ今はふ見参入りしかば。
義實はほとんど近く招きよりて坐を賜ひ義人差ありし秋後東條に今こそ
日よりまされ亦三虎の經言を仕うべ。その忠心の致を所欽びとはふまことに
此度の系府は五十子が疾病危しと稱彼に安否如何ん問ねる欲と同せるべ
貞行はせのもふ頭を擡げ綻てんひへども曩ふ君命を受し日より。彼一城を成
るとも某が職分なるふ。よしや意中ふ見系府歟或はとも兎幸を蒙りて系府
べうあらをを火急の召ふ物とりあへず。只今系著仕りぬさ系召とと宣へ
ん歟とるやあらんとぞうん。といふ

その召。何さまくて載まるよ。妙をとるべくと召よ及べき且何のゆゑ命を妙に稱
へく繰引さる。燈人ありや見つるか。と敦圉の人ば貞行も意ゆるべくおの人ども
騒ぎる亂をるく。彼綻をえまこの裡に所行へさりるべう一條偉の題をヤ
上人。さのふ老こる雑色ぞもん使ふるよ系告る。東條へまふ系ば出てるる。
認らぬのの人紛まるべう遣る。君命系義ふ彼ん使某に告てのふ。ふ爰
夫人のもん形ひよりも。屋方みづうう冨山に趣る伏姫君を紡のもんとそ。ぞるく
その用意ありさる是晴うるとゆへあるぞ。ものびくの狩倉ふるく音ふやえ〜高
峯うるふ非常の備うるくへあるぞ。さるとべとて後者を鞭ちてもんへ不便えうて
此度のもん供ふへ和殿をとそと思召て俄頃に召さをのふるうん某へこの年来溯
崎の嵐のなるとりふ処る名もうる下司ぞ人ども件の山の業内をよく知ることと
聞召に郷道まるとくに召よ出とこのもん使さへうけるうて老足ぞうう走

まつ則殿の御教書とく禮ふ掛さろ紙巻〳〵解かろ〳〵遞ふせ〳〵ふ某持
見仕るふ翁が口状も符合さるまつるふ疑ふとろく件の翁をくまと
ぞて馬よ鞍ちえうち乗る。後者のつづく紙俟ぞ夜をまの先途をいそぐ〳〵。
御館よ帰まてうけまつるふ縛みろみ案よ相違せり。原来彼翁を癖者ふ
極るとと必へどもやぶくさえ御教書ハよくふあるとを商せと懐中より。
そう生く返〳〵なるふ義実さやくとうち抜きこるふいろふと負紙ぶ二分ふ引
向くうせ〳〵負紙再びうち驚き。現某がさのふこん〳〵丈字ハさくふ和とろも
ろく。如是畜生裴菩提心と二行八字よ変ぜ〳〵ハ奇ろ奇ろとさるまふ呆
るを半晌あまり又ふよりもるるとけり。義実ハとの一句よ忽地瞭うて巻おさえ。
義人汝がまろを呼偽るふ〳〵不思議のるふ抑さのふ使者と称〳〵ての書と遞
よせ〳〵翁が年齢その面貌ハいろまを(ほ)洋よ告よと宣へ。負紙義さる乱色ろく

件の翁ハ八十あまり。百とせもの及ぶ〳〵眉ハ長う〳〵て綿花を重ねるごく。歯を皓〳〵て
銚核を連ねるふ異るふ。弱ハ瘦くまとるとと見ぶいと弱う眼光
人を射て威あまとるも猛ふるどよふのふ道顔仙骨とふ楽るぶ〳〵とまるとあぞ。
義実ハ思ふまるも。常ふ丁と拍ふるもあるも似るる奇怪あり。そふ疑ふハうもあるぞ。
洲崎の崖ふ迹垂のふ役行者の示現ふ且ちめより告ふと夫人よ諾ひ(ひ)。
伏姫の安否を汎ふべふるふ又義成の孝心勇氣ぞひつ〳〵とく〳〵ふ一義よ富山の
奥のちるさる岸よ遊びくろのごふ翁よ遭〳〵縛の趾首尾を説ふ(ふ)義ハ
五臓の疲労よ成る頼むふ足ふぶとろひ〳〵ふ汝がまろ〳〵つ。翁の面貌ろ
義ふ。ふえつるのと彷彿ろ。加誨如是畜生云云の八字とのく。過去未来と
示せふ。伏姫稱ろ足ときヨヌ病みろ〳〵嗄音ふえ〳〵ふるふ洲崎の崖ふる俊
行者の利益よりて後健よ生育ふ。この折よ感得せ〳〵。水晶の念珠ふハ仁

義礼智忠信孝悌との八乃文字あり。この後篭城難義の折。わが一言乃失ゆく。姫を八房に許せし日件の八字は消滅して。その後ふに如是畜生発菩提心と綻れたり。因てこれを思ふに女は嘉吉二年夏の季。伏日の比生れしかば名を伏姫と喚做せしが。後竟に人にして犬に従ふ名詮自性。それ将脱れぬ因果なりけんに。果身を棄る縁故は。親の為国の為。仁義八行を世の人に喪せじとの為なりしども苦節義信の善果によりて。如是畜生に誘引れ遂に成等正覚に入れるものなぞあらんぞかんと思へばもちなめて暁りえけれど。敢復姫を禁めんや。渠が望に任せしよりはや二年にあまりぬれども安否を訪ず。訊せもせず。樵夫猟人にまじく彼山に入る事を禁めしに今五十子が疾病危く。その情愿乃黙止がたさに姫の安否をきくよしもがなと思へども子は思ひ難つる事が夢なりし翁の面影この書を汝にとらせしといふそのゝちと一点ありて見ゆ給といひ恰といひ。

神変不測の應驗あれば。義実が疑惑氷解し。富山の奥へ導きなる行者の示現疑ふべからず。かくて是法度を犯し我意を枉て伏姫に再會の時到れり則權者の示現に任し汝をおくらるゝなり。このこと沙汰きこえなば人は唯奇を好むものなれば示現靈應想ふでかゝらの姫にあふとあふぶ民喋ことと奇を談じて言はしなるは鬼神の徳が淫さん又彼山に赴くといふとも。終に伏姫にあふことなく夢を信ずく影を逐ひ假を認て風を捕る義実が愚を民に知らして世の胡慮はなりぬべし。大約此度の従者は汝が外に列卒十四五人ならん欤とて言ひつくる寡きものよろづ老実なるを擇ぶべし。翌はつとめて出立なん準備をせよと且示し且命じぬれば自然ありく感佩ありて敢復一議に及ばず。既にして姫が幼稚とありし時役行者の灵驗利益彼水晶の珠数のなげありしも忘れ此度の奇特に符合せりと思召合されしは亦但君が睿智乃

霊書を感ぜ
ちく主従後
疑ひ解
如是畜生
發菩提心

徳併姫ゑ人の至善節義ふあらざりせば。豹まぐ奇特いかゝ。今打鎚を外るゝ
とも。伴判官ハ錯ぶべうもなき出遊山のうの去るべいそぎ出でゝと急まりしく駕て遠
侍ふ退出り。義実ハ意ゑ秘〻く件の繻の麁を夫人ゑも告ずゝ只嬉男
義成ゑ如此こと密語ゑくべ。義成も亦感嘆〻く已ずゝ父ゑ代まて彼山へ
赴ばやと思召ども。検者の導なのふめ。こゝるゑうざるふまべ。特ゑこの
日ハゐん毋五十子。いよゝもゝく病つゑ。いとも危くゑえまべちう及ばど
留ゑのふ義実ハ五十子が生前ふと伝いそ〻く。その夜の曙ゑ紙ゝちゝびく。
長挾富山の麓ゑる大山寺へ詣のふと徇さゝく未明ゑる出ずふ微行のう
ゑまべゐん供ハ堀内義人負弓ふ以下七人ゑハ過ざゝき。さる程ふ義実ハ負
行と二騎馬を並ゝ只管ゑ鞭を揚。足搔を早めひ〻べその日のうちふ
乗著ゝ。ちや富山へぞ登りのふ。とゝく〻〻く山川のほとゝもぐ来ゑ巖石

の形状樹木の光景ゑ〻〻〻〻夜の夢ゑ〻ど試ふふ荊棘をゝ〻つ。途を
索ゝ一町あまゝゑ。右ゑのうゝ入まゝ〻ゑ果〻く枝を曲草を絞て往ふ葉あす
けゑ。主後今この葉をゝ〻く。のうゝど目と目を注まゝまで信を増〻〻勇ゝて。
迴ゑ後方をゝ〻ゑ。ゑべ負行ゞ外。歩立ゝゑ後者ふハ遠離ゝく。続くゝゑ後て臣。
且〻く馬奴只紙とり。喘ゝ登ゑまふければ義実ゑ紙殆覺ゝて既ゑとの応験
あゑべ。他人ハ後ゝも要ゝ。彼のゝゑ馬を牽〻。麓へゝ〻て供ゝちゝ者ゑとゝ
とゝ〻とのそゝ〻ゑべ負行ハゑふ為果ゝ。件の男を呼迫づけ。山掘ゑ繁留ゝる馬を
指。如此ゝと。仰ハ待ゝく麓へゝし。ゑとゝゝ主後亦二人葉ゑ途絶ゑと発ゝ。山
蛭ゑ笠を傾け。葛藤ゑ足を取ゝゑ。ゑべゝ〻〻く迷ゑ高く声をゝけく。羊腸なる
山ゝち死其首とゝるゝゝど躋ゝゝつ躓ゝ。辛〻て進む程ふ。彼川上を巡り来ゑけん。
樹の下周をゆゑ照ゝ。月のあゝゝゑ出ゑけゑ。

第十二回　富山の洞に畜生菩提心を發す　流水に沂く神童末来果を説く

濁世煩悩色欲界。雖ら五塵の火宅を脱れん。祇園精舎の鐘の声は。諸行無常の響あり。とゞめ難き。飽まで色を好むものは。後朝の別に死惜むが故に。只とゞ死しも無言と。悟り。沙羅雙樹の花の色は。盛者必衰の理を顕せども。徒に香を愛るものは。風雨の過るをとを妬むが故に。偏に延年の春を契れり。観ぜよ人間の世。親せざるも亦義の世に。孰か幻なりけり思ひ内みるものは。龍華の三會に値ふといへども。凡夫出離の直路を求めず。覚て復悟るものは。虎穴龍潭に在りといへども。瑜伽成就の快楽を求めず。世を忍び捨て。富山の奥に入て。春と秋と送るうち。叔母里見治部大輔義實の為に息女伏姫は。親の為又國の為に。言の信を黎民に失はじと。身を捨て。八房の犬に伴ひ山道を指て。入日成隠に。後は人跡も絶て。岸の埴生と山川の挟山の洞に。真菅敷臥房定めて。冬籠り。春去来れば。朝鳥の友呼ぶ頃は。八重霞。高峯の花を。ながめて。弥生は。里の雛遊び。垂髪小女。水鳴る成二人双居。今朝は摘む。名も知らぬ。草。雑掲て。三の日の餅に。あらぬ。菱欣の。尻掛石も。書ふるして。稍暖。死苔衣。朕の。袂涼し。死松風に。流れて。夕立の。雨に洗ふて。乾き。髪の。蓬が下に。鳴虫の。秋と。なれば。色々に。谷の。のもぢ。巣織。映し。錦の床も。假染の。宿と。なるぞ。鹿ぞ鳴く。水澤の。時雨。霧。間なき。果は。其処とも。雪に。岩が。枕角。真木も。正木も。花ぞ。さく。四時の。眺望は。あり。なぐら。ひ。しく。處。自物。膝折布に。外に。立ぢ。後の世の。為とぞ。ろ。経。文。続。編。書。写。の。功。日。数。積ぶ。ら。ん。も。憂に。刻つ。憂し。と。せど。浮世の。ものは。ぬ。ぬ。乃。音。獣の

声さえ。一念〻布施の友とたのむ心操にて殊勝なる是より先八房に伏姫を
脊に乗せこの山に入りしと。廣沢流水を帶びたる山峡に洞あるを石門
おのづから鑿りなく彫るごとく。松柏西北に聳えて牆をなせり。この洞南面に
まてその裡に亦閒うまと犬ハまたる住りなく。前足折て伏まれば姫うへまそを
意を曉りなく。徐に立てこれを昔も住まる人やあるとえ。裡おのおの離
まる圓坐と燒捨まる灰をかつぎ殘まる。世を捨つ世に捨られて。この山に山
ごもりまつるものなり。ゆゑ身をとりまるあらざるとえとりごちなく進みいり。そゞ佐ふ
坐を占めるに犬ハ姫の傍にまり。滝田の館を出るとえ法華経八軸と料紙硯ハ
身を放さずこれまでも持来りしかば。この夜八月下ゆ続経しておのづからなを
明しまに彼感得せし水晶の珠数ハ掛て今まに襟にあまに懸む呼ハ神佛乃
擁護の三人の言結を大きなるまでに生まれつゝ人と成りこの玄牝これを

嫌しなく。深山の奥へ伴ひ来つる欲さまでとも。情欲の不覺に蔓るとあらば。遂に
ちゞ先の誓ひを忘れ人婦ハ紙挾まく。ゆゑ身ゆ近づくとあらば主を欺くの罪
逃れ
渠にあり。只一刀ゆ刺殺さんと思ひ決てふうち騷ぐ胸を鎮て潛ませゆ護身
刀の袋の緒を解捨て右に引著て。又続経しまにまを乱さじ
知らけん八房ハ近くもゆらまで。只恍と姫の顔を眺て。又起てこれつ。
古を吐紙を流し。或ハ毛を舐り。鼻を舐り只喘ぐと頻りに。ありまつるまく
明しつ。その旦八房ハ。起て谷に下り。木果蔓根を来て。衛めて来て。姫君まで
まあるまる。恁地とすること。一日も懈らず。けふと暮し。翌と明しまに。百日あまり経る
を。彼ゆ八房ハいつとなく。続経の声に耳を傾け。心ゆ澄せるのごと。復姫に
眷らまで。伏姫のひまに。彼関寺の牛仏ハ載まく。栄花物語。峯の月乃
巻に在り。いとゞや又犬の梵音を扶べるまで。古沢草紙に敷まるあり。佛の

悲しハ穢土穢物を婦人のうらぐとさとび天飛ぶ鳥地にまる獣草葉に聚食く
虫江河の鱗ぬやぐく。悉皆成佛せざるとなし。今との犬ぬ欲を忘れて流
経の声を聴く歌楽に如く入婦の友とする。皆ん経の威力ふよりて。佛
釋尼時ゑ吾倩のとくせを示させ給ひ〳〵。役行者の冥助ゑそと最尊く
ゐひとりて。ひとく流経を怠ることなく。日ごとに八の珠数をおり揉く。遥か
洲崎の方ゑ祈念〳〵。又あるとき八父母のおんゑ。経の偈文を謄写〳〵く。
前なる山川ふ流〳〵。春ハ花をゑり折く。佛ふ向ひ。秋ハ入る月ふ嘯て坐ふ
西天を意ゆり。さとび山果腹ゑ落く朝三の食秋風ゑ飽き。柴火爐ゑ宿りて。
夜薄の衣寒氣ふ防ぐ。八歩山嶮けはしとも。蔬を首陽ゑ折るの怨なく。
岩窓ふ梅遅けはとも。鶯く胡語を学ぶの悲しる。姫ハ幼年二十ふ満ぢ。
容顔固より玉を欺く。巫山の神女が雲とるる〳〵。夢の面影を留め。小野

小町が花ゑ凡〳〵歌の風情を残せり。金屋の内雛障の下ふ蓬ゑ〳〵日ハ更ふ
いとど。今山居久〳〵ゐるまく。衣裳ハ垢つ汚破れ。されども牝唐ゑ残雪より
皓く。雲鬢流ゆゑ由ゐくゑとも。緑鬢春花より芳〳〵。細腰のよく痩て風ゑ
堪ざる柳のごく。玉指ゆきく細りく。色ゑ悩る筆ふ似くり。その素性をかゝふ
とゝ八安房の國主里見氏の嫡女ゑ。心操を論ゝ横佩ふ。息女中将姫
ふも愧るとも。草書又續書ゑ。父の才を稟ておのづゝ理義ふ怜悧く判縫又
管絃ハ母君のふふ習せ給ひ。その調ひとゝ妙ゑ。愛たゝ未通女ゑてまく
やとふゐゐゐゑ月下翁ゑ妬まて。非類の八房ふ伴ゑ。よふ残まく。たゆゑ
ゐゐゐ精細ゑ写〳〵出さんとゑ。筆法り心痛ゑ。當時の光景想像ゑ。
さゑ程ふその年八暮く岸の小草萌出谷の樹芽も翠をゆゝ比。有一日伏
姫ハ硯ゑ水を滴んとく。出て石濱を掬ゆゑ。横走せ〳〵止水ゑ。影ふん

なんぞその體は人にして頭は正しく犬なりけり。思ひかけねば堪ぬばかりに吐嗟と叫びつゝ身を退きて又立よりて見るに。その影は更に異なることなし。これ心の惑ひなりけん可惜瞻つぶしにけりと思ひかへしつ仏の名号を唱つゝその日は經文を書寫しなどするに胸膈くるしくて次の日も心地例ならず。この比より。又月水絶てありしほどに月日すぎて累るまゝに腹張て堪がたし。只腹満などいふものにやあらんとて死給ひ。といひあふほどもなくて春は暮夏過て。いとゞ悲しき秋なぞあらぬ傳に去年のこの月瀧田の館を出しその身の病著にかひなく。只痛しきは母人なり。泣つ送りおくらせし。その面影のみ目に添て忘れえともはゞに忘らまほしき母人も如此ぞかし。まもらん。ゆくらぬ上は久しくもいひつげむ細りて。病きづきひぬるにや。家さへの君家弟兄成ひとまりしくおそのうち遠国なる。郡に在るをば里遠離る山鶏の雌雄なれはあらぬ親同胞峯上隔て影なきぶ。つれるよしもあらん哀別離苦強面なのは蜻蛉の命ならずと思ひあへず四月にあらん。百拝に岩に額づき当て一声ごとに泣ながら目を拭ひ悲泣て愚痴なるまじき棄恩入無為報恩者と仏は説せたまひたる恩愛別離のかなしきを。不二要門の意楽に換んやかゝる所はみな親のためなりけりと思ひなほ罪なりけり。三世の諸仏ゆるさせ給へ八房は求食ありて郷に出ていまだ帰らず渠まじる食を求めて獲ざるよしなくえりまたも吾侍亦仏に仕奉る念んや露まへそぼちぬるぞ。深山は草の花も稀なり。宴く手向ならんとせつまぢらで出すまじいと重たなる身を起し。流水にそつく棕麻形の林がくの菊の花を折んとてぞ二三町裳濡らして進みのけ浩乱に乾たる重山の根方に當りて笛の音幽に聞えけり。伏姫耳を側て。あやしやこの山には樵夫も入らず。山児も住せずこの処へ来る日より。きのふまでも人におとなひするものとてはなかりしにと思ひ

ゆくゑ笛の音のまにまに指さゝ行ゆくゑ。草刈りの迷ひ入りしろ。さてこそ魔魅山鬼が障礙ゝゝ。ゆく道ゆを殘さゝやあらんぞとてもゆくても捨こゝ者なり。何ぞ吹りて処隠るべゝ且その女ゝ此ゝ向さく立ちふ笛を吹燈ゝゝ。間ちくゝ吹ふと見れば一個の童子。その年ハ十二三ばかり。腰に鎌と鑓を挿鞍ゝハ両箇の籠と掛くふ一管の笛を含り。黒さ牆に尻を趨ゝく林間を出くあゆませ来つ。伏姫を尻目に懸てゆく草笛の音をとゞめゝゝ。牛を流水に逐入れゝく。渋さんとする程ふ伏姫へ忙ゝ。よろゝと呼ゝ。そゝゝゝいづゝの里の子ぞ。人迹絶ることの深山路へ。ものゝ来ぬ者ゝ為ぞゝゝ路に熟さるゆゝ如し。吾倩を去ゝゝと問ゝゝば。童子ハ莞爾ゝゝ。ゝとゝ矣ゝゝ。ゝづふ笛を襟ふ挿ゝゝ。何でふ恐さゝゝ人ゝ選ゝれを識らぞ。人のゝ人我ゝ人ゝ今洋に告まゝ。さゝゝハ雖ゝ亦ゝゝゝ人ゝゝ

疑を解ゝのあゝゝ抑ゝの山ハ樵夫猟夫いづれさゝ。猿ゆくゝのゆ柿ふ越れゝ。あん父君義實朝臣。あん刃ふ入ゝゝゝゝゝゝ恥ふゝゝく思食去年よりゝゝゝの山へ人の入ゝゝゝ行ゝゝゝ。ゝゝハあゝゝゝゝ迹絶ゝゝ。ゝゝハ君ハ只ゝゝゝく思食姫の安否ゝ訪へゝゝゝ。専女妳母ホゝく遍ゝ密使ふ立られゝゝゝ。ゝゝ兄蜜崎十郎ふ。敵の仰ゝ兼ゝ。ゝのびゝくゝん刃を選りゝゝゝゝの山川ゝ瀧ゝゝく死せゝ。ゝゝふおそゝゝて後ゝゝまで渋ゝゝのゝゝ兄故ふ密使ハゝゝゝふ。あゝゝこの岸ゝゝゝゝのゝ。あん刃の安否ゝゝゝゝ由ゝ。ゝも亦天ゝゝ時ゝゝゝゝゝゝ告ゝゝゝゝん。ゝれハ只牛馬のゝゝゝ芟ゝゝのふゝゝゝゝ師ハこの山の麓ゝゝゝ。又あゝゝゝ兄ハ州崎ゝあり。その壽幾百歳ゝゝゝ兄ゝゝゝ常ゝゝ人乃疾病を療治ゝゝ。又賣ゝゝゝく生活ゝゝゝ。ゝゝ某剤を投ゝゝゝ兄ハ死ゝ救ひ。壽を保ゝゝ兄萬病治せゝゝゝゝゝゝ又著を采ゝゝ兄ハ未然を察ゝ既往を

○山青堂藏

草花を
ゑぶ祝ふ
伏姫神
童ふあふ

伏姫

審みぶ百事中らぎとのふとなけの八ろ且師の命ぶ禀て茅ぶ採らんゐみ
まれり。寔ことの山ん人の往還禁断ろ且とも。程きうぶ舊のとく山掙を行
さ為べ〜ろぶ師こ且ぶ為ゆ為ろ茅ぶ採〜ものとふ伏姫ゆて嘆息〜。
現二親のゐん慈悲だり。月日と共み照さね隈なり。身を穢さ且ぶ潔く。
やてをるとも知召ぶべ。如此計ゆせのひけんさ且ぶとく。ろぶ才ゐとの故を
りて。蛍崎輝武ゆ溺死させ。樵夫幸雄ゆ生活乃便著を喪ものく
ろくまど蔵ゆくものく足さゆ駐ろ八罪ゆ且行させさまゐとひけて。うち
酸鼻みひけ且〜く又童子み對ひ。そろろゐ名盤ゆ仕るとゐふ人の疾病を
治ることゆ。さぞおとまびくあゐんぞゐ。今試み問べ為ものあ且吾済とろ
春の比より。絶く月水をゐぞ。胸ろ為ほ〜く煩〜く月ろみ才ゐおくりぬこゐ
何とゐふ病症ろゐゐと問せのゐんがうち微笑婦人経行閉塞く後一両月悪

心〜く酸ゆのゐ妬む。俗ゆこと且ゐ悪阻とゐふ。三四ヶ月ゆ〜く。その腹既み大きく
五ヶ月ゆ〜くその子稍動くとあり。婦人ゆくと且ゐ為ものとゐ。
やでもろの〜ゐん才ハ既ゆ懐妊〜く。五六ヶ月ゆ及び為り。何の疑ひあるべ為。
ゐゐ伏姫ゆ為ゐ。ゆ為てろとをゐふものろゐ。吾俗ゆ良人へろの為ぞう。去
歳のこの月このゆ為ゆ入りみ〜日よろ且人をゐんぞ。一念称名読経の外ゆ。他ゆ
ろ為ものを。何よりて有身ぶべき。ある鳴呼〜や。と嬉ろて。ゐろぞほと笑ひ
ゐ人ハ童子ハうちろ為く冷笑ひろぞゐゐん。才ゆ夫なろゐん既ゆ親ろゐ行され
ろ八房ハと且何ものぞと詰且ゐ姫ハ貌を改め。そろろゐハ只その初為知ろ。その
後のゐ為ろゐゐゐゐ云云の故ありく。二親も治禁めゐろぞゐゐ。ゐ残ゐ〜く家犬と
共ゐ深山ゆ月日を送且ぞゐん。経の擁護ゆゐゐゐく。聿ゆ才を穢されぞ。渠ゐ邪
ゐん経を。聴く且為のゐ欺ぐり。縦燈据ハろ〜とゐふとゐろぞ才ハ清〜潔く。神ろそ

ちぶせまろんかうそや非類の八房をろる分ありくろ[illegible]ろんどゝ伏もうとは。
機ハ。よ[illegible]ろ元童子拘ひうけく。悔ろ元と腹立てうち涙ぐゝ[illegible]ろん童子ハ
かゝるくうち笑ひ[illegible]よく絵るところあり。又精細ろろよ[illegible]あ[illegible]。ち人分[illegible]を
その一を知ろいまゞその二をろうざるあり。さゝび表ひを釋まあうせん夫物類相
感の玄妙ろろハ凡智をろく測るべくもゞ。譬ハ火をとるのハ石と金ろろ[illegible]
ども檜木のごとハ友木の相侍ろ元ろて。亦その中より火を出せり。又鳩の糞年と
孵ろ。積と黍ろ[illegible]ば火ろ元生。[illegible]ろハ寔ろ理外の理ろり。物ハ陰陽相感せ
ざ[illegible]ハ絶ろ子を生とは。但草木ハ非情ゆゑく。松竹ろ雌雄の名あり。さろ[illegible]
交媾るのろあゝども。[illegible]ろも亦よく子を結べり。加以。鶏ハ十歳[illegible]て尾らず。
相見ろよく孕むとあり。ゆゑ有ゆ。秋士ハ聚ゝ[illegible]く。神遊ひ春女ろ嫁ず
ろて懐孕り。ゆゑゝや唐山楚王の妃ハ常ゆ鐵の柱ろ侍ろ元伏びく。遂ろ

[illegible]を産ーうゞ干將莫邪劒ゆ他ろ我邦近江ろる賤婦ハ人ゆ賣裝を
押ろ元伏びて竟ろ脱を産ーゞゆ孕村の名を送せろ。皆是物類相感
ろく数ととろ只目前の理とのく推べくもゞ。ち人分ゆ懐胎ろのゝとこの類
ろるのゝ伏何疑ひの分ゝ元。ち人分ハ真ゆ犯さとゝろゞ。八房も亦今ハ欲る。
ろ[illegible]ども。ち人分既ろ渠ろ許〳〵とこの山中ろ伴れ渠も亦ち人分を獲てとろゆ
ゝのゞ妻とゝりろ。渠ハち人分を愛るゆ。その淫を聽くと伏欲び。ち人分ハ渠ろ
帰依ろる所ろ。是ゆ答ー元をのく憐そのゝ情既ろ相感ゞ。相傍とのーと
いとも。ろゝゞ分おのくろゝざゞ元。ゝ[illegible]元つく相ろろゆ。胎内ろの於ハ八子
ろゝん。ろゝハあ[illegible]ども。感ゞるところ寔ろ虚ゝ相偶て生ゆ。その子
全く體他ゝゞ。ゆくゝち他ゝゞゝくゝろゆ生れく後ろ又生[illegible]元是宿因の致ゝ
所。善果の成る所ゝ因とハ何ぞ。譬ハ八房ゞ前身ハその性僻る婦人ゝ渠ハち人父

義實朝臣を。怨ることあさからず。寃魂一隻の犬となりて。伏姫親子を辱しむ。是則宿因のなす所。果して何ぞや。八房既に伏姫を獲て。遂に伏姫を犯すことあたはず。法華經讀誦の功徳によれるなり。かくてその忿怒を散し。共に菩提心を發すが為に今その八の子を遺せり。八ハ則八房の八を象る。又法華經の巻の數なり。夫萬卒ハいと得やすく一將ハ輙く得がたし。後々に至らんにその子ら智勇に秀。忠信節操。里見を佐けて。威を八州に輝かさん。是伏姫が賜なるべし。維ハその母を拙しとせん。是則善果で。抑禍福ハ糾る纆のごとし。何人か今の禍を見て。後の福ひあるよしを知るべき。世の嘲哂ハ好憎より起る物乃汚穢ハ潔白より成る。さればど誹謗も厭ふに足らず。恥辱も只よく忍ぶべし。隠れたるより顕れたるはなし。蟄れるものハ必ず出。さればまた自然の道。犬ハ懐胎六十日。人ハ懐胎十月。人畜その差あれといへども合してよくに推しえき。

伏姫が懐胎六个月と七の月にしてその子産れん。その産るゝ附するがごとく。親と夫にあひあらん。是より已前ハ未来未果なれば。ここに言を釋せば天機を漏すのおそれあり。されば後に又入るべきあらて。その子の名を知ることあらん。今ハしも是までなり。秋の日和の短きに長のぶかり。嗚呼あらそさそみこの師のうはらなりんにさやかなりんといひかけく。牛の鼻つら牽入レ山川へさと逐ひ入れぬ。渉をとつて。玉かつらか。影ハ秋霧に立籠られて。往方もそこと知らずなりにけり。

里見八犬傳第二輯巻之一終

南總里見八犬傳第二輯　巻之二

東都　曲亭主人編次

第十三回　尺素を遺く因果をづうう紜　雲霧を捕て妖孽たゞめそ休

伏姫はゝひとりみるゝ。奇しゝ兒童ゝ絞喻さとく。亥明の眠覺たのゝ。髮うとぞあり人跡と免ぬ人の言葉のあやゝ。疑ひへたゝるゝ。淚乃雨ゝ敷妙の袖ハ扣ゝ瞬を絞るだうゝ哽ゝ。歎き沈せゆひうゝ。ちゝあ見どゝ心操人うゝくゝ立ちゝ。日来雄ゝゝ姫うゝ人うゝ。うゝ驟ゝ身とゝ。ゝ結ゝ。頼ゝかゝる黒髮を。掻あげゝ目を拭ひ。うゝゝ。ゝ前世ゝ造り罪ハ秤成ゝりさ輕さハちゝ。ゝゝ遂ゝこの身ゝ報ひ来ゝ。かゝぐゝあゝちる人のうゝこの方ゝ。遮莫親のゝ人ゝ。

が為崇を負ゐたと雖ても後のその後の世まで。捺落の底ゐ沈むとも。
悔しとゝふべうもあらず。只はづかしく悲しゝは親の為。又人の為ゐ蓬き
心ゆくゐ行ふ種ある畜生のその氣を受て八の子を身ゐ宿しゝるべ
いろゐ。そもこの山ゐ入りゐ日より。鶴の林のあげたをこゝに就鳥の嶺の
ゐるを仰ぐ一念不退読経の外ハよゐ他事なきのみ。佛もてゐ
救ひあらば神さへ助けあらざるべく。有ゐるの実ゐ臥房を
共ゐせざるとそ。いひ解んと雖ハ九の親乃恥
世を捨ても竟ゐ雪る時しあらで。只畜生の妻といふ生ての恥辱。
死してのうゝを喻ふ物あるべしや。ゐとハ鬼の毛乃末ゐ露ばかり
ごとをゝゝ。曩ゐ瀧田よりしゝを犬を殺しくゐるとも沼ゐ死
ざるとそ悔しけれ。死べき折ハあるべし。死おくれしゐ業因拙されば

善巧方便とく。説あらせゐふゐる。佛の書ゐ有ゐゝ。因果とい為あり
あるとよしやこの子のはゝく有ゐ親同胞ゐ幸あるべく。家の栄をゐせばとく。
あるゐ恥よやゐゝ悲しゝ。と声立て。傷の人ゐのいかゞ。そひ
凝てゐなゐくゐ賢しゝ。乱れるゐ。忍ぶゐ怪ぬ繁薄尾花ゐ下ゐ
ゐ秋の日影のさゝげゐく。谷間ハ暑の名殘とて。岸ゐ水浴る山鴉頂迄く
鳴ゝゝ。伏姫佶と仰ぎ瞻ゐ現ゐ外ゐ人もゐゝ。寔ゐ畜生道
この身を磨く劔の山路ゐ追登さゝ阿鼻地獄後の世そひ安ゝ。
さゐふくも。彼童子を不思議ゐゝ。こゐ未ゐとゐくゝゐ。審ゐ
ゐ。天眼通ゐくゐる如し。加旃地のいひざゐ。奥ゐく岩走る。この山川より
安ゐ。禍福吉凶を断ゐと。只掌ゐ指ゐふ似ゐ。ゐ人の指の神子。俯乃
老女といふとも。いとゐゐざゐゝ。ゐゐ。雅ゐ復

まとゝ公よく せん素よりこの安房まゝ。齢数百ゐるのまとぬる醫師あるこゝ公彼
ざまゝハこれゐ仕る神童あるべうも見えぬゝ。渠只假ま言を殺ゝくまとゝ醫師の
弟子めゝく。茅公採るといひつるの欲。そのやる所を定ゝるのゝ。このゝ山乃
麓とゝひ或ハ洲崎ゐあまといふこゝまゝくゝひあハまゝまゝこれも亦役行者
の示現ゐりやゝゝ。ちゝゝん。曩ゐもかゝる利益あり。それハ稱名時なまゝ
吾倚定うゐちゝ拯ども正しく得さゝゐひぬる。殊数ハ要時も効を殺さゞ。
祈念懈るゝのうけまゝや。再び奇特をゝせゐくゝども。遂ゐ脱れぬ業因ゝ。
神も佛も今ゐゐ。せんまゝるくゝゝゝまとめ倚。彩ても凡夫のかゝのゝさハ悟まゝ
くゝ。迷ひ易ゝ。ゝゐ腹ゐゝハ子ゐくゐ。形ゝゝゝぐまゝゐ生まゝ生れて後ゐ
又生倚とハいゝゝゐ布ゐやあゝんゐゝゝゝ又子を産とゝ親ゐあゝん夫ゐも
あゝんとハいゐくゝひ轉へゞ。吾倚ゐハ苟ゐも。いひゐゐけゝ倚良人ハゝ。

とのゝのゝハ中らゝとゝゝゝ。又ゝんゐくゝと彷せゐゐ新獲ゝ効ゐくゝ
ゐまゝゝ公親同胞ゐ恥ゐゐゝくゝまゝゝゝゝゝより。流ゝく水ま効を任ゝ。骸も
とゝゝゝゝゐゝゐゝゝゝゝ。ゝゝゝゝ恥をかくゝゐん。吁ゝゝん。とゝまゐ向ゝゝれま
苔ゝくゐゐゐ。ゐひ決めゝ。ゐ為くゝ草ゐ藤突立ゝ効を起ゝ。水際ゐ立
ゝゐまゐひゝゝ。さゐゐもとの侭ま。水屑とゐゐゐ日来より。川の向ひの岸
ゐでも。専使をゐゐゝ。冊ゝんのゐん慈ゝを。ゐゝゝゐゐ似ゝく罪ゐくまゝ。
一筆送ゝゐゐゝゝゝゐ。ゝゐゐ業因とゝゝひ捨さゝゐゐん。ゐる人ゐくハ
ゐゐ尺素も。朽ゐゐ朽ま命毛を。要時延ゝくゝゐゐん。とゝゝゐゐゐゐ
捨ゝ。死ゐんとゝゝゝゐゐゐゝゝゝ際脆ゝ村肝のゝゝゝ足もゐゐまゐ舊の
洞ゐゐゐゝゝゐゐ當下八房ハ自然生の薯蕷枝ゝゝの果ゐゐゐ。ゐゐくゝ鶴
のゝまゐゝ。姫ゝんゐ公ゐくゝゐゐ。只今かゝゝゝゝゐゐゐゐゐ。一及ゐゐゐゐ夫ゝゝ

長き袂に夤縁て後に跟き又先ニ立尾を掉鼻を鳴しつゝ迎へる
るが如くして。只管食を勧れども伏姫はそのかくにみえるも禽忌しく疎し
くて絶て言葉もかけ給はで。石室の端ちかうゐて硯ニ墨を摺流し。綴り
さくさくなるつゝにさる料紙の皺を引延しく。こゝろう人経者の示現なるぞ。
辞みじかく義理ふかく。いと哀れなるぞ写ぞ折しもあれ水は瀬まくらに
患れく三閭大夫がうちに想像るべく。松は峯上に吟して有馬皇子が
無常を示せり。いにしへより今の世まで賢きも愚なるも直きも曲
れるも薄命にして屍を溝瀆野經に曝せるの抑亦いくらぞや。
その妻その子に至りては数ふにいとまあるべし。いづれかあるどころが
身もとも倒るゝる業因にして。骸もとむれど失にしと毋う人得給ふまでぞ。
その係緒も果なるん。そをとかでぞ在さばとも。なる後さへに限りなる。

嘆きを倍させまつる。不孝の罪は贖ふ時なし。幾遍かひきとゞめんとせしかども
かひ絶がたきは只恩愛の絆にて許させたまへといくへかへしぬ。いかで根強き松の
露。袖の雫も末竟に涙の川となるまでに。憂き思ひを水茎の筆に
いはせく続くし。巻くしつゝ嘆息しようやく思ひかひぬれ西方弥陀の
利劔を借まで煩悩の羈と断むとは冥土の旅の首途には称名の外あるべからず。
と忽地に思ひ入しつ。手をつかねて来し菊乃花に清水を汲て恭しく。
佛に手向まつり。襟に掛たる珠数を取て推揉んとしたまへば。常にもあらで音は
せず。さては不思議やと取るや目しくぞ見るからさなくて見るに数とりの珠に
顕れたる。如是畜生發菩提心の八の文字は跡もなく。いつの程にか仁義禮
智忠信孝悌とかはりかはりたり。いと鮮に読れたり。伏姫は又さらにかゝる奇
特をみるものから。その不疑ひを解よしもなく。ほとほとおもひわづらふ。この珠数

ちなみハ仁義礼智云云の文字あるをかくて八房と伴ひこの山に入らんと
せし比如是畜生云云と八の文字にうつりてしかバ果して件の一句のごとく。
八房も亦おのづから菩提心を發しけり。今宵に今又畜生四足の文字ハ失て
舊の如く。人道八行を示させ給ふ。權者の方便測がたし。いと淺ちかの婦
女の智をもて何と辨へ得らんや。見る所をもて推とれハ吾儕も犬の
氣を受て平ならぬ身となりにし。これ遂に非命に終るハ畜生道乃
苦艱に似たりされども佛法の功力ありて。八房さへに菩提に入るゆゑ。来
世ハ仁義八行の人道に生るゝよしを示させたまふなめりしさあらん
には八房をも。こゝろのまゝに殺さバ畜生の苦を拔くよしなきとなりぬべし。
いふべくそれハ不仁なり。渠ハその主乃為に大敵を亡したり。かゝれば
是なる忠あり。又去歳よりしてこの山に。吾儕が飢渇を凌せたり。
かゝれバ又養ひの恩なきにあらず。よしや末世ハ人と生れて。富貴の家の子となるとも
その忠と恩あるものを今情なく死を促さんに忍んや。これらの
よしありの随に告て生死を渠に任せんとて殊数を左手に掛前
足突立ながらこの眺めをる犬にうち向ひ。やよ八房これ聞るやよく
聞けかし。よに幸なきもの二ツあり。又幸あるもの乃ふたつあり。則吾儕と
汝なり。これハ國主の息女なれども義を重しとするゆゑに畜生に
伴はれ。この身乃不幸なり。されども穢し犯されず。ゆくりなくも世を
遁れて。自得の門に三寶の引接を希ひしハ。遂に念願成就しつ。けふ
往生の素懐を遂るも亦これこの身の幸なり。又只汝ハ畜生なれども。
國に大功あるものから。熱て國主の息女を獲ることを。人畜の道異へりしくその
欲を得遂ざれども。耳に妙法の善を聴く。遂に菩提の心を發せり。

こと汝が幸ひなり。ちゝはゝども生をうえ形を変ずるがゆゑにはさくがの四
くく。足の苦を脱はまぼはさくくハその智をあらはとるく。死ーてハ後その皮を剥ぎうん。
亦こと汝が不幸之。汝生まれさくより七八年。犬馬がーくもそ乃命短ーゆ
いふべうもどいさづふが生を貪ぼること。死ぬる紙ぬ人く里が還らハ友が嗤ふ。
笞が打ぼ。呵責忽地その身が及ん又との山が住るとも翌よりてハ雑ら亦。
汝が為が経を読べ。梵音耳よ入らざるうぶ。菩提の心遂よ失うん。只
生を辞ー死と楽ぶ人道の果を希ぶ。来世が人と生まざうんやとの
理ぶ紙よくちゝハ。おるぶ流よ身を投ぶく。共よ彼岸が到ぼう。されどて
時ぶ早ぶ。ぼも浮世の名殘ぶり。且ん経を読誦ーく心ちづが
元よ戻ぶん。汝もこれを聴聞ーく。瀆果ぶんとぼ侍ぶ紙よ起て水際よ赴け
うーさるとも不覚よ命惜くハ野ぶ里ぶれ老死よ命ぶん人果を為ぶ

とぶるぶん。よく轢へよと叮嚀が諭ーぶハ房ハ頭を低く憂るぶ。又
尾を掉て泣ぶ如く又感涙を流ぶ。伏姫ハとの形勢をつくくと
見ぶひく。ぼの犬誠よ得度せり。為ぶるが後身ぶるとも既が仏果を
為ぶうんぶ。義成が耳孫の世ぶく絶く障礙ハあるべーぶ心が
とぶひとぶく。彼遺書と提婆品の一巻をぶが取ぶく。洞よぼ些ぶみ
出。瀆涌ーぶ遺書をぶん経が巻竜てとの石室が留ん。とぶひぶつ
上平なる石を枕よ伏紙組く彼一巻を額がおーー当且く念ーぶひつ。ぼや
瀆出ーぶふぶぞハ房ハ耳を側てさくと生平よりいと切ぶり。抑提婆達
ヨヌ品ハ妙法蓮華経巻の五よ在ぼ婆竭羅龍王の女児ぶとよハ歳よ
ぶく智恵廣大ぶく禅定が入ぶく。諸法が通ーぶ菩提を為ぶる縁故を
説ぶる経文ぶり。女人ハぶろ垢穢ぶる素より法器があらぢ又身が五

○山青堂蔵

○山青堂蔵

障あるに故に成佛なりがたし。今年八歳龍女のごとくにあらず。しかも無上菩提を得たり。便是女人なりとて成仏の嚴初なり。かゝるに伏姫末期に及びて身の為又犬の為に提婆品を読ずして限りなく苦声なりき。澄渡るこゑ。又委しく蓮の糸を引く如く。又出水の麦笛に似たり。峯の松風もこれに和し。谷の幽響もこれに応ず。石を集て聽衆とせり。むかしもかくぞあるべけんとも覚えぬ。道心なり。さる程に読經も既に果ぬるに。三千衆生發菩提心而得覺記智積菩薩及舍利弗一切衆生默然信受と續ぶべし。八房衝と身を起して伏姫を見るに見えず。水際を指て行く。前面の岸に鳥銃の筒音ありて。郷音しきり。忽地飛来る二つ三つまでは八房が吭を打貫く。煙の中に礙と仆れぬ。あやまるべし伏姫。右の乳の下打破られて。苦と一声叫びもあへず經巻をも掴まで。

横ざまに薄淵びのひぬ時なりしかば去歳よりまして。川よりまさりて露ふかく。絶て晴間もなかりしに。今鳥銃の音とともに拭ふが如く晴ぬるに。年なれども一個の猟人柿に染たる桙の脚半。おなじ色なる甲掛しきて。笹織乃攝中の緒を結び放べく。項に掛け。右に鳥銃引提て前面の岸に立あがる。流る水を信として既に浅瀬を知りて。躍て岸より走るべきに。今なほ鳥銃肩にうち掛て。なほ指てゆくに。この川なほ急なれども。なほ人似ず浅しとて。水は高股を浸さず。彼壯夫はまもなく勇みて勢ひ猛虎の子を負ふとぞ。又醉象の牝を追ふごとく。ちゝと足を踏進めて。その幅十丈あまりなる流水を切て瞬間に。あなたの岸に走あがり。且も銃を揮揚て。打倒しと。八房をとゞめ撃ちと五六十。骨碎け皮破れて。復動くこゝあらざりしかば。茫然と笑て鳥銃投捨いで。姫うしなをと石室のもとにいで進ま

寄そひ給へバ亦伏姫も。打倒され玉ひて気息ほそく。いとかすかなる騒きさわぐと
かく。抱き起し奉り且瘡口を展検るに幸にして疵ハ浅かり周章て懐
なる薬を取出して口中に沃ぎ入れ頻りに喚活奉れども寸口の脈絶果て。
全身ハはや氷の如し。継元化が術あるとも救ふべうもあらねバ壮佼ハ
天を仰ぎて。数回嘆息し。悲きなるかな心ある所謀る所ハ悉く鵲の嘴と
岩齟ひ月来日来晴やらざる挾霧ハ晴つ八房を殺しと悦ぶほどもなく。
あやまる丸に姫うへさへ竟に絆絶なひ出没奇異なる犬あるぞ
ましてと固くとゞめし禁断の山と思ひく身を忘れ命を捨ても姫うへを救ひ
まゐらせんとせし忠義ハ不忠となりく又万倍の罪を醸せり。百遍
悔ひ千遍悔ともいまハしもかひなし。ぞかし玉のやうなる肚を切く
姫うへの冥土の御供仕らんかくせしめよと襟を披くて。腰刀を抜出し。手
弑に巻ていく。南無阿弥陀仏と唱もあへず。あはや刀尖を腹へ突立んと
する程に。継とも知らず松柏の林が下に弦音高く射出す箭に壮佼が
右手の臂射削られて。ひるむとせしとき。刀をうち落されて驚き
あわてふためく。そハ樹間隠れに声高く。籠ハ木未求むと呂门の山の佐都
雄に遭ひけるかもと口吟む一首の古歌にと付つ継と向せも果ず。金
碗大輔早まるな且く等と呼とめて。里見治部大輔義実朝臣熊の
皮の行縢に豹の尻鞘篠餝して。弓箭携へ徐かに樹蔭を立出給ひ。
後より続く従者なく。堀内蔵人貞行のみ精悍しく打扮てぞ主の左辺に
引そひたり。義実恵みなる気色にて伏姫の亡骸を尻目にかけて最期のさま
いかにぞ。何と申宜ふいちはやくもほとりに落たる珠数と遺書を取あげて
蔵人にとらせつ。それを読よと宣へバ。貞行ハとく近つきて。遠しくとどまりてよみあぐる。

義実朝臣ハ弓箭ヲ捨て。殊数を刀の靭ニ挿且遺書を見るゆ一句一段
ごとゆ嗟嘆せゞといふ。又負ゆも見せず。そゞ中ゆ金碗大輔
孝徳ハ慚愧その刃を置とゝろなく。額ニ冷汗をながし刃を膝ゆひゝ
敷て。只平伏てぞ居ける。當下義実ハ傷の石ニ尻を掛て。孝徳ニ
向ひ。所ゝ〳〵たゞ金碗大輔。没不光ニ法度を犯しく。この山ゆ入る
ものゝ多くまど今伏誅と八房をうち殺せ〳〵あハ仔細あり。刃とゝもゆ迫う
ゆ。洋ゝとして。いつゆぞや。と問給ふ。孝徳ハ意ゆ安からずとも
面ゆ。要時野を切ゆ挙ゞ。この形勢ニ負ゆへ。そゞほとりゆ立て
大輔ハ綻ぶゆぞ且刃をおさめゞや。とくゆ答ゆ。さゞやとゝ
孝徳ハ女〳〵ゆ頭ゆ撞刃を鞘ゆ納め。揮副の刃ゆ共見せゞ堀内負
ゆゆ遍なく些〳〵引退て又負ゆニ對て。こゆ。死後ニ至る甲斐ゆ國ゆ

君の為ニ類ゆ絆〳〵なれ。ゆ重ての越度なく。後悔の外ゆ。ゞ
千万句も。この期ゆ生て注ゆ死ゆ。ゆ身の非を飾ゆ似て。只一條を
中上人去年安西景連ニ謀られ。安危のゆん使を切果さゞ脱れく
走る道をぐゝ。追捕の歇兵と血戦〳〵。辛く瀧田へ立ゆる。景連が
大軍元満稲麻のごく攻囲む最中ゆ城ゆ入るを竟ゆ協ゞ。
切て和殿ニ力を戮〳〵。一臂の忠ゆ盡人とゝろて。躍て東條へ走ゆけども
その甲斐なく。彼ゆを芝戸納平が大軍ニ囲まゝり。歇ハ虎口を退ゞ。
夜ハ篝火を焼あゝ〳〵。番兵ゞゝく由断せゞるゆハ翔るゆ〳〵く城中へ
入るべうもゆゝゞ。一騎ゆとも歇陣へ突入て死ゞゞや。とゝひ決めゆ
ゆゞ。退て思慮ゆめゞゝ〳〵ゆ。これも亦絶ゆ所ゆ。五指のかゝる
かゝる弾入ゆ。一巻ニ寄ゞとゞ。西城素ニ兵粮ゆ〳〵。寔ニ危窮存亡の

秋なり。こゝを鎌倉へ推参し〳〵。管領家へ急飛告援兵を乞催して両所の囲みを殺崩さば君のあん為公上あらじと思ひ入〳〵白濱より便船もて彼処に赴き来由を述急飛告援兵を乞とゝ人ども主君の書翰なるにあるを疑はつゝ縛とのゝ人どもそゝだのみある日を過し〳〵飛空して安房へ入るに景連はたゞ滅亡す。一國君が為めに属ぬ吁歎し。ゆゑ思ふ事なり。寸功もなく阿容こと見糸まゝ入りて。幾度とゝく今さらに腹も切らまゝ時節を俟て功を立帰糸飛願ひまゝ人。そは一ゆゑ乃隠宅ゆとく舊里なるに入上総なる天羽の関村に赴きて。祖父一飛に由縁ある荘客某甲が家に身をトみ去歳と暮れ今茲もおなじ秋の色深く潜びくひ〳〵ゆ本月の初旬姫こゝのゝ灰に埋めて八房の犬ゆ伴ひ富山の奥へ入るひゝと。と慥に聞糸飛告げのあり。こゝ未曾有の奇絶〳〵。偏ゆ主君の環理とよ〳〵や彼犬年ありて人を魅ゝ霊あるとも目ゆ遮るものゝなれば撃ゆ窮ゆ富山ゆゝ登り。犬を殺〳〵姫こゝ死殺ひとゝ先非糸贖ゆ帰糸のよもぎ。ゆゑ思ふ。と尋思〳〵。潜びく當岡ゆ立ゝ。准後の鳥筑引捉て。山に入ること五六日。姫こゝのもゝ所在を只顧索なるゆ。あるゝの岸ゆゝ挾霧ふくて一日も晴ることなく死殺ぬ。水の音のゝ凄じく。廣陝深淺も測ぐるかた。蚕崎輝武が溺死のゝさゝ推量もあるく。かゝるゝ考へ沿さぬ。川一條に隔らまゝ奥糸ゝるとかゝるゝ移ぶ。けゝと空く暮ぬ。とゝるゝ頻ゆゆ焦燥のゝ果ゝ疲労く水際の松ゆ。尻うち掛くるゝむまどゝ。こゝまゝ人ゝえぬ渓澗のゝ底ゝあなゝ。経よむ声ゝとも幽に聞ぐ。月を待ゆ水際にまてゝ。

耳を側てゝ。つくゝと伺ふに女子の声にこそ疑へべうもあらぬ。姫うへはほゝえみ給ひて。神明べ。既よりこのゐん声を伺ふ。いまゞあん姿をゐるまゝ。この時ゆゑ神明佛陀の冥助を仰ぐみあらざりせば。未だ遂ずけん。當國洲崎大明神那古の観音大菩薩孝徳が忠義空うくどへ秋霧をあさ分くゝとの川を輙くゝさせ給へうとて丹誠を抽て且く祈念して目をとゞけば。不思議なる今までも黒白をゐぬ川霧も晴のが如く晴ゐる海。前面廻よ眺望ゐに石室とおぼしき所とおぼえさせ給ふ姫うへ。いひしより頼へ淺し。何でふ勇ざるゝ既よりとさんと。ゐる程ふ八房はあるゝ所ゐにて。水際に指て走るまゝ這奴よせつけて。あゝゐるとゐん犬とゐて。後ふ下ゐ被ゐへ。おゐるめと思ふ矢どゐへ程よくゐりぬ食ゐる鳥焼取ゐる。粗固めゝ二ッさゝ。火盞を切まゐ犬は水際よりたゝ。物獲つゝと早川の水よりたゝ。流れゐる。ゐるゝ又姫うへもあまれる丸よ傷らまゝ。おゐゞ枕よゆゝのゐさりけゝども痩ゐ後ゐ清きゝゐとりやとゝゐ死盡ゝゐ。弾せども。絶ゐべ。身の為命とゐひゐゐ。毛を吹て疵を求めゐる。後悔其効ふ立ざゐゐ切て冥土のあん倶せん。と既よ光彩ゐ究ゝ折。ゐひゐゐゐて君ふ替ゝれ。ゐる死ざゐゐ天罰ゐゐ人。法度を犯ゐくゝこの少。ゐのびゐるのゐゐゐ姫うへ害ひゝゐ是ハ逆の罪人。君ゐまふゝ刑罰を希ふ外ゆゐゐ。堀内ゆ。義人どの。索ゐけゐ人と背ざゐふ。ゐ死めゐゐゝくゝいゐ。貞彩ハ孝徳が忠心我よくゐゐゐゐ。ゐ毎ふ点頭のゝ主君の乳ゐ死伺へふ義実嗟嘆大ゐゐゐ且ゝて。ゐゐ。現禍福得失ハ人力をゐくゝよゐゐゐ。凡智をゐくゝ揣べゐゐど。

されバ大輔汝ハ定にその罪あれバ刑罰遁るべしといへども。伏姫が死ハ
天命なり渠が汝に撃れしにあらず。かゝれバこの川の水胥となりぬ。忠人
その遺書を讀せよと宣へバ。うけ給はりぬと應つ。大輔がはとえに
つゝみし首より尾りまで。高やかに讀れども。孝德やましく慚愧しく。
伏姫の賢才義烈に感涙を拭ひあへず。いよ〳〵兼忍悔歎ぬ續果
けれバ義実ハ又孝德にうち對ひ。大輔何とおもふぞ。伏姫が死と
禁んとしたるは赤潛びつまゝにあらず。此度五十子が病著ハ只
伏姫を愛惜の心氣疲労れて。危急に及べり。渠が祈ひを叶んと
みづから無異して此山の奥へ入らんと心めとゞまるしとさるかりさる
ためハ祈り。これのみならず。荒人之如此この示現をうけたり。よて
從者ホを麓に留めぬ。只これと負郎とこの山へ登るものから。示現に
任しく川をこえさせど。たえて水上を見ざりしかバ。この石室の背に到りたり。
主従既にこの処に近つかんとする程に。鳥銃の筒音にうち驚きつゝ
来て見れバ伏姫も八房も。矢庭に撃れて仆れたり。折から川を
涉りて向ひて伏姫が誓ふなりけりとてよれバ。霎時樹蔭に
躱ひし。縡の趣を窺ふに。豈おもはんや舜者ハ月来日来おもはずに
金碗大輔なりけんとハ。渠騒ぎしほどもちよつて姫を呼活ふに盡きを療
養ふに届ず。こゝ自殺の覚期ハ野心ありて姫を殺せしものならバ。
思ひよりけるが。叫びとめさり。汝みづから思惟よ。犬を殺して伏姫をさてひ
とりしものなれバ。義実ふかく恥を忍び。最愛の女児をさとしけふ
まで汝がなす所まてんや。賞罰ハ政の樞機なれバ言一トたび出すときハ駟も
舌に及ばず。戯言といへども八房にこれと伏姫を許しゝとの一言まで剛敵

亡び四の郡ハ武実が掌に入るるに只八房が大功なれば。これも前緒を
変ずるに由る。姫も亦こゝに武固辞ひたゞ。そゞやく犬に伴ひ蹟を深山に
住むといへども。幸に一会続經の功力によりて。八房
犬に菩提に入りぬ。渠が嗜欲を足さく。伏姫こゝに憐ぶ。情に心
緒〻〻。こゝろ〻〻てこの氣に感じ有身まるといよ〻〻奇なり。
今その筆の迹に〻〻との禍の胎るところ因果の道理を知覚せり。
こゝに當國に義兵を揚く。山下定包を討。こゝにその妻玉梓を生拘つ。
陳謝理りあるに仍こゝに赦〻ゆさせんといひつる武大捕が父八郎孝吉
いさく練こく既に刎こう。ゆこゝにてその寃魂こゝに主殺に崇ゆまと
狡とちぐめて心つこゝろ〻〻に金磯孝吉が自殺のこゝに朦朧とこく
女の姿こゝに眼に遮こゝる。かくてかの玉梓が。こゝろ〻〻に怨に嗟こゝに。八

房の犬と生こゝろ〻〻く。伏姫を恨く。深山遁に隠こゝく親に別ゆ。
伏姫に又ひとりこゝに八郎が子に孫こゝに加以大捕に罪こゝく
亡命〻〻忠義に依こゝく罪に獲こゝに皆是因果の係るところ縁故と推こゝに。
こゝに義実が怨より起こゝに物がいに〻せく八房に伏姫を好せこゝに赦を
こゝに玉梓を助んとひひ〻〻の過去に〻の露に未竟に。この渓澗に落あて。
こゝ〻〻きこゝに生死の海を足るこゝに悲〻けこゝに。こゝに歎くに絶こゝき
こゝ。神灵に正こゝに邪あり。神の怒こゝに四罰とひひ鬼の怒こゝに崇と
こゝに彼王梓に悪灵こゝり。伏姫が死に崇こゝり。大捕こゝに脱こゝに不憫罪を
こゝに寔に故こゝるのこゝに身を遺ていと叮嚀に諭〻〻
こゝに叡智に感〻く孝德に〻〻に小勝を進め。御旋によりて父が自殺も
こゝに月の落命に暁るに〻こゝに猶疑ひあり。八房にて墓

提ゆ入るべ。悪灵祟紙なりとべるるど。君ハ權者の示現ゆよりて。姫うん死
紡せるべ。縁定業なり。まもとなる。神仏のちから紙なりて。けん一ヶ日を恙
なく。姫うんなるゆ在をべるよれ。登山その甲斐なるハいうなる故ゆなん。
と問をれば。貞彩も。小膝紙指て。側よりて。大浦機妙ヤしなり。ゴゴ君のをゆ
まー。ほさるど。一ト日を晴ぬ川霧の忽地晴ぬ。和殿がうんなを神佛の冥
助ゆ。似て。その実ハなる非なり。とて。沼ぐてゆ。と
真実ごちてヤスなぞ。義実朝臣うちも。点ぢられも。亦神なり。孫ハ定ゆ
名ひ。辨弦とも。禍福ハ糾る纏の如し。人の命ハ天よ係ぬ。られとの山よ
到ぢて。伏姫むるーくなるうんよハ。渠只犬の妻とのるぬ。則姫ハ節操
徳義と。八房が碁提よ入ぬ。親ゆ世よもらせんとて。権者の導き
なるべ。然あらんゆハ玉蜻の息あるうちゆあるどとも。その甲斐なーとりよ

べるるど又川霧の晴間なるく。伏姫も八房ゆ大浦よ聞ぬ。涙ハ共よ
この川の水脈とのぬ。方ん縁遠書あるとりんとも。ちらざるゆハ
情死とりん。欲さるん遠恨のるなるゆ。今さらいかべるるるゆ孫
とも大浦が父八郎ハ功あるるぐ。賞を受ぢ。自殺世事不返ん。
いぐるその子をとり立て。東條の城主よせん。伏姫をなて妻せんと
なるハ折なる。大浦ハ使して。遂よかるるど。伏姫ハ八房よ伴ぬて。深山ゆ
入ぬ。ゆ至ぬ。弓が宿念画餅とるるとていまくちく。と孫よ
愧るとなるる。この婚縁ハ明と地よ。とり結ぶよあら孫ども親ゆ
許せ。伏姫よ示しる。神童が言葉ゆも。親と夫よあらんとのひ
ん夫ハ汝をのるるべ。かるる方ゆ姫と犬と死。大浦ゆ離ーゆんん。
則權者大方便の妙所とりんもいとかーに因縁かくのやるるハ。

雖をゝ咎雖をゝ恨ん弦強けれかゝのごゝ弛む物極れハかゝるべき休
今ゆゑとして己ゞ家ゆゑ天の障礙をあるべうまゝ子孫ゆゑとく繁昌
せん欲さゝいとハまゝやと諭し給へ人ハ貞操も孝德も疑念ハ春の氷の
とく解く落涙をゝりけるを且〳〵孝德ハ襟を合せ形を改め
冥加ゆゑ餘る君の高恩ハ身月中ゆ秘させ給ひ〳〵婚縁のこのうゑ
うけるゝうんも物侍る〳〵固よりゆゑをありて姫うゑを
救ひとうんとせ〳〵とゝやと後ゆゑ人ハいかゞべうゝん只速ゆゑ某が頭を
刎させ給へうと又他ゆゑもうくゆゑ実とゆゑ他ゆゑもうくゆゑ
勿論のゆゑう。さゝとうゝ。
殘うゝ〳〵魂生ゝとうゝのあゝハ没を殺ゝとも早うゝゝとゝうゝ熟この
殊數をゝるゆゑ如是畜生云云の一句ハゝうゆゑゝかゝゝ。

仁義ハ行を示ゝとゝのうゝ。霊驗ハ失べうゝ。亦ゆゑ姫が倒るゝゝ二の
殊數その身を離ゝ〳〵ハ殘るゝゝ。殘るゝゝ時ゝ〳〵。
あの殊數をうく安危を知ゝて。縱命數彈るゝゝ。初ゝハ利益ゝ
とゝゝうんゝゝ。縛協ゝゝ非ゝゝ。
あげく額ゆゝ〳〵當ゝく会〳〵伏姫の襟ゆゝ掛ゝハ貞操孝
德左右ゝゝ。むゝ〳〵き骸を抱起〳〵復行者の名号を唱ゝ。只顧祈
念ゝゝ殺ゆゝ伏姫忽地目を睜きゝく一息吻とつゝ貞操孝德歎
喜ゆゝ堪ゝ。姫ゝハゝゝゝゝゝゝゝ。
父君もゝゝゝゝゝゝゝゝ。ゝゝゝゝゝゝゝゝ。
ゝゝゝ。取ゝゝゝゝゝゝ放ち緒袖顔ゆゝ〳〵當て只潸然と泣ゝ。
現理ゝ。と実ハ間迫ゝ〳〵ゝ袖引揺〳〵伏姫さゝゝ愧ゝゝゝ。

主後二人の後者ホハみる麓ヨ在り。此度母の願ヨよりて義実みづ
から未つゝる。一朝の幾ヨあらぬど。權者の示現ヨよりあのえ。ハん男がうん。
又ハ房がるのさんホ遺書を見くちるヨ。余ホ金碗大補ハ去歳ヨ
上総のくるホとり。ハん男がうん死侍のて弱冠の一トさちざゝ絃ヨ。緯の
顛末問も定めぞ。ハん男を救ひとらんとく。ヨより先ホこの山ホ
潜び入つゝハ房を撃倒しゝる九援て。ハん男も浅傷を負ふ。八房が
死ハ不便ヨ見ども。大補ホ知ヨ一ヨ。亦因縁ヨ死ホあらぬ。渠ヨ
ぶまろ乳とろヨ女婿ヨせぞやとろひしーあん。さまぶてそ書遺されし。
ん童が言ホ親と夫ホあんよ。紙いろぞや。枉て滝田へ立入り。病
髄ひ〜母がまろ氏慰めるんやよ伏姫と理ヨ切て諭しるハ貞操ホあろ
ヨ。ホ帰館のヨ勿論ん一旦の義ヨよりて八房ヨ伴ヨ一年あまり

この山ホ隠りあんべ。その事果ろ。ゝや見ゝより遁世のあん志ろくとも。
孝行まハえぞんぞ。せるんとまゝらくつ嫌ん勤ヨ来ヨ。
伏姫ハ涌ん侍を。ちぶく押拭ひ舊の身ホ〜くあろたのろ。親乃
ろうろう迎へるん仰氏背き侍るんや。かくまで過世ろ〜引の山の獣ホ異
ろぶ〜火絶ヨ打ヨく身を絶望るのぶ。人ろ〜くホ外ヨろ罪滅〜ヨ
侍るんホ。そヨ。もかろうきさまぶうーき。この形容を親ヨ「ん世人ヨろぶ
ヨく阿容ゝとのづとの里へかゝるぶ。餌ヨ嘯く鳥の巣ぞちせぞ。
片羽ろろ子ハ可愛さも八〜ホヨやとと鄙語ホいハやと狡飽までホ
慈愛せるヨ侍。家尊家母のん歎き。譬ていろ夜の鶴つま恋せねど
ろヨとも又焼野の雉子ヨとと鳴く。涙の両ハ沸久り。ろれ久侍まで苦〜ん
海を。ゲ脱ヨんと命毛の。筆ホ送せ〜ぞくを。何とろヨさせるハん

山精堂蔵

火宅を出て煩悩の犬も菩提の友とぞ。この身は絶て識さとぎ。犯さるる拙けれども山苦の実なるぬ身さへ結びて有為の二つをこれうふ。決めるてぞ給うし又父うえの心ところ。食ふ物のあるとも。この期よりて云云と答えさせのひて人も物ちらぬ。行式かさ拙させるるまでや。譬バ金碗大埔と俳徒の因りといへとも親のおろかを絆させるひし夫は員死く八房は伴とるべ。さんるのうえよこるる不義を結るべし素よりこれらハ化増ば拙のあるとちるべ死ぬ。君只知とり知石バ墳ふ劔を拭るとよ。又八房を夫とせハ大埔ハこれがるふこるる死雙ふ結るめるハ房も夫は結るとと。大埔も示こる良人るるをの身ハ知り生ま来く。むとりで帰る

親心の強留めるるハん慈を過くあるる情ほしのともかーこー親の恩ぶ高死山谷の迎死推持ぬハ不孝の人の不孝死又あひるる死時も日を死る死親のあん顔も死つきるるるるるぬハ身ふ重き罪障のあるるるる故るるるるるる捨させるるるるはしを母へるる勸解言告く百年のあん壽死願へのこどてもかくても浅ま死る姿を死るるるるるるるる亡骸かるる死も益るる。孕婦の新鬼る。るる血盆る沈むとるる。そるる脱るぬ業報るるる厳へも甲斐る死とるるる。その父るるるるるるるるる宿るる亂をるるるるるるるる。のる惑ひも。人るの疑ひるるるるる解べる死。るるるるるるるる。と死るるるるる。と臂ちるるる。獲身刀を引抜るる。腹へるるるると突立る。真一字ふ撥切るるるへ。あ中むべ。瘡口より。一朶の白気肉死出襟る拭るるるるるるるる。彼水晶の珠数死佐るみる。

山青堂蔵

犬塚信乃戌孝
金碗大塚蟹六郎
里見十二郎

犬坂毛野胤智
伏姫
腹を刺表く
伏姫八犬子を
走らせ
きさあつひ
さとみ使

虚空に升るとミえし。珠数は忽地弗と断離れて。その一百は
連ねしまゝに地上へ戛と落とゞまりて空に遺れる八の珠子。燦然と
光明をはなちつゝ飛遶り入紊れて。赫奕たる光景は流るゝ星に
異ならず。主従は今さらに姫の自殺を禁めあへず。とこれはみもあふぐ
蒼天を。うち仰ぎつゝ目も黒白にあきれてよく。と見る程に颯と音し
て。来伏山おろしの風のまにまに八の霊光は八方に散失て。跡は東の山乃
端に夕月のみぞさし昇る。当是数年の後八犬士出現して。遂に里見氏
家に集合萌牙をきざすなるべし。かくても姫は深痍に屈せず。
飛去る霊光を目送りて。歓しやわが腹に物の凝しはかゝるゆゑなりけり。
神の結びし腹帯も。疑ひを稍解て心にかゝる雲もなし。浮世の
月を見捨て。いそぐは西の天にこそ導給へ弥陀仏と唱もあへず。

手を鞘も鮮血に塗るゝ刃を抜捨。ぞぶまく臓と婦しながら言葉も女
子には似げなきまでに逞しき最期は特にあはれなりける。

第十四回　轎を飛して使女渓澗を渉　錫を鳴して丶大記總を索

かゝりける程に貞行等は伏姫の自殺を禁めあへざりしも搔頭の花を
散せしぞ。遺憾なることなりけれ。そが中に孝徳は男子ながらも姫君乃
末期の一句に激されて身を措ところなきまゝに亡骸のほとりにおち
たる血刀をやにはに取て。ふたゝび腹を切らんとするとき義実声を
かけ立。やをれ大輔狼狽たる欤。その身に大罪あるながら君命を俟ず
みづから自害せんとは奇怪なり。伏姫一旦甦生せられなば罪一等を宥るとこそ
この山に入るものは頭を刎んと掟しものを。法度を枉てものがなく腹切る

主公聽んや觀念せよと進まるまゝ刀を引提主人ハ願ふとて為と孝德ハ居ながらに合掌し項を延を招きるく上ハ晃く刀の稲妻丁と打つる大刀風よりもひやかるく孝德が髻弗と截搭ぬ人ハ見ハと思ふ人も漣う孫ゝる負ゆも驚きゆハ仁君の恩義ハいとで畏る義実ハ水なと刃を安とう鞘ハ納く後る涙を吸ひ拂ひ人のや義人ゆ罪人を刑罰せり法度ハ君の制まる所君又ゝ主公破るとハ古人の金言宜ゆるゝみこと民とのろ共ハ人ゝこの山ハ登ゝるゝ人大捕ハ外ゝ愈ゝ跃ゝ代る髻ハ渠が亡父へす志ゆり渠が髻き時よりまく名を大捕と喚做せ一ハ大國輔佐の臣ゝとその人後を祝せハゆ官職ゆやく進ゝて治部大捕と大捕とその國訓ハ異るゝ丈字ハかゝらぬ主後同名かゝる故ゆや主のゝ人ゝあゝ丈崇ゆ身ハ愛久可惜し丈壯佼がよハ埋木とゝ

なんゆ。かゝとゝも不便ゝ親八郎ハ大功あゝ大捕ゆ忠ゆ丈ゝあゝむ。その親とゝひ。その子とゝひ勲功あゝとも賞を獲ず。その死ハ臨そ。その罪ハ陷るハ及びて人主尚救ハハよゝゆ丈ゝる。ゆゝ子ハまゝく哀傷の涙ハまくゝ禁めゝゝ。ゝ大捕ゝ孝德ゝゝ。ゝゝ丈ゝくも知らゞ亡親の為ゆ為に命丈たゝち身を愛し佛ハつゝ苦行しく高僧知識の名を揚ゝまゝ為ゝゝゝとや。と叮嚀ゝ諭し人ハ孝德ハ辱ゝるゝハゝゝ落る涙ゝ咽び地ゝ伏て。愈ゝ孫ゝ声を咽む理ゝゝゝ人ハ負ゆハ臭ゝちゝて進ゝ出今ハゝめぬ君の仁心姫ゝの巌期ゝハ唧ゝきゝゝゝく家臣のゝ人丈かくまでハ。仕ゝえゝゝゝゝ大捕和敬ゆ身ハとゝて人一郡の守獲万貫の禄ハもゝく満足ゝゝゝとゝゝく安ゝゝ頭を擡某寔ハ不肖ゝゝとも如是畜生ゝゝ菩提ゝ入ゝゝ今ゝゝ日本廻國しく灵山灵社を巡礼し伏姫君の後

山清堂藏

世代吊ひ奉る君は父子の武運を祈らん姫うへの落命も又某が祝髪も多
八房の犬由来うへは犬といふ字と二ツに釐き犬の由及ばぬ大姉が大の一字と
そろまるゆゑ大と法名付らんとヤ上ゑ氏実朝臣適いくをやとろ件の犬も
全身は黒白八の斑もあれとも八房と名つけしゆゑ今さらゆゑ八房の二字は則
一尸八方に至るの義なり加藤伏姫が自殺の今果に殘口より一道の白氣
くゝる引仁義八行の文字顕はれる百八の珠因さ冲星文字なれ珠は地に
陸く。その餘の八は光明をはなちて八方へ散乱しく遂に跡なくなりぬ。
其呼吸のあひだ後に至りてゆゑ菩提乃
首途の餞別なれ只この珠数はもとのあるじ努秘蔵せよ入道と諭して賜
賜ふとは孝徳はもに受く。再三よびうち戴きこれ有るこれ君の賜ものなり
緒國代編歴しく。能去る八の珠の落るゆゑ霊柩のもとめ。ちゆめのごく轟き

とゝゑんに一百八の数は満ぬ又當國へ立ゑるとく見糸は入りひ年代歴るとき
音耗なるゝ旅より行は野ざらしの骸は餓る犬の腹を肥しゆゑとと思ふれよ。
是ぞ寔に今生のもん別ゆゑ〳〵といひ切くぞやけるこの時既に日は暮く。
夜はふと初更のころなれは月は半輪の雲もうく山は
萬樹の影あり。襲くたる水の音魂こたる松の声陽を動揺なるゆゑ鹿は峯
上に鳴く。白露の霜とゝろ代悲しく猴は幽谷に叫く孤客の夜衾を寒しむ。
甲は来て紡ぐも寂しき深山路に心つくゝ只紀とり。かくまぐ行ひきはしゑん。
伏姫のゝ代のゝ主殺頻ゝに感嘆せり。當下堀内貞行は孝徳に代へ〳〵
ゝゝ。姫うへの自殺よりく時代移させ明させ明さ明さ明さ明さ明さ明さ明さ
向は八のとき。さとびとく夜とゝもに。ゝゝ亡霊をいくゆゑ
毒蛇猛獣の患はとゝゝべうゝを進退究めく難義く和殿はなを平ゝとゝ

ろひろふと問ふてく雲時沈吟じいでて所理ありとあく曉させあらんとて遠慮
ありかに似たり。所詮和殿と某と姫の亡骸を舁きまゐらぶ君ハ出ぬがうち。
蕉火を把せあらしく。下山をいそぐせあらん狡麓まハあらん倶の人を留めもし
ぬとうけあるべ。もし人迎ふ来ぶ幾そのあ共耳怖しく。この溪澗を渉さぶた
前面の岸よりあるさまく遭ありとあしとの幾ハいぶとうち相潭ふ
義実こは伏他のあくまで伏姫さふ只ふとうり去歳ふとうふ在ありけるあ伏
弓箭とる為の主殘三人毒蛇猛獣をあるるく為ふ一夜亡骸と成ることかな
つまく遽く麓へくだんや。此をもひ彼伏ふふ男児ふしくこまり死伏
姫が心操親まつうきあのぞし五十子ふ泣ふくもたるぐと。
みづから姫を殺しふ今さふ慚愧ふ堪ぶるくとの有ふ今その死ふ及びて。
ふは一滴の涙とふ者ぶ魂魄いまぐこと伏きふまぶハ汝達が幾倫女こ

とく。伏姫ふ矢ふもん枝伏をふくく火と焼つけよふふも割竜をもくべ。
いそぐとうと宜へぶ。負彩孝徳感激しく。且伏姫の亡骸を洞の中へ入ふる
ら世主殘石門の樹下ふ圍坐して志づふ天の明ふ至まもふ浩処ふ前面の
岸ふ鞍の焦火所ふく人影幽ふ他のえふ。負彩遥ふと且伏ふくさ且ハ
人こがもん迎ふ来ふ且いでやとの瀑伏渉せふ。とのふ他ふ彼ら御と立て躰く
水際ふまり出其外ふ見る蕉火ハもん迎の人こがもふ在まぞ。
吾们既ふとの川伏渉せり。風笛とふふふ人まく流ふ緩く瀬ハ浅しく
渉ーふと声を限りふ呼びうけふ且折ふ追風ふ吹ふ且ハその声定ふ伏ふえ
けん焦火をもちこちと閃しく坂をくだり。岸ふをり立とおぼしくて先ふまくむ
の後ふ続くふの馬を牽入ふ声をあはしく人影渉ーふ。この岸ふよる伏
ふ且ハ伏ふけふ女轎を釣壺とふふ拯ふ。健なる男七八人赤裸ふく

こは死早くとりその餘八麓より送さは後者又瀧田より糸を繰るもあり皆負傷
をせしかくあるかと同ふ轎子を早もり衆皆水際ふつんみなく
いふまつ日の没るんとせしまぐ屋方の帰よせもつ孫べ五四郎既よまりう合世
途まぐ迎をんとくを出ひ折奥ざるより火急のもん使来れりよりてあり
共ふ歩をいそぐ人どもいく程をなく日を消しあるこの岸まぐ糸を繰ふ喚
みよりてく吾仙のこ満をべうもあるざは兩見続松なども乗て来たる物
基より彼ん使の轎子を指ち辛くも治しやといふる負傷うち点検こ
微妙もくろふふり。ん使ちくこは入へといをぐせ五六人立かうそもぐ
紐引の麻雷死鮮ちろ轎子の戸を引開けるとそんぐもん使へ専女五年
紀八四十あまり。衆柏田とぐいふるいぬる比伏姫の安否如何ぞ密
使をうけるはうく前面の岸まぐまるあんとの日火急のもん使なるぐ。

道竟轎夫を死させてや糸を繰ふ人轎のうちまは三尺あまり内なる白布と
結びさげ。こは分ハ祖の下帯の上より。鳩尾のもとまて白き練をいくへとを
く巻締て。こは練の鉢巻をちこと俗ふ早打といふめるく。いと精悍
ち、こ死のめるく長途死揺ま。つ未ふ人目眩きく左右ちく六ざる
けるる衆皆扶ぐと程ふ負傷ハ且義実のもとりふ糸りて如此こと作
あぐ居ふ柏田も強ふ跟くこ義実ハこの使いとかのとほとこの田
問ふハ柏田ハ憶ちる氣色ちく。ちと兎く頭死拳ぐ君さるうとの曙ふ
御館を出させふの後奥ざるのもん病著いよくまもく重らせるとつ敷ハ
かくせるはどやと問ふ時ふく問せるもん弐ハ假染のもん譫言ゆを姫之其
ヒかよ四まもがかく扨のひけくうち注ふ人ー量こ有ふ痛こるる限り
なくもど。塩ホハさるん曹司義成をも兎ふ角憂ふ程させるひく父ふを姫

君をみづから防せるうんとく実ハ富山ゐ勅元のひぬけの一日ねせ見聖ハかるよゞ
坂氏ねるく。ハ人を来まさんとてらくをへ。うち驚元のひつ富山ハ名さる魔
所と彼ゞ獣の〳〵被れへ勅元あるゞ異ゐくゐハ要りのふとく喫火元ゞ。
ゐゐ曹司ものよくせんまゞ侮まうとゝ柏田ハ彼山の紫内氏知るりのとゝ
ゐのうゞ屋方生ゐせのゝくよりゐ。一時ハ過べうゞいそゞ途ゐて追著
ゐん。ゐうゐく山より氏よくヤせと言ゐるゐ物とゐあゞを遠て御舘ゞ生一
ゐゐ人疲労ゐ見ゐ里くゐく。肩を継せ歩氏急ゞせ辛〳〵ゐ来ゐるり。と
ゐうゐ折ゐり外面ゐ。後者ゐ驚ゞうち。前面の岸ゐ隠ゐと火の光元えゐゞ。
今ゐゐ水際ゐをゐ生ゐり。あゐハ正ゐく轎子ゐゐんゐとゐゐぬゐ。とゞゐゐゐ。
罵散動声置ゐり。負約孝徳ゐのゐあゞを走ゐ生ゐうち眺め再度の急氏ゐ
ゐゐ〳〵とゐゐより扶掖ゐく。とく渚ゐ生ゐゐ。下知ゐゐとゐゐけゐりゐとゐゐう。被

約墨を拉あけく。究竟の奴隷十人あまり。流水氏切ゐと石を踏除あゐゐの岸ゐ
勅元ゐく。そゞめのどく約墨ゐ轎子を括ゐ。その後者ゐゐ共ゐ駈ゐとゐゐへ
渚〳〵まつ且轎子を舁ゐゐ。とく走ゐく戸を開けゞ裡ゐ出ゐ一個の女房。ゐ
年ハまゐ九ゐ足ゐゐ。その容氏撥織と呼ゐくゐゐ。蟬娟ゐ額髪ゐ練の鉢
巻ゐゐ精悍〳〵ゐ打扮ハ柏田ゐまゐくゐん。ゞゐゐ撥織ハ轎子ゐ。出ゐと
ゐゐく氣絶ゐく忽地ゐ倒ゐ。負約孝徳驚きゐく。顔ゐ石嶺を伏きゐり。
ゐゐ生氏飲せゐゐゐゐゐ勅ゐる招ゐゐ。負約ゐゐ挨拶ゐと固ゐゐ。
ゐゐる。ゐん使ゐ擇ゐゐゐのゐゐゞ長途の疲労を物ゐもせゞ。負約孝
徳ゐ渡〳〵ゐく。ゐん前ゐ来ゐり。ゐ氏実ゐゐく声をかけく。一度ゐゐゞ
再度の使ハのゐくゐゐゐとゐん五十子ハゐゐゐゐゐゐゐ。と同せゐゞ罪ゐと落る
涙を拭ひゐゐゞ。奥ゐゐハ今朝已のゐゐゐゐゐゐゐゐと来ハゐるゐゐゞ伏沈めゐ前ゐゐ

山青堂藏

柏田之丞共よりとて法よりける義実頼ゑ嗟嘆〳〵絶えうと同ひ給へ撥
織ハ[illegible]ゑ頼義樓に臨終のゆなごとハ[illegible]疎ゑ移り柏田がもん
使ゑ立ー後の〳〵移もあくまどなくうりぬれ曹司の外ゑ騎馬をりてこの
よ義告奇ハ易き是ども微彩の出登山るまべ憚あて汝ハ曩ゑ柏田とたよ
密使をうけ給ふ冨山へ勅元ようと仕のハまゐ〳〵屋方ゑ告給ゑ今霊義ゑ
過〳〵といこ〳〵ゑ給ハ孝徳ハ負彩と
面をあゝ〳〵頼義低く嘆息せり義実巨細ゑ仕のひく五十子が今後の情頼
汝果さ拾べ是亦遺憾なども未期ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]
存命ようとも帰ふく行とゝべ元ぞ汝ゑも且彼義ゑよと洞の方とうゑりく
亡骸を示〳〵ゑハ柏田撥織ハ曽うち驚ぎく〳〵ん後方ゑ立ようとさ〳〳
入〳〵月義燭ゑ洞の中義先〳〵とうろ〳〳齊一声を立ん姫ゑ入ゑ[illegible]

猛き獣ゑ傷ゑ是のゑ狩さ[illegible]ハ刃ゑ果ゑひゑん何とせん浅ー[illegible]
と亡骸のまゝべ後方ゑ轉輾び哽えりつ泣ゑ義実ゑ是ゑ目義遣り
ゑるど負彩ゑゑ宮ゑ義成がさぞ移るべ元ゑ人数ゑ[illegible]ハ曉
かけく〳〵義ゑ大浦ハ十餘人の奴隷ゑ共留ゑく翌ハ伏姫が亡骸を
義ゑ埋葬せよ又ハ旁をも瘞ゑさせよ招ゑく姫が用人を遣ゑ柏
田撥織もこのまゑ今宵一夜ハ遺ー置ゑ母の使ゑ元魂ゑ向ゑゑ
通夜させよ葬のゑハ箇様ゑと叮嚀ゑ指ゑめをゑゑ義ゑ労ひく
そのゑ義ゑさせゑ。後者ゑをも賞させく寧ゑく未ゑ馬ゑゑ乗
あゑゑの岸へ勅元ゑ〳〵遣ゑゑゑハ孝徳と共ゑ水際ゑ蹲踞ん後ハ者ハ
負彩ゑゑ共蕉火を焼ゑ照ー徹踏義ゑ海ーけゑかくてゑゑ次の日午
過く冨山の麓ゑ村長ハ法師荘客ゑゑ共ゑ棺を扛く喘ゑ冨山の

洞を指さしまつ見へとの曉ゆ長実瀧田へ帰館の折途よりと身ゆ奉て麓の
村長と法師ゆ云云の仰ゆ俄頃ゆ棺葬具を造らせ金磐大浦ゆ
遣らとく。とのゆ深く遣しけるとゆ又この日より樵夫炭焼もとゆ山掃とるゆ
冨山を上下まるとゆ許しゆ山さもゆ孝徳入道ハ件の棺を受とりて且伏姫の
亡骸を歛めまるゆ則洞を截ひきくゆ人墓所とまるとも碑碣ゆ
ハ松柏双立ゆ自然と墓標とゆ人とゆ偽へゆ嘆ゆ義烈節
婦の墓とゆ又ハ房をも土葬ゆせり。とゆ只龕ゆ歛ゆ敢ゆ棺を用ひゆ
ゆ伏姫の墓をまるゆ三丈ゆ戌の方老ゆ檜樹の下ゆ瘞む。人亦
嘆ゆ犬塚とゆひゆ葬ゆ
孝徳ゆ仰つけゆ呼ゆ姫の志操を汲ゆ
十餘人の奴隷ゆ
里へ帰ゆ中ゆ金磐大浦孝徳ハ圓頂黒衣ゆ
法号ゆ且ゆ山ゆ留ゆ伏姫の遺ゆ
間断ゆ四十餘日ゆ
石屋へ堀内貞行を遣ゆ物ゆ寄進して
向ゆ嬌男義成朝臣を
法事ゆ比義成ハ
冨山へ遣さゆ大ハ山ゆ
件の法師ハ
今朝ゆ山ゆ下るとき吾ゆ

るあんこのよーヤせといひつけく何処とゝうゝ生くゆ死ぬかゝ人俟せあふた物ら
ゞといふふまゞるゝく使者八瀧田へ立入り縛の趣をヤセーゝ氏実嘆賞大うこ
るゝまゞ渠既る誓ひゝ六十餘國氏偏歴をく亦きさる八の珠を舊の珠数よ
繋ぎ留ゞ人生涯安房へかゝらゞと豫ていひうことあれば再会寛る揣ぐに遠慮と
なうこと。ひとりごちのひゝ再て往方を索ねあゝまゞさゝ氏ゝ絶ぎや
ありけん、大坊が差るく沓を穿るとあゝば渠がよまゞみるゝとて明年
伏姫の一周忌の比まゞふ富山る一宇の觀音堂を建立。伏姫の徳八
房がるゝさ人犯ーく姫の遺書ゝ共る厨子のうちへゞ納めゝ今ゝ富山ふ
觀音堂あり。かくて黙の年氏歴ゞとも、大坊が音信ゝ畢竟彼法師が
久後いんこゝ氏後この巻ゝく解るん。
作者云ふの書肇輯第一巻より今ゝの巻ゝ至ゝん則一部小説乃

同場。八士出現の叢端ゝり。見ゝ次の巻ゝ年月相次ぎーく。いと後の
るふ及べり。この間ゝ物語るー。譬ば彼水滸傳ゝ羅虎山ゝて洪信ふが
石碣を砕くの段ゝり。林冲ふが出現おぐるこの間数十年物語るゝ及ぶ。
又いふこの巻の出像の中金冕大輔孝德が川氏湖を國のゞゝ氏文外の画
画中の丈人この出像ゝよくざゝ氏忽然とく雲霧の晴ゝ氏智は
るー。又使女の急弘ゝ柏田稜織を写ーゝ生ゝふ。この在処氏先はてこの来る氏
後ゝ世ゝ首尾錯乱ゝ似ゝゝゝたゞさふあゝゞ其人の小伝来歴後ふ僅ゝこの
人の口中ゝ在ゝ現生ゝ事を先はゝく伝氏後ゝを画も示ゝ後ゝ氏ゝ。
ゝゝあゝゞ画面ハ只その画を画とーてこの意を意とゝるとあり。氏
のく作意と岩鼈るゝゝあゝゞこの巻中ゝ在ゝるとあり看官よろく察ゞ。

里見八犬傳第二輯巻之二終

南總里見八犬傳第二輯巻之三

東都　曲亭主人編次

第十五回

金蓮寺の番作讐を擊つ
拈華庵に客を留む

前巻既に説ける伏姫富山へ入りし比八十六歳のとしより〳〵長禄元年の秋なるべし。又金碗入道、大坊八嘉吉元年の秋父孝吉が自殺せしとき既に五歳なりけるに長禄二年富山なる伏姫自殺の憂ある係りに猛く出家入道なる。躬を雲水に任じつゝ手薮行脚の首途せり。

この時九二歳なりしぬ伏姫八年たりし十七なりて身ちかうなりぬ。大坊八かの姫より。その年才五つの兄なりけるかゝく長禄八三年なり。寛正なりあらさまりて又六年なりく文正と改元せしなり。元年の秋なりて

又應仁と改めゝ。こゝを僅ふ二年ゝ。文明と改えあつけり。應仁の内乱治まらず。戎馬の蹄趾を掃ひ名のみあるける華の洛へ舊の春還ふ立ち久り。稍長閑ふ成りぬるもとの比の事なれい。文明五年春三月。宗全病ゝ、卒ぬ。五月ふ至りて勝元も亦病ゝ卒ぬ。ゝの徒の合戰。征せずして寢ふけるを應仁の兵乱とぶ。この年號の長久ふ十八年おゝ続きけるまゝふ年序を倭まゝ。伏姫の事あるゝ、大が行脚の啓行せ。前巻長禄二年より。今文明の季年ふ至て無慮二十餘年ふ及べり。この間ふ大塚信乃が未生已前の事を述。この巻亦復嘉吉ふ起ゝ。文明の比ふ至れり。後土御門天皇の御宇。常德院足利義尚公將軍ゝ。寛正文明の間ゝ。武藏國豊嶋郡。菅荒大塚の郷畏ふ大塚番作一戍とゝ武士の浪人ありけり。そが父近作三戍ハ鎌倉の管領足利持氏の近習ゝ。永享十一年。持氏滅亡のとき近作ハ精悍ゝ。忠義の近臣と相謀ゝ。持氏のゝ子。春王安王両公達を獲奪ふ鎌倉を脱去ゝ下野國ふ赴き結城氏朝ふ請待せゝ。その城ふ猶籠ふ寄せの大軍ふ引ゝ受けて防戦年を重ねとゝ。士卒の心一致ゝ。焼む氣色ハゝ。嘉吉元年四月十六日。嚴木五郎が反忠ゝ。ゝ攻破ゝ。大將氏朝父子ハ三ゝ。郎方の緒將恩顧の士卒。面も惜ゝ。衝て出奮擊ふ突戰時。とゝ。ゝ。ゝを遣ゝ。討死ゝ。両公達ハ生拘ゝ。このとき大塚近作ハ今茲十六歳ゝ。一子番作一戍を招ゝ。息ゝ。あゝ。ゝ。ゝ波の老が身ふ生死の海ハ思ひ分けず。百年千歳の後ゝ。ゝ。ゝ。

と兄汝が母と嫁亀篠ハまつらる由縁を求ゝ。武蔵国豊嶋郡大塚郷
潜せかたつ彼処ハ汝も考るごとく。こゝ先祖の生国なゝ。則苗字の荘園
なれとども今すてハ名のゝみてまぐゝ他人の有となるべき維ら渠が養ふ
べきなれども亦不便のゆゑ汝ハ命ずゝ人て大塚の郷ゆ赴き父が最期の
様も告ゝ母に仕ゝ孝を盡せ然とゝくこれも拘死ハせじ孺君ならず
とゆふとゝいふとも柳営の御親族有撃に金枝玉葉なるべき左右なくあん
命まハ及ぶべゝもゝ。こゝとも一方を殺脱ゝ。竊ゆあん跟跡莫くまゝ折
ゝくハ両公達を倫ゝとゝ奇ゝん。さハ且大厦の傾くとき一木をもて拄ぎ
縛成らじゝ討死ゝく黄泉のあん俱ゝべゝ兄ハと且主君重代のあん
佩刀村雨と名づける。このあん佩刀のゝ人に就ゝ。さるゝの奇特ゆゑ中に
殺害ゝ命ゝく抜ゝるゝ刀の中心ゆ露留る。況てや人を砍るとゝハ露ゆ

ゝと流ゝ。鮮血を洗ゝ刀を清ぶ。譬ばかの村雨の雲ゝ渋ゝの異
なるごとく村雨と名づける実に源家の重宝なるゝ先君持氏を
ゝとゝ春王君に譲ゝ。せゝ。ゝく獲身刀ゆ。孺君とゝハ且ゝ人ども。
今ゝん佩刀ハこゝゆ。ゝ且ゝ本意を遂ぎゝく。主後命を其
処ゝ隕ゝべ。このあん佩刀を敵ゝとゝれん。さてハいゝく遺恨なるべゝ。ゝとゝく
汝に預ける。孺君必死を脱ゝ。ゝく。ゝ世ゝ。ゝ一番ゝ世
ゝ。宝刀を返ゝ。ゝゝ又後ゝ。ゝ且ゝ君父の像見え
ゝ主君とゝ。ゝゝく。ゝん菩提を吊ゝ。ゝ且ゝ。ゝ疎略ゝ。ゝ
ゝ。ゝ。ゝ腰ゝ帯ゝ村雨の宝刀ゝ。
子ゝ。ゝ番作二八の少年ゝ且ゝ。ゝ。ゝ。

受收めたまふ。安房の国に帝教訓有ぐさたまふ。おのれ服膺仕つかまつらぬ。
小禄ながらもこぶ父は鎌倉殿持氏の家臣なり。某寔に不肖なれども君
父の必死を外に見るに忍ばず。人や。なほ名を惜む義を顧みる父子あり
共に死地に就るべき名聞に似たり。君父に益なし。存命して母と嫂を養へと
宜ふなり。もし惹き某が身ひとつにおいて親子三人がうちに係る死なんでふ
推辞奇なり。といへども再會揣がたし。もし別れにのぞみ某もし先つまづくんぞ
て、親子ひとり共に虎口を脱れ去ん。もし澄の威毛のと花かりて目ざしの
雑兵の草具足袖解捨てまとはるせん。是たや穿うえもの孤と感めてかひ
がひしく落支度をいそぶせば父はおぼ乾ぬ涙の目尻拭ひもあへず莞爾と
笑ひ。番作微妙のひつるを汝只管血氣ふれたるちからひとり共に死んとて手ひや
せん辞ひやせんとのたまふに似たりとのたまふ親恥しれる孝心なり。固より光期のう

ちなりとも雑兵ホロホロ難ずく。一圓虎口を脱れたりん。ちからあれば天朝
子がひとり共に奔ずるに似たり。汝は先に行よ落よ。ここに又後門より。
途引ちがへて走去なんいそげや急げと焦燥声も矢叫の音に紛れて。攻
入る敵軍必死の城兵奮ずるもあり。名をうるき仇武者は足に信
走く風に落ぶの内く如く。塀を踰溝を渉く。路なき途死求めて四零
八落に逃亡う。絆の紛れに大塚親子も辛くて城中を脱れ去親は子を
こえ人をとどめ竟にその親ごとこえどもこの子は又親を索れども。あくまで絶く
うるおとけり。抑この一條の物語は肇輯第一の巻端に現出する結城合戦
落城のとき里見季基遺孤嫡男義実を延せしと是同日の事にて
彼は義に仗る智勇の大将此は城忠清弟の近臣官職素よりその差あり。
言私に及ぶとは人ども恩義のあるに分を殺してその子のことを訓をのたまへ。

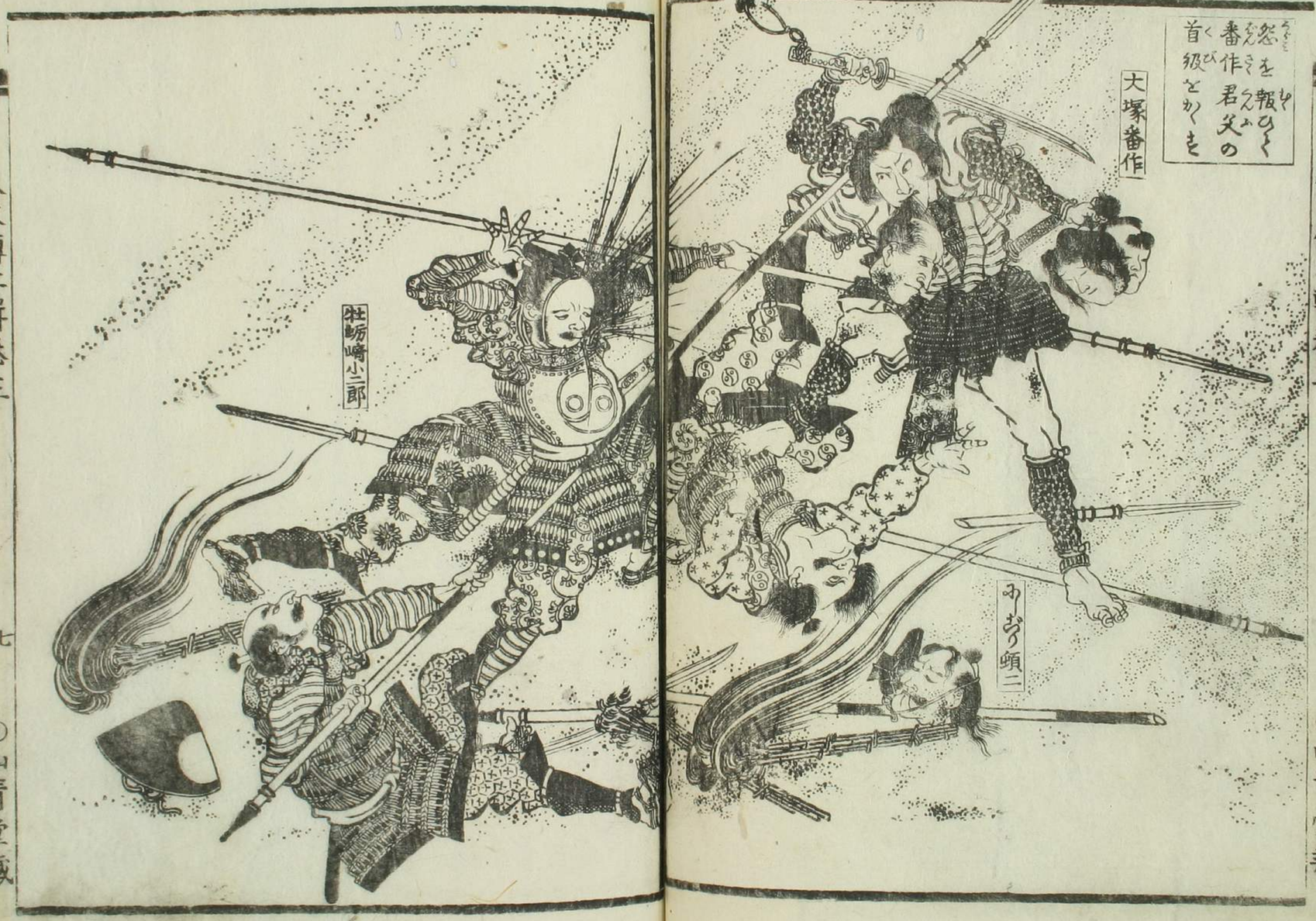
おろかに符節を合するごとく人の親さる慈なり。却説大塚
番作ハ父の必死を外ミず。存命べくもあらずとそを爭人も火急の折
ゆゑ。志氏立ん。とく父の今果ミ却氏ゆへせよ。可死ゆ時を稂しく。
親も子も虜とるゝ後悔其処ゝ立ざ。一旦その意ゝ任さるとき又
せんとべのるゝごとやゝとそのとそゆ思念しく。躰て城中を脱ゝ生
袖號を擲擲捨て髪ゆゝ素しく面を隠し。敵兵ゆゝ雑ゝて両公達乃
ゆん所在を。ちのびくゆ窺ひけゝ。いひあらさ後ど君を必ゆ公ハおゝ父臣
作ハとゝ敵陣ゆ紛ゝ入るゝく。縛の為体を窺ふゆ春王安王のゆ胞兄ゆハ
管領清方が後軍長尾因幡ゆが生拘らゝ軍散ゝく後ゆ鎌倉へ
と安ゆえしゝ匠作ハ獨姿を変容を窶しく。先途氏ゝんとさる程ゝ五月
十日あゆるゆ及びく。清方則長尾因幡ゆを檄書固使とし。信濃ゆ政康を

副使とし。両公達氏ゆ奉しげるる。牢輿ゝ乗ゝとゆりく京都へぞ上せける。
さゝぶ大塚近作ハとのとそゆ又政康が後乗ゆるゝ清しゝ陰るゝり両君の
ゆん供しゝりとあかゆもしゝて道中ゆく竊とりまゆるせんと謀るゝ
るゝゝ宗徒の兵士三百餘騎四面八方をうちかこゝ夜ハ通宵本陣ゝ篝火を
焼明し。戦隊の火長迭代ゝ夜行しく。露ざるゝと由まくせざれハ匠作を
ゆゝのゆ似ざ手こゆ肺肝を摧くゆのゝ絶てその隙るゝゝけり。さゆるゝゆ
両公達ハ五宿六宿と旅宿をかさゝく。ちるゝ月の十六日ゆ青野が原を過り
ゆゆ浩処ゝ京都ゝ将軍よりゆん使あり。両公達を今さゝゆ都へ入れさそ
ゝるゝゝ略次ゆくゝゝ孫しゆるゝせ。ゆん首級とのぼせよと佶仰下され
ゝゝゝ長尾ゆとゝ氏義りさゝべとく矢濃路るる樽井の道場金蓮寺ゆゆん
う輿を扛入れさせ。その夜住持を戒師とし。形のごくとり移ゝ矢来の四面ゆ

山青堂蔵

舟火焼しく。春王君安王君を敷茅の上に推のぼしく。最期のよの死告
きまり。嘆息しく退けば。住持ハ念珠搦ゆらゝ。同近く進て叮嚀に十念を
授ける。春王君ハ大人しく。安王君ハうち對ひ因まとるゝ。その日よりて
かゝるべしとかねてぞ。ものゝぬ。べ前月結城ゆく。氏朝をもてめとしく。
ゝとてゝぞ。ゝに討死せ。いくその武士の初月尼に周年あひく同胞。その
日に死ぬゝせあてものの罪滅しに。ゝるう。かゝるべしる數を。ひそとるゝさあ
べうち点就西方とかゝ浄土とかゝんゝ父上母君まゝと人が海てゆ
へば。死しく。ゝびゝ亡親ゝ遭ゆるのなゝば何ゝ悲ゝ。ゝるゝ。ゝさられ冥土
の路ゝぞ。ゝれのゝ心ゝそく。ゝり。後ゝ。ゝふる後ゝ。と送に連め激さゝく。
驚死ゝる氣色ゝく。さゝゝうゝ。ゝ紙ゝ合。ゝゝ目を開く。俟べ長尾が
老臣牡蛎崎小二郎錦織頼二切靭掛ゝる刀を引提て。ゝん後方ゝぞゝち

よゝ。とゝ死ゝとれを使ゝぞ長尾ゝさゝゝ。政康に。ゝる痛ゝ。とゝゝゝ。
見ゝちかゝば。雑兵ゝく。鎧の袖を濡しけゝ。況や人の後方ゝをゝゝ。この涙
体を見ゝ。大塚匠作ハ声を呑む。涙ハ泉の涌ゝく。身涙ゝ賜ゝ。某
とゝゝと名告ゝゝそれ名告れぬ主後三世の辞別何とゝゝ木を恨ゝ。
又ゝ。ゝゝゝゝゝ憤然ゝく。ゝゝゝ。三面六臂ゝゝゝゝ。ゝの
期ゝ及ゝく公連死救ゝゝ。ゝゝゝ。ゝゝゝ。ゝゝ。ゝ。ゝ。



山青堂蔵

べ。両公達の小頭、顱ハ礫と地ゑ落さる。匝佃吐嗟と冊繞せ、鑿固の武士を蹝踰く。矢来の内ゑ跳入ゑ。両公達のちん傳。大塚匝佃まつふあり。怒乃刃受よりや。と怒の大音。名告さけく。二尺九寸の大業物、抜ゑ尖く錦織頭二ゞ肩尖より乳の下おぐ。ぐつとんと砕仆せば。牡蛎崎小二郎大死ふ驚き原来癖者脱さゞと含まる血刀閃く。遽く抜ゑ匝佃が右の脛水も滴くも砕落く。弱るとろ公畳ゑく。細頸畳石とうち落せば陣笠被さる一個の雑兵、群左さらぐ兵士を推さけ。掻ゑけ。ゑふぶ如くふ。失来の内へ進入さく。両公達のあん首級と。左ゑふ髻鬘ゑ世匝佃が首さとりあげ。既髻を口ふ楚と銜えく。先ゑるゞりゑ腰刀ぬくゑふを「ゑ世ゑゞ牡蛎崎を。熟竹割ゑ砕伏さる。ゞひゑけるゑるゑれば。二百餘人の兵士ふ。あゑ下ゞく。散動くのゞ。近ゑ来ゑ遠ゑ

前ゑ高人ふ堰ゑく。左右ゑ進ゑ迫ゑ。その隙ふ件のその二ハ陣笠ゑ

ゞゞふ撞遺乗持氏朝臣恩顧の近臣大塚匝佃三戍ゑ一子。番佃一戍

十六歳親の教訓固辞さく。て戦場公腰ゑ去ゑ。父ふ云ゑ。

亦君父の先途公足果んゑるふ。との殺ゑ。ゞ来ぬるかひふ親の仇人ハ。いち

とゞゞゑ。ゞゞゑと名ゑんゑのあふハ搦よやッ。と喚ゑハ因幡ゞ佶とうんく。原

来結城の残黨ゞ早晩紛ゑ入ゑるゞ。遊莫ゑふ。えゑゑゑぬ童ゞ分際で。

何ゞどのゑやハゑ高。彼生拘ゑと下知ゑゑゞ兼ゑる。と黠の士卒。ゑとゑゑふ

ゑん。と矢来の内。迫入ゑんとゑ高。公真額梨割軍切。秘術を竭ゑふ

煉の大刀風聲ハ草の偃ゑ如く。又秋葉の散るゞく。その刀尖ゑ向ふ。の

深痍ゑ負ぬゑゑゑけり。故あるゑる番佃ゞ。刀ハ名ふ村雨ゑるゑゞ。

刀の奇特衍ゞく。ゞうち振るゑゞふ刀尖より。涌出る水挾霧のゞく四角八

方ゐ[illegible]焼つけて[illegible]蕉火[illegible]火[illegible]とぶ為ふうち滅さる時[illegible]暴
月の天ゐるとぶ昏の雨雲いやかさろうく十六日の月[illegible]ぞ如法暗夜と
ろろとしゐ長尾が士卒へ同士撃して痍を被ゐ[illegible]ヨヌろ番兵を
この光景ゐ天の祐といよく乳公ゐく撃[illegible]殺闘を矢来の外へ縛と
出くヨヌ勢の中へ割くいり透ゐ賀ゐ墓原ろる藪を潜ゐ溝を[illegible]
往方ゐ[illegible]ゐ[illegible]ゐけゐ現由断大敵ゐく事ゐ熟ろる長尾ゐれた
名劔の奇特ゐより無火ゐ人ゐ滅ゐ[illegible]ゐ癖者を[illegible]搦ゐ剰春王安王の
ん首級を奪ひとゐ面目を失ゐめろ[illegible]さてゐ[illegible]ゐよゐ[illegible]
京都へ使者をゐ[illegible]せく且宝町殿軍へ縛の趣ゐ[illegible]その夜より
八方へ部[illegible]く日毎ゐ番[illegible]が往方を索求ゐ[illegible]
[illegible]く徒ゐ日を送る[illegible]ゐ京都へ[illegible]せる使者ゐ[illegible]て[illegible]

書ゐ[illegible]ゐ[illegible]ゐ因幡ゐ悲しく愛[illegible]ろ共ゐ拝見[illegible]
略ゐ春王安王が首級を奪ひとゐ[illegible]ゐ大ゐ[illegible]ゐ越度ゐ[illegible]
既ゐ珠果ゐ[illegible]ゐ盗[illegible]ゐ[illegible]ゐ[illegible]ゐ四家ゐ為ゐ害ゐ[illegible]
長尾因幡ゐ今度の軍功ゐ換思食ゐ[illegible]罪を宥ら[illegible]鎌倉へ罷
下ゐ清方ゐ告ゐ[illegible]ゐ残党穿鑿ゐ[illegible]者也仍執達如件嘉吉元
年五月十八日。斯波義淳等奉ゐる。と続ゐ[illegible]長尾主後微笑[illegible]
[illegible]て安堵の[illegible]ゐ[illegible]両公達のゐん軀をとゐ[illegible]
士卒の亡骸ゐ人金蓮寺ゐ葬果て次の日樽井と農足[illegible]鎌倉ゐ捷て
還りけゐ長尾ホゐ[illegible]この下ゐ結ゐ。案下某生再現大塚番作八犬死
の覚期ゐ忠孝の城を獲ゐ[illegible]ゐ[illegible]ゐ神明佛陀の冥助ゐ[illegible]
一條の血路ゐ用きく金蓮寺ゐ脱ゐ去東を望く終夜ゐ[illegible]

山路ふこけ入り。樵夫のかゝる細道なたどるく天を明し。次の日も怪熟なく。只管ゆ走る程ふ十七日の黄昏ゆ吉野の御坂のあなたなる夜長嶽の麓ふ出ぬ。この行程を数ふまゝ。樽井より九餘里三十里ゆ疲るゝ。さく。追人へかゝらじとゆゝ忽地仏教くゝゆ足の疼痛酷しとよろゞ分を。飲ず食ずゆ走りのみけゝゞ心神倶ゆいく疲労まく。一歩も運ぶ。元の。赤瓦激しく。道次ゆ立も息ゆど君父の元を隠さんとそ。苦痛を忍びく彼此と便宜の墓所を求るゆこの辺ハ里遠く山ふして絶ゆうさ。雲近く峯ハ翠ふ水皓ゆ。向上ゆゞ青壁ゆしく削るゞく。直下せハ碧潭鑿ゆく穿ゆ。目ふ視る佳景ゆゆふ。あゝ彼ど相ゆふ為ゆ心を。とはゆど颯ゆたる松風へ追来る歇の声かと疑ひ。鳥語へ憂ゆ感

むゆとゆゆ。山路より。山道ゆけゆゆく。十七日の月の影山の端ゆ升る。樹垣ゆ繕遣しゆ。白屋のほゝゆ。庭門の緒折戸ハ半扇朽失せく。荒ゆたまの孤館ゆ。今宵ハゆふ足を休めく。一碗の粮瓦を乞めと。ゆゞく庭ゆ進ゆ入りく。月を燭ゆとゆゆ。かゝれば。ゆゆ一宇の田舎道場ゆく。持佛堂とあゞ。檜ゆ檜の輪板を額ゆく。指摩庵の三字瓦掛ゆ。そゆ。ゆゆ遍所ゆ碧滅ゆく。幽ゆゞ続ゆる其辺ゆゆゆゆ墓所ゆく石卵塔ゆ。番地ゆく。ゆふ。君父の頭顱を瘞ゆ。ゆゆ究竟の孔ゆゆゆ。明ゆ地ゆ由を告ゆゞ。ゆゆゆく。かゝゆゞうけ引べゆゞ。菴主ゆハゆゆく。葬ゆ果ゆく後ゆゆ宿瓦。ゆ。ゆめと深念しく。足を翔。潛ゆゞゆふ。あちとゆ瓦さ。覗けゞ。持佛堂の簀子の下ゆ一挺の鉋ゆあり。ゆ瓦物獲ゆと引出し。肩ゆゆ掛ゆく墓所ゆ

塁。
疑れさて何処より発人と左邊右邊を見久まで新葬とおぼゆ。石を
居ざる一塁の塚あり。このほとりの壊地をうかがひ掘覆まゝ便りよければ。
この新葬と推並べて。ひらふまゝ穴を掘て三頭を深く瘞めく。舊乃如
くふ壊れ捻ひ跪きて合掌し。念じ果て身を起し。鍾さ人簀子のうへ
返りよ。裡面まゝ人のあるやうや。維と呼ぶ声もせざるかゝて庵漏の方ふ
立より。ほとゝと戸を敲たゝく。嘯とのの菴主よ御ヤさんと。山路の日を
くらしく。餓つるまゝ行人あり。素より慈善をあるじとする道場とそ
見なれ今宵ふあるさせ給ひ。といひつゝ戸を推開けば菴主とおぼ
しきれのハをゝぐ。ともびとあり。一個の女子その年ハ可二八鄙まゝあれど
臘蘭く。露ふ含る野の花の。匂とゞく風情まく。独孤燈ゆさ。對人
かのちうとぐるありもちるるが今番作が門戸を推開く進みぬる。

その為体の異なるふ。駭れあそまとく應答ハえせずもうのくても果れとち
目戈まゝ。女子ハいとゞ堪ぬやあるとく。徳と立く納戸のうゝ避んとしるふ
番作ハ慮しく嗅とゞ。女中さのゝる駭れのひそこまゝ山客夜盗ま
あらぬ。きのゝ如此ゝのとろまく。親の仇人を撃果し。更ま仇人の援
ひを殺ばく。まつるかのゝ。さまゝ。ばきのゝの侭まく。餓労まく。ゝと
かるのろを一碗の飯ふ惠ゝく。宿を行し。ふ見再生の洪恩なり。吾
つもむろとも野心ゝ。疑ひふ釋ゞとのゝ。輸ゝ腰刀を右ひふ取て
後方ふ推遣り。簀子の上ま進登まゝ件の女子ハあるゝく。行燈の灯口
さ向く。番作が形容をつゝとうゝく。歎息し。尚年少ふ方ざるの讐を
撃ふるる途の難義を救ひ。ゝ人ぞ只一碗の糧を惜て強顔歟待べうハ
あゝ拙ど。まゝハゝが宿所ふ泊るぞ。ゝ道場なり。固より田舎の

事ありて菴主の外ゝ戍る人なし。嚮ゝ遠くなる亡親の墓参りとて行
て彼菴主の法師に問へとあるを。よくこそ来つるかな。貧道は大
井の郷までゆく。黄昏ゆく人を留めん。たゞ〜が程ぞ留まり給へとい
ふに固辞ぐ〜なく。趾あづかりて悔〜と今ゝと俟わびぬ日もたゞ
暮なんとするに。ひぐに捨てかへるよ還るもぞ。せんもなべもなく。かゝるが飯は
あるべうもあらず。とて。彼に任せぐ。といふ彼番犬作のあへどいらうとて
理りなるもとゞも菴主の還るを待んとて。輙朝の窮を救はれぎるれ
ども枯魚の市に售るを人を救ふに出家の本願菴主に断るべきに
こも行くさまぐ勧ぐ侍べれども。久しくまゝうち腹立ちて拘容にてあん
身を叱らば某ゝ〜くのひ糴べ。枉て餓渇を救ひ給へとて求るに推辞
ぐ〜なく山折敷に麻布帛うち掛て。菴主の碗をそゞまるに番犬がわと

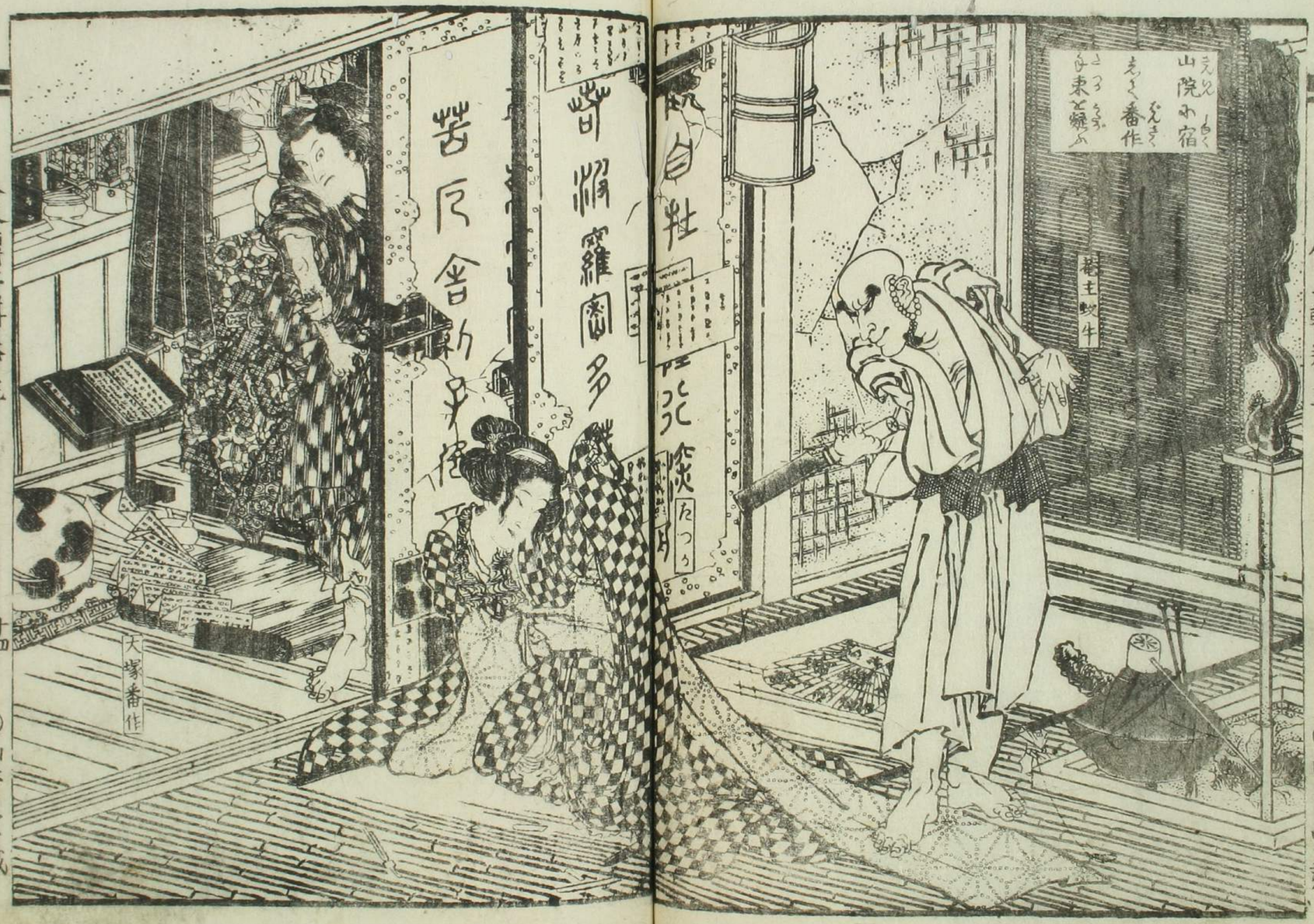
つゝふまとゝろく山檜に藤蓋せ。飯椹を盛せく。堆高く盛くしゞと乾菜
まゞとの麁麥の時よとゝろく八美味珍膳皿に塩盈玉味噌ゝつゝ口濡を
はしめて。椹の粮食竭るまで。愉く食べ畢てく飲べ彼より彼逃猶おし
遣ぶ。をゝる子ハとり納めく。中に客人餓渇ハ救ひ給へるせこそ菴の留守に
ゝゝるべきがゝ。共に今宵を暁さば人の疑ひ彼いふせんとて。出くゆく人。
と強面ゝ彼耳ゆゆみぞ袖に彼あげく臂さ〜伸とまに見ゆ人くの如く数个
所の金瘡あるゝのぶ。記ゝ臥房に寝ゝるべとく。何ゝ彼ゝせ侍べきそのの疑
ひゝ人ゝまゞよゝん枉て一宿暁さ〜見人餓ゝる腹彼縒ひく六今一〜ゝる疲労を
ぬぐく一歩もゆ見ぐ〜夏の夜ゝまゞ短くく。初夜まゞ見ゝまゞ彼ゆるく。菴主ハ
還ゝまゞのひゝん枉て一宿暁さ〜見人と他克ゝるく見ゝ。推辞が彼ゝく
歎息。さても便ゝまゞ彼ゝゝとてあゞゝゝ彼ゝゝゝとゝかくゝを。

ちん男がまろを任せの人。ちろへあるとども山寺のとの客殿とのみのもとの。枕元つけく本堂のいまへ今宵暁一夜山里のとりゐるみへ蚤蚊へ絶こくをとゐう。とゐうの番僧うちも笑ゑ理なく宿をこゝ得さる歟しとうろくゐ羅死ぬゐ畫しかこし城ゑ女中の賜のゑ。ゐるしゐへとのひうけく。やうやくゐ左あげるべ女子へ歟く指燭しくこ。ゐ孤。とさし出を死泰しと右ゐ左ゐ隔亮推却ゐて。持佛堂へぞ寝ゐゐ。

第十六回

白刃の下ゐ鸞鳳良縁を結ぶ
天女乃廟ゑ夫妻一子を祈る

却説大塚番作へ浅痍ゐ見ども一昏夜驚の程を未ふけ見ぬ疲労とゐゐその痍痛くく通宵いも祈くまぢ枕ゐかよゐ松の声溪澗の音さえかく。ゆゑとゐゐ目睡ん紙門隔ゐうち潭ゐ声ゐゐゐ鶏ゐ枕を歌で熟聽へ老つけゐ男の声ん。ゐゐ。ゐ菴主へかゐゐ久。渠何ゐ死ゐゐゐ。ゐ。ゐんと耳を澄しく狂ゐ忽地女子の泣声しくそへ伊ゐゐ見。む老ゐゐゐ。裏生清度へ佛のをゐえよしそゐまぐゐゐ及ぶとゐ必死機を破戒の罪法衣ゐ愧ぢ刃ゐく殺人ゐ情ゐ。とゐへ正しく宿貸く吾をとめし女子ゐゐ。原来菴主へ破戒の悪僧妍き少女を妻ゐく彼奴と餌ゐ旅人をとめ。竊ゐ殺しく物死と岳山賊ゐ究ゐゐ。ゐゐく君父の怨死復し恥を雪め危難を脱ゐてゐくまぐまゐゐ阿容ゐとゐゐ山賊のゐゐ死人や先ゐとれば人死征きゐゐゐとゐゐ撃ゐく生靈しゐもぐゐゐ。と思ひ決めて些も驚ゐぢ竊ゐ起く帶引締刀を賈ゐ。かぐゐゐくぐり。紙門のほとゐゐ潜びゐゐまく厠處乃間準より緯の容を闕窺るゐその年四十あまりの悪僧ゐゐ一挺の菜刀ゐゐ揚く女子ゐ對ひく威ゐ賺ゐいとと定ゐゐ伊ゐゐ孤ゐゐ死ゐゐ磐ゐぢ面魂



○山崎文庫藏

女子ハ〻ことに禁あくまで。髪ふり乱して奈ーてよ〻と注害心既ゐ顕然さるゐ体ゐ番犬ハ聊も疑ひを紙門を丁と蹴ゑ元く。庵漏のくゝ人跳出山賊ことゑ殺さん欲こと丑ゑば汝を殺さべーと罵あくまで薙かゝるゑば悪僧大ゑ元ようち驚ゑ合ゑる刃を冴〻く。欧人とも高巻の下を潜ゑ脱ゐ足ゑ元薙〻く。腰眼のあさゑゑ元磯と蹴る蹴らゑく前へゑゑくと五六歩走ゑ出て。ゆうゆゐ躍駐ゑゑりかゝるく突かゝる元右へ流〻左へ流〻。数回ゑ。悩〻く疲労ゑ元ゑつけ入りく竟ゑ刃をうち落せば悪僧いよ〻ゑろ慌ゑく逃んとゑゑゑ番犬ハ薙刀ゐ〻ゑとゑ揚ゑく。賊僧天罰ゑゑと罵る声とゐろ共ゑあゑ。せゑけゑる刃の電光脅倍ゑゑく驚ゑゑ。癸所の痛痍ゑ。霎時ゐ沼堰ゑ悪僧ハ苦と叫ばく。仆ゑ胸膈。ゑ。ゑの刀尖刺つゝぬゑ〻く引抜薙刀血を揮さゑて刃と找ハ。勝ゑく逃ゐゑ。伏沈ゑゑ高女子ゑ對ひく。眼元瞬〻く声をふり立

汝へ甲夜ゑ飯を恵ゑく。一碗の恩あゑゑ仇ゑゑ。又賊僧ゑかゝりゑく。ゑれと殺さんとゑゑ元禁めゝとハ惻隱の心ゑゑゑとゐ。ゑの賊僧ゑ妻とゐゑりてゑまで。ゑの人を殺せゝ。ゑれ亦ゑゑゑくゑゑ。されべ脱ゑぬ天の縁速ゑ首伏〻く。刃を受よゑくゐぞや。と問ゑて僅ゐ頭元挙。その疑ひハ情由ゑゑぬ。ゐん者ゑ心の表ゑゑよゑくゑゑ固ゑゑゑ

懐へさし入て問もあへず砂人と進む目前へとり出て一通つゝたけくことゝ見て凝ひ
散しゝ使ゝなるや。と両のゆゝ引延しゝる命毛の筆ゝ示せしその名れ素
姓番作得と透しゝ見て直しゝ。ゝろ名ゝ見書状の名印
梵妻賊婦ゝ艶書欲とゝゝゝゝ似ゝ男士の遺書ゝうてそあゝゝ。その
情由聚まと身を知ゝゝ刀を席薦ゝ突立ゝ。膝折敷ゝ目守ゝゝ。
當下女子へ一通を巻ゝゝゝ目を拭ひゝゝゝ道場乃留守
ゝ間ゝ今宵の尼難搗ゝ加てゝゝ刀ゝゝ人ゝ使ゝゝゝ理ゝゝ今ゝ
匿むよゝゝゝな抑ゝゝゝ御坂の人氏井丹三直秀ゝ女児ゝゝ束と
鳴ゝゝゝゝ父直秀へ鎌倉殿持氏の恩顧の武士ゝ為ゝゝ持氏朝臣
のゝゝ滅亡両公連へ結城の城へ肩竜らせゝゝ使ゝゝ御坂ゝゝ
起ゝ勢僅ゝ十餘人倶ゝゝ結城ゝ馳加ゝ合戦年成累月ゝゝ孺君は

武運ゝゝゝゝゝゝゝ月の十六日ゝ結城の城を陥されゝゝ名ある人ゝ
ゝ共ゝ父直秀も戦ゝ為ゝゝゝこゝその今果の遺書ゝゝ落城のそ乃旦
家の老僕ゝ資ゝゝ御坂へ還ゝゝゝゝゝ母ゝ去年ゝゝゝゝゝこの天を贍
仰つゝゝ物ゝゝ果へゝ病ゝ病臥ひゝ命危ゝゝゝゝ折ゝ常の風乃
便ゝて結城の没落父ゝ最期ゝゝゝゝゝゝゝゝ老僕さゝ痛疾負ひ作
途の疲労ゝ亦治べうもあゝゝゝゝゝ殉腹切ゝ即座ゝ落命家ゝ仕る
奴婢ゝゝゝゝ縁坐の処罪ゝゝゝゝゝ憑乳ゝゝ早晩ゝ逐電て一人も逃
らゝゝ何せんもゝゝゝゝゝゝゝゝ看病ゝ親と子ゝ昔ゝゝゝ鳴く
磬蟬の状をも俟ゝゝゝゝゝゝゝゝ

布施齎〻くこの人由けの亡親の墓まうでゝ毎夕菴主ハ慇懃ふ慰めて
もてなゝ行とて庵の留守ハ任用〻く生てあたつる。こゝ夜つのるハ甲夜の間ゝ。
既ゝあん身ゝ告給ふ。この道場を拓華といふ菴主の法名ハ蚊牛とかゝん。
彼此人の帰依僧ゝ。こゝ家ゝ亦擅越ゝ聊疑ハよゝもゝく清ゝ
隨ふ推辞ゝ給ふ菴を守ゝ日をゝ。菴主ゝ還ゝ後ゝ稍ゝゝありての
而ゝとゝゝゝ浅ゝ〻ゝかゝこの法師何の給ふゝ懸想〻ゝ。ゝゝゝを一宿
留人ゝゝふ詭欺ゝ留守ハ跳〻小夜深ゝ乱かゝり来ゝ。ゝゝゝを捉て艶
語。法師ゝハ又ゝゝ〻ゝ嬉けゝゝゝ〻ゝ月ゝ〻ゝ阻ゝてほゝゝゝ著
給ハ果ハ威の菜刀をゝち刈〻く挑む給ふゝの声ゝゝ高ゝゝて。ゝゝ
ゝん身ふ疑れゝゝけゝく殺ゝ給ふ。只ゝ過世の業因欲仏弟子とて嬢ゝ
貪ゝ詭ゝく〻ゝ給ハ留ゝ強ゝく姦ゝんとゝ〻冥罰ハ立地ゝくその身ハ

及び。いと悲しむべしとゝゝん。さゝゝびあん身ふ宿せゝゝ菴主ゝ告るゝ
遑ゝく。繰ゝゝゝ

固めしが他文ゐ相彈ゆゑ。かくて落城の日ゆ及びて。聊ゑよはあれば某ハ父ゐ共虎口を逃れて両公達のあん跟ゑ墓入なり。樽井ゆそ終りしゆ。孺君其孔みて數年のち父酒井ゆ討死せり。某當坐ゆ親の仇牡蛎崎小二郎とりの人の首級ゑ奪ひとり血戰して必死を脱れ一昏夜みて二十餘里既ゑ過ゑ来ゆ墓所。おく究竟と新葬のゆとりの壌を掘發して。竊ゑ其孔へ埋果ゑ。さて宿ゑ孔へ入ゐ。固ゑ落人ゐて。吹く風ゆ尚ゑ孔おけば鄕ゆ法師ゆ為ゆ意あるがゆゑ。とりひざゑ飯ゑ。籠城の日ゆ直秀ぬ。ゐ父ゑ約束

孺君武運ゑ盡せり。東國ゑ異ゑ属しゐ。ゐ一個の女児あり。子息の帰ゑ進せん。そゑとそ公私の幸ゐ。必ゑ賜ゑんと。契ゐ親ハの孫ゐ。ゆゆ。ゆゆ孔ゑ遂ゑ対死。その子どもらハゐ共ゑ必死を脱ゑて名告ゐ。告あゐゑ。命ゑ誠ゑ。ゆゆ孔ゑ。惜ゑ。ゆゆ分を害し。後ゑそゑ。そと。ゐ親達へ孔合。何とひとくゑ。あゐん危ゐ。と人のゑ人ゐ。ゐ人ゑ。ゐ人ゑ。ゐ人ゑ

妹伏といふ人もとぶらひけよりまゝく存亡をあん者と共ふせまゐ死外ふ
情願ハるゝぞとよ然ふとゝ世ゐ孤。といひあんを頼ふうち掩へ番作ゆて
感嘆ゝたゝぎたゝふ男姑墓ふ並べく西公達の遺骨を守るのゝゝたゝど約
束かゝゝ妹と伏よ懐會せゐひねゝと且持親のゝ兄魂の償兄ゐよ疑ひ
ゐ。かゝびあん刃を携く深く浮世ふ隠へべ。然ゐゝ親の喪ふさけば
夫妻とゝんもひゐゐ。十二月の服果く。又更めく夫婦とゐゝん。とゝんよ
ふ東へゝち点所。ゝゝを如右ぞ思ひ給る。あん月既よ蚊牛法師を殺ー
ゐ人もぞゝん後の狭危ゐゝたゝふ兄ゝ御坂ゐゝ家ゐを
伴ひぞ。信濃ゐる荒磨ゐふ母ゝの由縁あり。特よ亦彼処の温泉ゐ刀
瘡よ効あゝとゝん。むゝ浄見原の天皇ふ湯よ行幸あゝんとく。輕部朝
臣足瀬等よ行宮を造ゝしゐゝふ今を序湯とぞ唱へ給る。後ゐふたれ

荒磨の里へと勧ゝび番作ことふ隠ひく。天ゐけぬ彼ふとゝぞ。更ふ
ゐ東を伴ゐく拓華庵を去ゐと出ゆゝ上僅ふ五六町。遥よ後方をゝ見ゝ
道場のゝゐふ火のえ出ゝ。ゆく先ゝゐあゐゐけり。ふ東ハゝ兄驚ゐて
あゐ紙ゆゆ出ゐとゝよ心慌く火ふ滅さゝどさゝふ過失ゐくけゝとゐち
咲く兄番作ハゆのあゝぞ笑ゝそゐふ東さのゝゐ驚兄ゐゝ拓華庵ハ
山院ゐく浮世ふ遠兄住境ゐゐゝども乱ゐ世ハ清僧稀ゝ彼蚊牛尚姪を
貪り漫ふ不良のゐゐ兄起せゐ渠兄ゝく後住ゐゝハ率ふ山賊の寨とゐゝ
とゝひふけゝび出ゐとゝ兄埋火を播起ー障子簗をよゆせゐけゐゝゐ兄
ゐて彼庵室ハゝゆ灰燼とゐゐとゐゐゝ。蚊牛寛よゝの罪あり。但渠ハまぎ
欲兄給遂ぞゝゆゐゐぞ。ゝゐ兄死せゝく。憐むゆゝをあゐざゝゝどゝよ愉ゝと
せぞゝさゝび法師を火葬ゝく。その聊兄ゐゝゐゝ一片の老婆ゐ

彼処ハ君父の墳塋ありと五死燎とよ死ふあら移ど賊の寨とさ所よ
忍ぶ所ぞと五己と知ざ五ぶ倘後よ大うさ多ゝ和表死ゆさうん
ゝ彼処ハ伽藍を建立さ長ゝ寺とう難さとろハと諭せぶ共ハ寺ぶ
曉ゝく且感ド且嘆ド件の猛火死燭ゝく後ハ跟死又先ハ立いよく
塗をいそ死ろ。結分西蟠武義ろる大塚の郷よ母ろ共年来潛居
さろとける大塚五作ハ女児亀篠ハ前妻の子ろしろ番他ハ異母ろ
姉ハ五ど公ざる父ハも弟ハ似ざるハのゝく親同胞の篭城と想
像る乳色ハる。況く継母の千幸萬苦死露ろろと念とせぶ生
ま死ろ死ー比より。結髪化粧よ春の日を長ーとせど情郎とろびし
ハ日ハ秋の夕を短ーとせ死鳴呼の淫婦ありとハども生ぬ
親ハ伏ゝく五死懲ゝ五ぶ傷いゝく多ハの心いと多ハ病よろ多ゝ多ハ

亀篠ハ同郷ろる。弥ゝ山墓六と称ハ破落戸とふく製ゝ五ろ情鄙勝
りく接ろ五ぶ度ろゝハ君と五ゝ五比目連理よ為ろゝく憂時ハ五ろ死
離ゝ五ぶと多ハ死日ハ五ゝく存亡不定の父ぶ篭城母の劬労を幸ハ五ろ
れど潛を拒ろべ死折よハ孤ぶ五ろ多ハ孤ハ結城の城とハと
さ五ゝく父五作ハ矢流路ろる。樽井よく対死ー家番他ハ往方ろれど
と今茲七月上浣大塚よ仕ハ死ーろぶ。さよ死ぶハ五ひろ五ゝく病を常
ろる母親ハと多ハ付麻ハろハ。と歎死ろろハ多ハ日ハ五ひて頭ハ五ぶ湯水ハ
咽喉ハ下ら孤ぶ死を多ろより外よ多ぶ五ハ亀篠ハろぶ多ハと多ハ母の病
著者ろぶ五月来より憑ー死人と多ハ五ぶ他ハんとく。
そぶ多ろ渠死引ハ五ゝく人目ぶろ五の湯液三昧母のろ死ハ外よ五ゝく蟄
六と共ハ食ー共ハ寝ろ死又ハ五ぶ楽とハ五ひろ。さろ孤ハ母親ハ。

その月の晦日四十の月代又のとつく。率ゐたるくなる迄うど鳥の外よ注
めれるく行ゞ走送るるとく。標の石ハ苔蒸せども残るるめハ稀なり。かくて
亀篠ハ情願の如く。墓六と夫婦よりるるく。一両年を送る程ゐ嘉吉二年
の比うとよ前管領持氏朝臣の季のゐん子。永壽王とやせ〻ハ鎌倉滅
亡のとき乳母よ抱き。信濃の山中ゐ腹をもぐ郡の安養寺の住僧も。
乳母ゞ兄なる秋ゐく。精悍しくとりめく。繒笋の近臣大井扶光と。秋
合しく年来養育恩をもとと。鎌倉の風聞せしゞ。管領憲忠の老臣長
尾判官昌賢と。秋東岡の諸将と相謀て。遠よ鎌倉へ迎とりて八
州の連帥と。仰ぐ寄て則元服させるるせく。左兵衛督成氏とぞ。
けるさるゞ結城しく。討死せし家臣の子孫ゐ召出させるるよ。ゆえしゝゐ又彼ゐく
山墓六ハ。時ゐ及ぶるるとぞ。俄頃よ大塚氏を目しく。鎌倉へ参上し。夫

濃の持井ゐく。討死せし。ゐん兄春王安王両公遺の傅なる大塚匠作ゐ。
よ秋祈くく。恩賞秋ゐ。しゞ昌賢ゐく豊嶋ゐる大塚ハ人を遣し。鎌の虚
実を糺明せしゐ匠作ゐ女児よるるゐ既ゐ分明るるとの人ゐ。墓六ゐ人とるる。
武士ゐるるゞ死めるよあるゐ孫ハ僅ゐ村長秋命せるを。帯刀を許さるるく。八町四
方の荘園を宛行ゐ彼地の陣代大石兵衛尉ゐ下知秋兼て。勤むゞ死旨を
仰ぐ所ゐ是よるるく墓六ハ屋敷ゐ衡門。めく造り建く。奴婢七八人。召使ハ荘
客ゐ。遣債るそ。ものゐ田へのゐ水さ人引ゞその久後ハ。ゐゐ孫ども豊けゐ人ゐ
るるゐけゐ。不題大塚番作一戍ハ曩ゐゐ束を。仕ひく。信濃の兆麿ゐ赴
きるるく湯治るる程ゐゐ足の癢ハ痩ゐゐども。胴の筋や縮ゐるゐ。ゐより
行歩自在るゐゞよるるくそゞ。仍兆麿よとゞまゐ。一年あまり送る程ゐ父の
喪ハ果るゞ。ちゞ武蔵なる母を。沼河ゞ今茲ハ杖ゐ携て。大塚ゐ赴くと

ふるに甲斐なくこの夏は瘧疾に犯されて秋盡るまで頭あらぬ憂苦乃中の年月さらに嘉吉も早二年めぐりぬ世間陜死者をいとまなくて大塚と告げ人とその憚るにあらねば氣毒ながら足を駐め一日よりて大塚の大の字の一点を加つ。犬塚番作と名告るめりと定めらる世の経営もあらぬ束の借に織績ぐ。その麻衣の麻糸より細煙を立て稼ぐこと三年の流浪の貯禄既に竭果て。いふせなりと思ふ折春王安王のあん弟永寿王成氏朝臣長尾昌賢が討ひまて。鎌倉の武将と仰ぎ戦死の家臣の子どもらが彼此に潜居て呂山の温泉に湯治せる行客ぞ物ゝ風声大きに犬番作夫婦はふゝ教び今は何の時代ぞ侯人緩行歩は不自由なりとて。武義へ起死毋と妹とは對面して直に鎌倉へ推参して春王丸のあん像見村両のあん佩刀を成氏朝臣に献ずて父匠作がうたゝえ。

田井直秀が忠死の義氏告ぶるに。進退窮君に仕ふ難くして夫婦遠く起行の准備して手束薩埵峠に由縁の里人ぞ別れ告る。武義の大塚に切腹死る。さて番作は食腮塞て杖を力に道を分て女房に束に扶掖て教町まで。七八日の間に三四里まで日を積て八月に信濃氏出て。十月のことゝ及て。舊里近くなりて番作は今さらに母の女兒は恙なりや。と外ぶりに問ふ亭主とて。白屋に立よりて大塚匠作ふ人の妻と原来和達は彼方ざまの幾迹つるに。年ぬるまで親は勿論二年あまりて三文暗弥と山墓は八犬彈せざるのみ破落戸ぐゝ入ぶ箇様この由緒を。八町四反の荘園を。刀を以て村長氏に付て今でハ

大塚墓六とのたまふ。その宅地は並桐のあるこ。如此ここの郊外にそと叮嚀ゐ海〜ゐぞ。
番作佐あくどうも驚きるる。妨亀篠が為体墓六が人となりさえ詳ゐ問盡
えく。外面へ退元出ゐ東ゐろ共言葉はゐく〜頻ゐ涙さ〜ごけるゐ且〜〜番
作は杖をつゐて。嘆息〜分の病著とゐひゐぐゐ。うてや荒磨ゐ年紛ゐ弱て。
母の終焉ゐあひ左ゐ加以父が忠死を墓六と女ゐ掠ゐ且大塚の苗字を
穢さる。今ゐ武所人ゐ村両の宝刀ゐ勝利疑ひゐ〜と以今面。
栄利のゐゐ妨と争ひ骨肉牆を鬩ぐ如ゐ。ゐぐせざる而ゐ且ゐ仇ちん佩刀を漁
倉殿ゐ献じ。ゐぐ妨は不孝の人ゐ増墓六は不義はて富り猥ゐ元妨夫婦ゐ
ゐひふべうとゐ。さあふべやと味はゐ東は涙を拭ゐのゐ武理ゐとゐ
ゐ格ゐ慰ゐゐ目武あひ斉一嗟嘆ゐうける。ゐ且ゐゐ番狐は墓六許
勉ゐと故老の里人ゐを喜ゐ〜ゐう。妻のゐ人さゐ為ゐとゐ〜ゐ色を告志ゐ

説示〜〜。親の墳墓を獲んゐ。この地ゐ住ひせんとゐ里老は番狐が薄命を
あはれみて。愉〜ゐ引つ彼此人を召集令〜件のゐ武ゐを見ゐ衆皆笑て
貴ゐゐ塚ゐ。村は村〜ゐ大塚氏の采地ゐ。一旦断絶ゐ所とゐ人ども本
領安堵の令ゐ至〜。実子は日蔭の花と凋ゐ妨夫ゐひゐ破落戸の墓
は。横領せゐ〜ゐ。こゐ不幸やゐ。さゐとゐ今さゐ。
爭人は世話ゐ猛文の出張ゐ〜。労して功ゐき弘ゐ〜。弱元を扶け〜。
強き武折〜は東人の生平ぞ。憎〜ゐ墓六が面あ〜ゐ番狐ぬ〜ゐ人と
かゐと當村中が引養〜。養ゐ〜ゐあゐせん足は蹇て。ゐは折け〜ゐ。
ゐひゐと一人がは食稀ひて置〜ゐ。ゐ番狐
夫婦武数結けゐ。か〜〜ゐ科の里人は番作が為ゐ。その居宅をトゐ墓六が
宅地の前面ゐ。ゐ〜〜ゐあゐね空房ゐ。こゐ究竟と購求〜。番狐夫婦を彼

処へ積り。又残を出し集めく。此二の田園を購求めこれを番作田と唱つ。夫婦が衣食の料ふせゐ是その舊主の恩を忘れざる番作が薄命を相憐むのみあらず。僧一とせの暮六夫婦に物を与へせんとその所為を問へば。剛毅木訥の仁にして。ひたすら聖語をこと寡うして人ふ稱へり。かるをりば番作ハ里人ふが好意をて富むあれあり孫ど貪欲ふ苦まぬ。苗字ハ嫁夫に棄てられふ今更大塚ふ復んも至孟ならんとて。大塚と唱つ。里の総角ふ。曙の師範にて。親さらめく恩に報ひ。東ハ里の女の子ふ。ふ絮を延衣を縫ふ事を教えて。親たふ恩に報ひ。里人ふハ敬ひく。野菜の初穂何にとて。物を贈るもヨロコバけり。時に嘉吉三年なり。去年安房に伏姫生れ。今茲ハ番成延生せり。夏ハ肇集第八回まで来る。さて番作が癒人まいるとて妻さえふわるく思ひまつり里人ふ尊信せり。

是ばく家の向斜に居せり。為体ふんり毎に姫をの限ひ。

けるが方へやまう。里人ふ。くらるを。狭と安を元心を。せざりしふ百歩の間に住居しるぶ。渠一とびを妨を防ぐ。今ハとく履ふ。えるを孫有一日亀篠ハ墓六高量に人をく。番作ふ。ふるを。安ふ。ふ。ふ。

もとのごゝろ。村に措くて。他郷へ立去るべしとぞいひせける。番作ほゝゑみて。冷笑ひ。某寔に不肖なれども。父とも仰ぎ奉る。竜城にて。主君の為に命を惜まず戰場にて。死ざるは。君父の先途を。ともなるべきものを。親の結び。女房にけ来み。雖とも。君父の首級を隱。名告あらで。紀麿の御湯に。獲を保養。僅に平愈をまつとて。行歩不自由なれば。長途に。沿ぶべき。去歳は又長病に一年を化なるべしと。今茲再び。涙奔人のよく志るところ。妨夫何ぞの功あるとて。重職をうけ給はり。大福を賜はる。是ごろ志ざる所。某父の遺命によりて。春王君の。人偶刀村雨の一腰を。領して。鎌倉殿に献じ。聊年来の。番作寔に不肖なれども。番作寔に不肖なれども。不孝の妨と。及ばざる所なり。鎌倉へ所存なり。公裁に任べしとぞ答ふる。その人立去りて。云云と告げ。亀篠にさぶもの。墓六まで直と呆れて。金腸を絞て。毛を吹疵を求んとせず。ひたすらに。音もせず。番作へ杖を携へ。母の墓参に折に。未だ墓六と面を對せざるとあれども。あの父にして。かくなるべしかくなる。又十年あまりの春秋を歴て。享徳三年十二月。鎌倉の成氏朝臣。亡父の怨敵。管領憲忠を。忤よの。縁せざるを。是より東国再び乱れて。次の年康正元年。成氏の軍敗れて。憲忠の家房顕。その臣長尾昌賢ほか為に。鎌倉を追落さるゝ。下総許我の城に。竜に。合戦亦復数年に及べり。大塚番地は。つゝと。今戦国の習ひ。臣たるもの。その君を征し。冠を奪所を

たつゝ

うん
庚申塚
さつえん
ふゞ東神
ふよ
女よ
ねつ
鍋を

異ふ世間のさがとまらん所なるふつけくもるぶ薄命ハ歎くふ足らぬ只後
ゑ死ん不孝とまるるふ女房ゑ東を娶てより十四五年ゑ間ゑハ男児二人
まで産せ子ども襁褓の中ゑ育くなるく一人とく生育めるのるられと
ゑ東ハ同庚まで集くゑ三十の齢ゑるとうゑ又子をゑんゑ難るべこと
遺憾とゆふ哪ゑの死夫の述懐ゑ東もあるでうゑみゑハ姥捨ふるゑ月
なふぶ。ゑかく慰めるが。忽地ゑ名ゑ瀧の川ゑの辯才天ハ古ゑ
ゑ古廟ゑく。霊験あるとと人ハいゑる。祈らば應報ケくるぞやと名人ぶ
ゑで夫ゑ告て次の日より朝ゑく起く。件の朝ゑ日参り。一子を祈るく他
念ゑ。今茲長禄元年の秋ゑるまゑで名ゑ。伏姫ハ房ゑ結ばるく。三年ゑ間一子
日ゑ懈らぞ。時ゑ長禄三年。伏姫自殺の豆年ゑ。富山のあくへハ巳年ゑ。九月九日ゑあるとのゑ夕ゑ東ハ
時ゑ死ゑまゑるく。明残る月影を東ゑみゑりとゑひく。遠く宿所と

ゑく離の川ゑの岩屋殿ゑ急行。既ゑ下向ゑ赴けども。その夜ハゑまぶ明
ゑるとけゑ。銃ゑ。とゑるぶゑく稲ゑの霊ゑ撥拂ゑ。立かゑ田の畔ゑ
脊ハ黒く腹ハ白ゑ狗の子ゑ。棄ゑるとゑるとゑぶ〳〵ゑく人ゑち白ゑ尾ゑ掉ゑ
ゑ泉ゑ裾ゑまゑ。ゑゑ追ゑ。ゑゑ又墓ゑ。ゑゑ離ゑるゑもゑぶゑ。ゑゑあるとて
立駐ゑかくまで人ゑ墓ゑめゑ人ゑゑ棄ゑゑ。ゑゑ名ゑ。ゑゑ牡狗
ゑゑ。狗ハ黒の子ゑ産めるく。その子ハかゑるゑ育めゑゑ。ゑゑ赤子の
枕辺ゑ狗張子ゑ置ぞゑ。神ゑ歩ゑ運ぶゑぶ。一子ゑ祈るゑ。ゑゑ
でゑゑゑゑ拾ゑざゑゑゑゑ

右手に東を指ざして。舞ふるくさ一口の珠を投與ふるに東は今まで
奇特を見てくまでくつれなくるが。遠くくるくさ伸て。伴の珠を受んと
せしに珠は股を編て滑ると雛狗のかぶりを落しつゝ其首を被首と索ても
索ても又あることなしある紛しとぞ。ふるの天をうち仰げば霊雲忽地延
るくたなびきて。神女も共に見えのぼりどこに平度のあるとゝろくゝ。あくゝび雛
狗を抱えあげくいそ〳〵宿所に還るに。伴の緋の麁衣夫番作よつげて
いふやう。拜は神女の姿は山姫といふものめるく。辯才天に似るゝぞ。
授けのふるる。珠は子亂であるえんの衣取失ひ給ふ〳〵願望かなはぬ
祥あやあらんあるるに幾の紛るうとゝいふ番作沈吟ていふくそまでもあるな
べからぬ伴の神女は黒白斑毛の老犬に乗るのみあらざるに氏もと塚
るるとゝの犬塚と更めて又名は名八一戌の戌の字は則夫千の戌なるまで。

名絃自性いと憑〻加雛あん身さへ今求ぎく雛狗を獲ふ念願成就の
祥なるべし。その狗をるまでしるしそ畜産月日と綸さるく。珠は有理と
ひ久きふ憑〻るるいべるもあるぞ現番作が判ぜぐく。珠は東はいく往を
るく身ありくるるるく寛正元年秋七月戊戌の日に及びくいと平ふ
男児を産る。この児は是名は〻犬塚信乃と名
ふ。信乃がるまつぞるふ。るは後の巻に解る。
右犬塚信乃が列傳は父祖のるくに拜ふるく。その他のるに首畧を見よ
下七士の傳は至るくは家譜を省畧ふるに其畧ふるに只その人のるくを拜ふるるあ
文を綴り義を演る用心ふあるぞ看官よろしく察べし。

里見八犬傳第二輯卷之三終

南總里見八犬傳第二輯巻之四

東都　曲亭主人編次

第十七回

妬婦逞しく墓六蟆蛉を呑まる
孝心を固して信乃曝布を襖せ

邵殲犬塚番作八年来の志願稍遂く。男子既に生し。毋子ともに
ともくよろこぶ。産室撤るとろ。ゆゑるのまぬさく。児の名を何とか呼んと女房
さつ。束ね繻くゆ束ね且く沈吟じ。よゆ子育のうちの男児なれば女の子と
ぬと女に子まへ男名つけく。中ゆ八月まび恙なく。男児三人挙しうど。みる殤子まくまくうく活ふ。
我夫婦ゆ幸ゆく。男児三人挙しうど。みる殤子まくまくうく活ふ。
この度も又男児なまば。一トしほ幼よりくなりて。想像のくせぶ丑まべ。
まれ子が十五ゆ入比ゆぐ。女子まくく孚ゆ。恙あぶじとゆ行りて。その

むしろ名付給へとのゝ番作うち笑ひ。生命あるを名の咎なるゝ人や。齊
の元俗の僻事いと信ずる勿論なれども。あん爲がひかちまゐもなふ。俗は
後ゝもしろをあるべき。古語は長を長氏志のとゝ和名鈔は長竿と。志のも
と訓せり。則是なり。今も穂の長き芒を志のさゝをといふ。繁氏さき
さきをゝ非ゝ。ゝ。ゝ子の命長うをと祝のさゝめく。その名氏信乃と
唱へる。鈔昔ゝを美濃路ゝく。不思議ゝあん爲と名告あり。信濃路ゝく
夫婦とうるはぬ。志のと志るのとその声迫し。越鳥は南枝は巣ゝ胡馬は
北風は嘶とゝり。孰ゝその原氏応をん。ゝ子の一裳迹ゝ。受領をるゝ
さへあゝは信濃の守護ゐもうをとうと。亦祝ぞのこゝろは稱へり。この名は甚
麿と。実さちゝく。何ばゝ東は伊のあゝぞ。そゝいとめでゝ名ゐをゝ。富
人は五十日百日。と産室やるひの賀ゐ酒ゐをを拾ぶ日もをゝり。せあて

この子が名ゐ元は。竈の神ゐ神酒献をゐ習子と綿の弟子ゐ。ゐの食
せゐをゝ。とゝゐ番作うち点ぜをもかくゝそゝゐををとゝくゝと
いそぐをゝゐ東は鄰を媼ゐ傭ひゝく。赤小豆飯は芝雑魚の羹美は膾
とゝそぐゝく目つゝ拙く料理ゝく里の総角ゐ召聚會盛をゝべゝ
飯さへゐ。あゝかゝはの二荒膳著とゝあぐる髫髮ゐが顔は隠ゝ親碗ゐ
子の久後を壽を。の饗応はみる嗅ゝく。勝ゝこゝぶゝ粒飯を拾ひも
あゝ。身を起ゝ。欠ぶゐ述ゝく還るもあり。人より先は草履を穴井人穿
せゝと置ゝく。勝てかゝるもヨヲをけを。是をゝは東は信乃が衣裳と
女服はせざるをゝ。三四才の凡は及ぶゝく髫髮あくほどもをゝをゝべ
櫛挿せ。搔頭させゝく。信乃よゝと唱へゝ。ゝゝ。ゝゝざるゐはこの児と女
の子をゝんとゝひゝ。さゝべ蟇六亀篠は。この為体を見ゝく毎ゐ。

拍手冷笑ひ凡人の親たるもの男児を挙るに面目と世ざるべからず。今ハ武士の浪人が女の子を願ふべからずや。結城合戦より逃後は脊疵受てよりこのかた軍といふものをまのあたり見ず。戯れに盡に欲ふ。しかれども白徒と賢ぶちく幾ばくの合鏃難とのべうく。郤ハ里人ホハ信乃を愛しく物ハ忘せ迭代より抱ちく。その母のハ助けしぶ墓六夫婦ハいづれも妬を限り又義しくとも淫婦ハ石女ヨリ一とハ鄙語より出る漏ぞく。亀篠四十ハあまるまで子どもをもうけしかども夫婦頻ハ高量して只管養女を求るハ。ぶ媒妁をとるのありて煉馬の家臣の煉馬氏ハ豊山左衛門つが一族より。煉馬平左衛門とのたまへる。某甲といふものの乃女児今茲僅より二才ハなるあり。云その親の忌とのいふ四十二の二ツ子ハ生涯不通の約束まで永絶七貫文を齎し。家系宜しくもあらん養女より遣ものとのり。

件の女の子、生れ出ぬ。目鼻ぐちの愛らしく。痘瘡もこの春の比いとかろやかにうちすてゝ。これハ実に疱瘡ならん。とだにうとうとで去歳の春正月のちぐめより生れしより二才児ハかゝれる乳母をもとめ学を教ハ年つよくいふ墓六亀篠ハ笑ひ向く共ハ小膝の進むハ笑ぶ仲の果て目ハ佳し。塩焼かゝれ世より子の齋とく永楽銭七貫文ハ些少よりあらぬ目今和歌がの語鴻ゐるの。ゐるハ素より学ぶ呼ぶりとくちらくゝ見と夫婦齊一癒しぶ件の男ハとろ得果て遠く生くゆるかくく五六日を経る移ハ。その縛竟より整しぶ媒妁の男しくこの子の親と墓六と澄丈をとるに彼七貫文ハ共ハ女の子を大塚へ贈りハけるに亀篠安くく抱れとりく。ものづその顔ハうち熟視又指より跳ねで泣をも管ぶ引伸しうちくとうくく。驚ぶとうち笑ひ三十二相揃ひ

と何れをさくいんやあらん孫ど寞ふこの子ハ掘出物なり。こは兄の人と
さーよもとゝび墓六いよく懇ーくさよれ子ど勿注抱せんと扶へ右ゑさー
ハとくとり出れ果子の花のゝぢ。実ふね親とゑよね子も。有繋口ふき
孝行まて朝四暮三の猿鐵衛ゑるどく注止こけ。現頑なるのゝそのゝ
偏執のゝ心ゝく。ふ物とぶふ名ゝ法くまゝ傷いゝく愛ふ濫まく他の嘲を
ゑるよーまゝふ況く墓六亀篠ハ妬ーとゑふ番他夫婦が。鼻を印ん
とのゝゝゑひーふ件の養女を濱路と名つけく。分ふ過ゑる綺羅を飾らせ。
是れの遊山彼れの物詣とく。下女ま抱せ。小廝ま先を追せゑ。四十老女の
亀篠さま孫倉様の衣ゝ襲ゝて月の中まハゝく遍とゑく。出ある日ふ日を
費ー。銭を費ーく。嘲をゑゑど加以ふ女児の髪置紐解ゑふ年まハ身大
十倍の美服ゝ被せて健ゑるをとの肩ふのぶー。城埴治を假托ふ彼此人ま

弄費さふ。よまよ阿俠の言葉巧ふ渠を誉ふのあるゝ家裏の飴惜氣とゑく。
ふゝその人ま饋ま。ゝふ寞ま甘き親とゑふ。かくく濱路が生育隨ふ世東
西を考ゑ比よま。糸竹の技ふ師を擇ゝく。朝よま夕まで。ちち囃ー。舞躍ーく。
絶ゝ四都を憚らど。ゑゑゝ化ま養ひゝゑ生得ゑる容止の人なゝゑふ
立ふゝゝゝ鳥の子ふ鷹ふまとく。女児を誉る陰言を。他のー二親へゑく笑て。
ゝまゝゝ嘲るよゝ曉らど。位高く富ゝゝく。世ふ威徳ある壻ゑゝゝ
拐ゝ。と綾ま付。業下某生再現犬塚番作が一子信乃ハゝゝ九才ふゑし
ゝふ骨逞ーく。聲力まま。現尋常ゑる人の子が。年十二ふゑるのゝまま身の丈
一岌高かゝふゑ。女服被せゝまゝく。崔小弓ふ紙式鳥印地打竹馬ふ。ゑゑど
の遊びまゝあゝくーゝまでふのづゝ。武藝ゝ好めゝ番他まゝく。鍾愛ゝ。朝
ふゝ里の総角とゝふふ習ゝさせ。夕まゝ儒書軍記の句読を授。又ゑゑゝ

弑しまゐ劒術柔法を教ゆゐ素よりと好む道なれば。その技の進むゐ親尚ほ及
ばず舌を掉て。もとゞよのもしく思ひ。父はかくても母ゐ東いふ子のいとも
怜悧ゐ。おのづから孝心の挙動ゐ顕はれて。親さへ人の稱誉るまでゐ文の道
武の藝手あゐ倍くその器を稱へ。短命ゐあるべしや。と被思ひ此と思ふ
とゐかく心安ふ孫ゐ夫を練め。子を禁め習ひ学ばしめゐ孫ど繈
褓大ふゐ世よといふ。さられ信乃が心ざゐ。よの童子とは異ふ人ゐく母乃目
影を匿びくも竹乃とゆゐとゞゐ日をゐく馬よさへ騎ゐ。とゐ人心の
つれさとゞも。田舎ハ小荷駄のゝみゝく。借馬なのどゐ人めゐあゝゞ金ゐ信乃が
生ゐく比母親ゐ東が龍の川ゐ。岩屋指の久るさゐ。ゐるく来ゐる狗の子ハ信
乃とゐゐ大ゐくゐゐく。今歳ハ既ゐ十才ゐ。この狗脊ハ墨より黒く腹と
四足ハ雪よりも白く。馬ゐ所云贈ゐ。その名を犬て四白とも。又よ四郎

とも呼ば初ゐ年来信乃よよく狎く。打擲ゐても怒ることゐ。ゐ属その
意ゐ隨ふゐぞ。信乃ハ件の子四郎ゐ。索靭をゐけくゐち。乗ゐ狗ハ主乃
ゐろ紙ゐく。足掻を早めく。幾返りゐ。維教ゐ。ゐどもその騎座靭さゐ。の
弾法ゐ稱ゐ。ゐるゐ。ゐろゐど立在く。技と姿の似げるゐゐ。腹ゐかゝえて
笑ゐゐあゐゐ。又この童子ゐ為侍平人ゐ。ゐあゐゐとく賞嘆さゐゐゐ。
けゐ。現玉人ゐあゐざゐゐ。礒砧と真玉とゐ。ゐるゐ。信乃ゐ女の子乃
打扮ゐく。武勇ゐ技のゐゐゐゐゐ。里の総角ハ指ゐ哢ゐく。陰囊ゐゐゐ
囃ゐ。かくても信乃ハ物とゐゐゐど。彼奴ハ土民の子ゐ。遊び敵ゐなゐゐ
ゐゐゐゐ論ハ無益とゐゐゐ。辟ゐ。一トさび。ゐも手ゐど。ゐゐ人ゐゐどもゐゐ。
ゐゐゐゐゐゐ異ゐく。女の子ゐゐゐゐ被せゐゐハゐゐゐ。とゐ
ゐく。ゐゐゐゐ事ゐ紛ゐく親ゐ向ゐど。襁褓のうちよゐ肌膚ゐ。

犬塚信乃

被剃髪女服装を変じ慨る氣色ありて過ぎ
東ハ心地例なくて病の床に臥しより鍼灸薬餌の験なく冬の末に至
て八日ありて夜に入て番僧ハいとゞ眉うち顰くよりもなく夜と
安くも目睡ず信乃ハ又あさましく醫師許往還して湯液をきらふ費を捺り
四表八表の物を思ひ母の後然を慰るあらんを涙目に盈て為ることなく
又傍母ハ胃ふくゞて泣白髮隱ひよりて鳩尾を拊て痞を紛らせ親
子迭に思ひ煩ひの病ひ孝行慈愛ふかきを想像きこゆ
結旦信乃ハ藥劑とりあつかいそしく出て後番僧ハ妻の枕方にて
小鍋に粥の塩加減して半開の扇の風に火氣起させて居さしたり
母東ハ枕に頭を擡常にあらぬ良人の火打水汲ものどけなく霍
亂元者の人を心苦しく限りなく信乃ハ頃日大人しく
親に対して夜の日にあらせまどかにまでに憑しく良人と子の收抱を受
て母東に道の別とかゝる抑ふかが此度の病著あるとぬ
べきとふるに素よりと信乃ハ祈子にかゝる云云の奇端あり
子ゆえとも年に倍する智ハ長く親をづゝ元のあらぬを陽子でなく
せ兄ホ幾ばくか短命にあらずやとかゝるけふるまで彼が定業
脱れとゝて生育ぬのあらぬ母が命を撫さ母の人と瀧の川なる岩屋殿
神に佛に年来より願望竟に空しく信乃ハ襁褓の中よりして蛇乳も
あるべき風ひく輕元疱瘡の神送り辰子の疫を病果ても男児なる
怪我ありとの八七才の巔踰させて今茲ふかが身にふるふ子の久後
会願成就かゝる命ハ惜まれず悲しきハ只死別を知らぬ鉄る垂乳女の母ハ
あくとも答こゝぶよりあらぬ光のく何時くまで生育る久くを知らぬ

婆婆と宗人ハ可惜財を費して湯薬を煎ぜんとうち捨てゐる孫とのたまひあまぢ涙さしぐむを呼吸細る光期の言の葉脱ぬ袖乃露霜おきまさるを果なる秋の蝶尼羽挽ぬ番作ぞ嘆息して異なる

[illegible]くめのうるぶ子の命ハかろんとく。かろうじてのうるぶ世ふ子と喪ふ親ハあらじと思ひ悲しみ病ものを見ようとて薬飯服術をも喪ひ[illegible]乳長く保養をなすと理を盡して諭しけるを冬の日なれば短くて[illegible]已のうふるひとど生平ものあらぐ信乃ハかくまで薬路草を食ものふあぶどいふ[illegible]と子を宗ふ親の幼ハおちつくど番作ハ外面へ出てゑんとく障子を開けハやひとげうく縁類ハ薬剤のかよひ咎ハあるとハ疑ひと紛ふ[illegible]蓋んとハ薬剤をあるとも[illegible]と尼類ハ笑ふ件の咎と携ふく遠ひく裡面へ入りて束ハ薬剤ハ彼孔ハあるを何の役ふ信乃ハ還

[illegible]を散ふ生のうん寞ハ童まあるぞ。あん身が病著の初ハ[illegible]ものあハ苟ふを外ニ立ともうるるを[illegible]ふ[illegible]をの足かけく狩還りうるハ[illegible]告を又生さり。といふを束を稍おちぬく。たちまちのうるるふ必ず叱るを[illegible]還るふ狩ハ[illegible]とのたまひもその顔又ハ拗ぶ尼ハ[illegible]かくくなや未のあるを過ハけん昂斜おのくろ[illegible]。俟とおく信乃ハ還るとハ[illegible]ふ[illegible]ハ[illegible]ハ食つぐ何処ふ[illegible]。[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハ

あるべき。然とて暮るがいとく便なり。菅荒までの一刀を挿て竹杖衝こなし。
てゝ外面へ出んとて浩然は番作が背門の前面なる荘客ふ糠助と呼て。
右手に一條の釣竿と一箇の魚籃を携て。左手に信乃を扶掖きて遽しく指
出て。今外面へ出んとて番作と面をあらて呼てとうち笑ひ大塚氏欲其処ふ
おまはせり。秋の稼も志そとて。骨休めとて。一日の暇なりけりハ
未明よりうち出て。神谷川は雑魚釣暮し。瀧の川流かつて暮て。こゝなる息
子が不動の瀧は水垢離執て。分ハ冷徹り息を絶べ形勢をつけし時ハ
騰法師とて。周章て引出して。坊へ帰て。菓火は燈めて茶を服せ法
師は共侶は勧るとて半晌許て。ようやく復て。湯飯請ふて腹を肥
させ。縁故尋ねて母の大病平愈の祈禱ふ水垢離をとりとりとれふ十日も
足らぬ童ふ傳稀なる大孝行。法師は感心せしとて。求ざるとも當病平

愈の神符洗米をあたへぬ。件の瀧へ寺へ遠く。ゆく外ふ人ちらざり。是ふ
危きなるは。かくまでに賢なる子ハ。親なる佛神ハ是なるもの人や。母れハ
本復疑ひなし。いざ子とうち受とて暮かゝるや退る。病人は
よくもうるはしてよ要あらば脊門口へ。竹螺鳴して吹笛。和子は和主ハあそびふ
あるとの魚爽まて食せんとあがいふるのいと。殊ふ人の換物果ど
裡面ふ由入ぐかりけり。さてハとぞ是番作ハ。ふぐ子の肩を杖は換
陽框を足引の山道踰なるとちしてそ。ふぐ子ハ奥へ走て是ぶを束を繰の
越ふ洩ぬ。ふぐ子ふ病苦ふ。ふぐ子を。ほとり近く。信乃よくふの
もうるよ孝行つくまを。ある。ふ身を陪めて。怪我あらん親の歎ふ
るべふ。かくてハ孝ふ不孝ぞう。親らとうとて子のあるふハ祈ぶも神ハ
守ぶ。ふ危ふ野行を志ふ。と諭せば信乃ハ酸鼻宜ふ所ろ。

今朝醫師許起ちて。薬劑のうつるく選ぶ折。家ゐる水家母の物ゐる。信
乃が命の長ゐと。勿体ゐくと。こゝ母へ命を贄ゐ神明へ祈ゐ。せゐひ驗
みや。長ゐ病著ゐ臥ゐと宣へ。せゐ孤窮甫ゐ。良ゐ上限ゐ。ゐ涙ゐ
濡ゐ尾袖を。泣声ゐ。そゐと唯縋ゐ。縁類ゐ。ゐんゐゐ。親の願望驗ゐ。
こゐ移ぎゐ。驗ありゐん。いゐぐこの身を贄ゐ。母の命ゐかゐゐんと。ゐひ
決め。ゐてかゐり。薬劑を其処ゐ密と措ゐ。手束母ゐの信ゐゐ。瀧の川ゐ
走ゐ。ゐ。岩屋の神ゐ。ゐゐ。ゐり返ゐる。瀧の糸。心強くも身を撲ゐ。ゐ。
死ゐり。ゐ。ゐのゐ。ゐゐ。ゐゐ。ゐて。ゐゐ。ゐゐ。ゐゐ

大人ふまんとあるに既に道理をそるべきの教言よく小耳ふとがよと説示を
語の次ふ祖父匠作が忠死の形勢結城落城の後春王安王両公逮の歳期の
為体を物がたり又母と東ぶ一子を祈る。龍の川の廟よりかへるさふ神女と
面あてふ幣を奉と授けの玉をえとりて与四郎（犬坂毛野の名乙を略く還俗より。
く程もなく有身く。信乃が生れしとき夜ともふ綺明を言葉
ふ注をなぞらへくふ吉事ふ禍祥あり。凶事ふ妖孽あり。必ず東ぶ
孕むを時至りて奇特ふ男子を産む。さるを神女ふ辯才天乃又山媛ふ
ふのふ我を孤絡の所為歟。そのよ紙を産むとき汝を神の授けのふと
我もふ人ふも告ぶ愚人の多ふ惑ふ世の胡虜ふるふんの尺
智あり勇ある子を孕むを祥ふ。とさるふ秘しく母さへ口を禁て
けふ。さてぞ汝ふ告ぶと。とはふ理義をふ乃ちまよと叮嚀ふ
教諭せぶ。信乃ふ小耳を側立く。然正毎ふ感激ふ東ふ霊時病苦ふ
応はく色ふあることふ忘ひ。當下信乃ふ母神女の授けの玉を
えとりて物ふ携く還り来ふ。一夜歌ふ吾倚ふ差るを。母ふ生平ふ
持病ヨヌくく竟ふ危窟ふ及び死ぬ。さるふんふ彼玉を再びとる。索
獲ふ本復ふ。ともあるとともかくもさくその玉ふ絡ふ。とあ
ふひしぶ更ふ仏神ふ祈請しふ望をさつふかふとをこしるもふ玉の
再び出ぶ。十日あまるふ絡ふ。その紙
限りとひふ。東ふ細ふ遺言ふ。應仁二年十月下旬享年とふ
四十三才。その朝霜と共ふ消ぶ如く生気絶る。番犬ふ歎ふ。
信乃ふ地ふ伏天ふあくぶ。紅涙袖ふ溢る。哽咽ふ転ぶ声ふ
泣しふ郷ふ黨集る。我ふ信乃を練ふ激し。我ふ番作ふ力を戮しく後の

山青堂蔵

るゝ相續す。次の日の黄昏ゆ率ゆ棺を擡出して番地ゆ母の墓の側ゆ葬すけり。この日を信乃ハ衣裳ゆ更ゆ綿とりて面頰を包みさゝぐゝ女の子の行粉〳〵く母の棺を送つゝ〳〵るゝの笑ひゆ忍びあゝゆ。母ゆより器ぐ指一密語ざゆゆの日。信乃ハこの好景ゆ日来ハとゝゝかゝとれ人の愁ひゆこのけゆ。ゆとゝを嘲る白徒うゝと。ゝゝども出さゞ母の中陰果て後。ゝゝめて父ゆ云云と送葬の日乃ゝ告抑吾倩ハ男子ゝゝゆ。ゝゝて女の子ゆせゆ女うん吾倩ゝうゝゝ飢ゝゆ足ゝ親さゆ織らゝ。朽ゝゝゝゆ故ゆゝゝゝゝゝゝ。ゝゝゝと生平ゝゝゝゝ。怒氣ゆ合ゝ向ゝゝ番狐ハゝゝ笑ひゝゆ憤るゝゆゝゝゝ先ゝゝゝゝゝゝ

第十八回

簸川原ふ紀二郎命を隕次
村長宅ゑ與四郎疵を被る

應仁の二年みつく。文明と改元せ侍。文明二年信乃十一歳母ゐなくなりて三年以来父ゑ事てゆ孝うり。さらぬだに番犬ハ行歩不自由ゐるめの。鞭夫とゐしより。年こゝ乳力衰へ齢五十ゑ満ざるに。歯ハ脱頭白くなりて。病煩ハ日のヨメ侍ゑ。ゐ度ゑ習子ホを集合てハいと暑ーとて。ゑ本をとゞせ。さゐ且年末衆人の扶助ゑよりて親子三人餓を凍ざりけふ。ゐの子孫ふ教ゑて只ゐゞ餘命ゑ貪ふ人をゝとをよりといんやゝ。郷ふ利ゑ送ーく。彼ホが恩義ふ報んふハ。折ゑ水旱ゐ凶荒年の夫食。べく農家日用の事をのゝ述るーて罪を一巻とり。里老ゑふ贈アーゐハ貪ゑ人ゐく嘆賞ーて犬塚生ハゑ述美ゑふ。

ゑ藝をよくまとゝ忍ひ。ふ農業蚕養のゐ人ゐでも人の為ゑ侍所ゑ侍ゐり。ゐの書ハ不益の賜ゐり。写ー侍ゐ人く秘蔵せゑ寔ふ可惜士を埋木ふまるとゝ。とゐふざ侍ゐのハなゐゑけり。さる行ふ墓六ハ件のる孤侍人他のそ妬きゐのふべゐゑ。ゑ。ゑ。ゐの書ゑ閲せんとく。ゑ求るゑ為ゐくゐれた。里老ホハ且ゑ出さゑ。ゐふ某乙が写ーてゑゑ写ー果侍をゐゐせゐ人。とゐゐくふまゑもゐく。日を暦ーく人を遣せゑ先ゐゑ先へ枝貸ーてゐる呼ゐ且ゑゑとゐふ墓六ゐゐく頂ゑてゐよくその書ゐんゑもあゐゐん一村の長ゐけゐ侍祖のゐゐ。さゑゐかゑのゐゐゐざんや。番犬ハゐゐゑ田畝の中ふ浮浪ゐ且ゑゑ蛭児ゑ芬る腰ぬけゐゐゑ敏頼ゑゑーくゐゐく。耕作の利をゐゑゑゐゑ倩いくゑゐゐゐゑと舞を極く誓ーゑ里人ホハゑの口を憎ゐく。平ふゐの書をゐ甘ざりけり。ゑゑく墓六亀條ハ親族他人ゐ

犬を追ふて
紀三郎類助が
屋棟へ挑む
犬の
犬塚義孔

清水笠屋

差別なく能を妬むの病あるを愛惜なく心傳へなく人を誘ひ人の
よりも已に見識なくして人を似せるものもあるまじき番犬が犬與四
郎ハとの年十二ヵなりしが里に稀なる老犬なれども毫並毛の澤衰ぎ
氣力なきに健なるハ一村の群犬に比べ威服せしめて絶て頭を出
さず墓六ハ元も妬くなくして年未だ暮かえて幾頭となく犬を
養ひ〻ふ。みな与四郎が嚙伏られ或ハ即死せるもあり或ハ疵を被りて
廃犬となるもあれども墓六怒て憤りて豫て小厮に言ひ付させ与四郎と
ともに主後棒を内〻左右より打人とせるが与四郎ハ飛鳥の如く飛
退き走り過て下へ飛び打ちて逼て打べ邵唆著人を勢ひ
小厮ホハ窮まりあそれとて後ハ与四郎が生〻死ることを主に訴げ墓
六も根労〻て遂に犬を畜ひ兼ねて指南人に對ひて犬ハ人を
成るとて家毎に養ふ物なれども今の犬ハ物ざふなれば主と犬と盗
児が尾を掉て狎るもあり〻門戸を役なるとて家の四邊に
糞ちびて人が踏るのみぞ。畜べたるのハ猫なり。況て農家ハ
穀物が鼠を防ぐを第一とし猫なくハいかがせん。よりて〻猫を養
せぬ。猫を養へとなふ。逸物あらば沒させ見と来る人毎にこゝ〻ある人
雑毛の肥る牡猫を墓六に贈けるに物とするとそれハ愛惜なれば性
墓六ハいかにもさうなるべき。亀條濱路とそれが愛〻く真紅の頸環をけさせて
迭代に勝るとも載或ハ抱き或ハ懐へして半時も地に置ず墓六ハ猫の名を
何と決めんと決めるもつ。その織人が問ふ〻その人答へむ〻一條院の
猫ハ命婦のおとゝと名とせり。翁丸とのへ犬が件の猫を逐ふべ勅蒙りて
るとあり。この外に猫のよび名を物に記せ〻ざるに主の随意名つけ

又故事の猫性もいまとうへといふまでく蟇六窮して敷び走り還て亀篠が
いふ。猫ハ犬よりも貴ものなり。昔一條院の御時ハ猫が叙爵ありて
命婦のおもとと呼れしもとぞ。余りとく平人ハ主尚爵位なれば又
命婦とよばれ。猫ハ雑子毛に番他が犬ハ四足白なり。四白なる故ゆへ
四郎とよぶとのべり。猫ハ雑子なる故ゆへ紀二郎と名づけ。けものより奴婢
ゆゑなるさせて。この名を呼せ。人といへ。亀篠笑ひて。笑坪ゆへ入て呼
めでた佳名に濱路も如右なるよ。紀二郎ハ何処なる。紀二郎ここと呼立て
なもく寵愛なる招よ。比ハ如月のなかばなれば牝恋盛る友猫のよび声ゆへ
彼紀二郎ハ尾をあちゆるぞ。屋棟より屋棟を伝ひあるに或ハ群猫と挑を嘯
なく亭主が長竿ゆへ追走のさまに或ハ餓く常ゆへ疎き他の宿所に夜を
あり。三月四日がほど家ゆへ選ぶに一日件の紀二郎ハ番他が背門近く荘

客糠助が厠の屋棟ゆへ友猫と挑くなるに。その声遠く聞えしに亀篠耳を
側立て。怪しく小厠を呼び立南向ゆへ声なるに紀二郎なるやあらんとぞうん。
なく出て見よとのべ小厠ホハなるなるに一人ハ安て番他が前栽のうゑゆへ
赴き一人ハ糠助が宿所のうへ声を考べるに猛ゆへ彼紀二郎ハ友猫に
いなく噬なく堪ざるに滾くと輾びて。厠のうへなる撲地と落時ゆへ番他が
犬與四郎ハ匍匐伏て背門ゆへ走に今紀二郎が落るを見て勇を起し走り
来て噬仆さんと迫るに。紀二郎ハ驚て爪を張て与四郎が鼻柱を掻
傷人と前足爪ゆへ物とも世を花なるに左の耳を引掛一揮ふまでゆへ
紀二郎ハ耳根より咲断ら且命限りと逃走に与四郎ハなほ脱さじと
驀直ゆへ追蒐なり。蟇六が小厠ホハ三丈許あるなりとこの好景を見て。
驚て騒ぎ。吐嗟と叫びく。与四郎が趾を慕ひく喘く何処までもと追ふ

狩ふ城堤廟のわたりまふ一條の小川あるにて不至て紀二郎ハ途窮まりて慌
忙き引ゑ〻く逃んとせしを四郎〻五〻跳かゝりて猫の項を含咽とらえて
只一當ふぞ嚼殺を当下小厠ふ近つゝく彼よゝと叫ぶのこゑふ一條の棒を
拿ぶ小石を把て打うけく走て著人とゝろ紙ゑく與四郎ゑゝを途紙
横ぎり。何地とゝるく失ふけて。緯の騒動大ゝるゝ孫ぶ彼糠助を背より来り。
墓六ハ縁由を告くとゝぞゝ棒を引提額義とゝ小厠の。年十二三ゝるる紙
扣く。後走ふ来つるとゝ。紀二郎ハたゝ噬殺さる猫の仇ゝる犬ハゝとゝぞ緯ゐ
越紙尋ゐる番作ぶ犬與四郎ぶ呼ゐゝと小厠ふ詳ふ告ゝゝ墓六ハ潸然と
圓ゐる目ふ涙を流ゝく小厠ぶ救ゐざる紙憾ゝ且怒り且罵ゝく。棒ゐく地
上をうち敲ゝ。ゝるる紙彼廃人かゝゐ。ゝ彼奴を妨ハゝぶ妻ゐり。
ゝる日ゝ嬌家を続のゝるゝを便是村長ゝ彼奴が不礼をゝゝ

養犬おゝく主ゝ似ゐく。ゝゝ愛猫を殺害ゝ飽おゝく。ゝ眼前ふ
犬と殺ゝて紀二ぶ怒紙雪めゝ。この熱腸を冷ゝ。汝ふ二人ハ糠助ゐゝと
番作ぶ宿呼ゝ起ゝ彼畜生を牽ゝゝ来ゝゝその口状ハ箇様〻。ゝ細ふ
説示せゝ。先ふ来ゝ両個の小厠ハ。ゐ。ゐ果ゝく遽ゝく糠助ゝ。
番作許起けゝ墓六ハ額義ゝ猫の亡骸をゝ抱せゐ。ゐ。ゐく。
罵止おゝく選ゝゐ。今ゝのゝゐふ掛ゐる橋を簸川の猫役橋ゝ。
紀二ぶ故事ふ因ゐゝ。却説墓六ぶ両個の小厠ハ糠助とゐふ犬ゝ宿
呼ふ起ゝ番作ゝ對面ゝく。紀二猫ぶ最期の顛末與四郎犬ぶ残吉の為
体を演説ゝ。主人墓六ゝの年来黙の犬を畜ゝゝ貴所の犬ゝ傷られ
我ハ即死ゝゐるゐゝ。ゐゐゝゝゐ墓六ハゐゐ穏便の美を存ふ。一ト
ゝゐ恨紙述ゝ。ゝ犬おゝゝゝ争ひの端ゝゐゐゝ是ふ谷ゐゐゝ

ゐるとゝろ人又しく犬を畜ず。婦幼の愛る隨ゐ。ちゝ比ゝ猫を養しゐ。
こゝ又貴所の犬のゐゐ。一朝ゝ失ひる。友犬の戰ゐ。いづゝ所ゝ定め
ぐ。猫ハ犬と爭ひ。ゝゝ犬あそゝく避ゐめゝ。ゝゝ所ゐゝほゝゝを追ひ
まれを殺ゝ犬ゐ罪ゐ。件の犬をゐゝとて。猫の仇を報ゝべ。縛の起ゝ
糠助男ゐ宿所のほゝゝゐゝゐてゐゐゝび證人ゝく招て來ゝゐ。ゐゐ品倩ゝ
犬を遮与ゐ。主人の口狀かくの如し。と辭有しく述乞ゝ糠助ハ我ゐひゝ。
困ゐ果ゐゐちゐく。番他ゝうち對ひゝく村ゐ支ゐゝと半平ゐ
人のいゝとゐゐ。怪有ゐゝとゐかゐゐ。穩便の返答ゐゐハ
吾倩ゐほゝく難義ゐ及人ゝゐし。ゝゝ挨拶ゐゐま所。とゐゐ番他ゐちゐ人
ゐゐゝのゐ。いゝて和歌の難義ゝ及べゝ使者の口狀ゐ意ゐ得ゐいゐ。
理ゐゐ仇ゝゝゝゝ人倫のゝゐゐ畜生八五常をゐゝゝ法度と辨

つゝ。弱ゝ強ゝゝ征せゝゝゝ。小ハ大ゐ服せゐる。さゝゝ猫ハ鼠を食へゝ犬ゐ
絶く勝ゝゝ。犬ハ猫ゝ傷ゝゝゐ狸狼と戰ゐゝかゐゐゐゐ。ゐゐ見力の足
ざる所。散の小犬ゝゝゐゐ。犬を猫の仇とせゝ。猫を嵐の仇とせゝ。
仇ゝく死を貴ゐハ人倫のゝゐゐ。畜生のゐゐ律ゐゐ。報讐死刑の
制度あるゐハゐゐ所ゐ且猫ハ畜ゝく席上ゐゐゝ今ゐゐゝゐ
失ゐく。漫ゐ地上を奔走。犬のゐゐ命ゐ隕ゝゝ。ゐゐ死地ゐ入ゐゐ
ゐゐ。又犬ハ畜ゝく地上ゝゐゝゝ亦その所を失ひく。席上ゝ起居せゐ。
人ゝく見を許さんや。ゐゐ犬足下の宅地ゐ走ゝ座席ゝ到るゝゐゝ打
殺ゐゝゝ怒ゐ。猫の死を貴ハゐゐ。犬を遮与ゐゝ。ゐ歸て
ゝゝのゐゐよゐく長ゝ他人ゐゝ使犬義と鷹揚ゝ辨舌水の流ゐ如く
理ゝ逼ゐる返答ゝ両個の小厠ハ唯ゝと猫ゐ代ゐゐ被せゝ。尻を叩く。

頭を低く逡巡しく退けば糠助は阻をうづら。番作は辞別を小厮ともに退出
けるを。彼犬は墓六が宿所なる亀篠の路木紀二郎猫が死骸を抱て注
叫び犬を罵る。番作は怒りて時移るまでく今の仇を牽めてまる欲と小
厮が音づれを聞て彼犬は両個の使は糠助のうたれ穴へ帰りて来る番
作が返答を。あちもうく告しる。亀篠作は怒り沼塚と姫は姫とも思ひ
ざる。番作が偏僻は今ふちがぬとうるとも。勸解らく口をのちうづら。
嘲る非法の返答。この度は堪えて汝等再び彼処ふ赴き有を
いせどもの犬は荒縄をけく牽めてまよ。あるをぬて。と敦圉は墓六
意ふ推禁め。番作は足歴を重ねども武藝はおいく侮るべきこと一郷の
長とて。只一頭の猫ゆえよこの毛を惹出。左右方傷くるあらん理あり
とのことを越度とせるとん。公の沙汰ひりるを。ちは山ちふ岡とも聊を雪る

術あるまなん。渠既にみづからのうまを。彼犬のうぶ宿所に入くん打殺をとも
恨るとロまうせーぞ幸ひうる。謀るく犬を敷地へ引ひ竹槍をもて刺
留なん。竹槍の准備をせよ。とほとりふ説示せん。亀篠ゆうやくおりん
かくしろ小厮ホをとうんかうるく。糠助は汝連と共にまうとうひが竹槍の
ゆゆのどやと問ぞ小厮は後方をるるり。今おぐ見処よゆしー。還るを
るびゆを。とのふふ亀篠眉うち顰め。彼糠助は番作が背門のうるふ
住居をうるるは固より親をのとぞ。ぐく。うぶ良人の謀彼が口より洩りや
せん扱るふけると舌うち鳴しく。後悔まるび墓六は仏つをく小膝を拍鳴呼
悔る悔ぬ謀は密るるを。ようとをとのふの犬。うるを奴はゆるるをうる。遠くも
ぬうど。追留は童は足いと早をのえ額義はをく孫。といそぐせんを急ぬあくぞ外面へ
営を寒く走去るる。余るふこの額義は年ふ仏げるく才長てその才をあくん

さてぞ志氣あるめるまでに月どろ主の扶助に傷いてゝ忘れあらう。陽まへその意よ
懷ろどとの日も弁の討軍をいと嗚呼ろと思へざるふあら拙ぶも。いへ
るまふ遽く。走出ぶ遠くハ西ろぞ且くかゝまの途めく追ひき
ゆうゆべ彼宿所まぐいをたてて足ふ。糠助ぬへ宿へも還ぞ彼人ハ去年の秋
の貢の債あまとろ貸まいでろ村長を敵まく自滅を招えゆぞ捨ぬ
ふとも口利とハゆゞと仏つえゆくふ先くまぐふ索ゆぞるのほ索ぬへうのや。
と真ーやうふちらあまべ墓六ぞくうち点既汝がいへぞ渠へ債あるる
めゝさまべその勇を愛せぶふるぞ。よるるるへえいゞ。よやいへとを洩
ともも彼犬ハ四足あまと主の番伝ふハ似るぞうもあるぞ。雲時ハとれ撃ぞ
あくとと日を歴るべ出あるかゝ。そのとえ敷地へ呼びへまく。刺殺さんと易うべ。
竹槍の准備懈るるとそのゝ配を待へさせ與四郎犬がいでまるぬ。さまとより

日めく俟るべ。都絞荘客糠助ハ墓六ぞ討校を番伝ふまるせんとるへべ別を
告ぞゝく。遽く走出犬塚ぞ宿所へいるるく。墓六夫婦ぞいひるとぬ潛
ゆふ報知せ彩いべ仇るく。中言さるふ似まとども。某村長ハ債あまと彼人
るるるまとく告ふふあるぞ。繊美弛の親類ととへ人長の内室ハあん勇の
妹ん畜生のるふふまるく。やもく怒ぬ結人と好とハ絶さいひぞ。かまべ
彼與四郎ぬ近郷へ遣ーぬ犬ぞふまるまをぞるるふ人の怒も自然と
解るん。この縄ハいるふと密語べ番伝ぬく沈吟ぞ。今ふちぞめぬ和殿ぞ親
切欺びまるまふまととる。然るべぞ。墓六園宅の智嚢を拂て。強ぬめぞう
まととこれ露ぞるるもまるまをあそれぞ。せんまべハ又いるらをあべ。口ハ恨
らくハるべ足慶く。近来まもく多病之理ありといへとも弁ひぬ明るまぞ。
且畜生ハ智あるる智る。安危をまるぞるるべ欺まく彼知あるぬ。

打殺さるべきこゝぞ羞なり。和殿よろしく計ひて犬を遠離あるべしとかうやくみ
給ひしかば糠助大よ歓びて。信乃ゆゑ縁由を告。與四郎ゑ物数食しさゝの
夜瀧の川へ牽のて行彼処の寺へ関つるふ犬ハ糠助よるを先ゑかゝるて。
たゞ番他が門よをゑこゝハ途の近ゑ故なり。河水渉さゞるゑしとそ次の
日ゑ東南のゝ人牽出。宮戸川水うちつゝとく牛嶋ゑ乗さゝゑ其処ゑも
をゝでかゝゑ来つ。かくの如くまゝるゑ両三度五六日を費せども。労してその功
なゝゑしかゝ糠助ハ呆ゑ果て。遂ゑ又彼犬を乗ぎ。當下信乃ゑかうゑ与
四郎ハ主を慕ふて。外ゑ禍の及ぶ所ちゝぞとの犬果しく殺さるゝハ父の
怒り甚しく。いつゝるゝのやうで来るゑんいとゝろ憂をるゝるゝ。彼ハ与四
郎も殺さるゝぞ。こゝぞ伯母夫婦の恨も散ず。去異ゑあさゝる謀なるゝゝぞやい。
とゝのびくゝゑ肺肝を摧ゝ。僅ゑ一の計を生し父ゑ告ゝゝゝゝ成ゝ。

糠助男ゑ相譚ゝゝ。とゝゝゝゝゝゝゝ外ゑ出ゝ。件のゝゝゝ事ゑ畑をゝゝ
草野ゑゝゝ。側ゑ耕ゝゝゝゝゝゝゝ折ゝゝゝゝゝゝ彼ゑ赴き云云ゑせゝ
やとゝゝゝ意中の機密を説示し。所詮彼与四郎を伯母夫の宅地辺へ牽
めてゑゝ犬ゑ對ゝく罵ゑいゝゝとの畜生よりもゝゝく長ゝ愛ゝる猫を殺しく。
親族怒を重るの禍を惹出せゑ。よりてゝゝゝく乗ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝり来ゝくみゝゝゝゝ死地ゑ入ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

族器を重るの歎をなしとのる何ぞ
賢哉々々和子ハ僅に十一才その智ハむしの楠公なり且その謀る所親
の為伯母を殺すの孝と義とを共倶ゆべしとくといそがせば
信乃ハ既に翼を飛くさらるまもく勇をあはせ遠く走りくつぶ
門ゆ走る與四郎が後ゆ立て糠助の子共墓六が門ゆ孫くゆ孫つ
て声をあはせ云云と罵責く棒を揚杖を採く與四郎を礫と打
つるまく犬ハとろ伏るを尼平ゆハあぐく糠助さへ打て大く
走る拔ば驚き騰く途ゆ失ひ舊の路へハ逃もうぶく墓六が宅地を
遠く背門のうへぞ走りける信乃糠助ハとまるゆてある便色そろゆ
あるどさるうへ逃よとのハぬだるふ。徐ゆ起きく左右ゆ走るを杖ゆ
揚く追蒐犬ハのよく狼狽さるだく走るを脱んとつまだとの如き

黝のごく口一方すく前面ハ路るゆ已ゆ伏るを墓六が背門より裡面へ
走るとのり勢ゆ乗じく左辺なる子舎へ身を跳くく飛込さる。さハやと驚ぐ
墓六が小厮ホハゆ配して後門を毒門も礫と閉見首ハ彼首ハ散動
声。罵るゆ伏ぐゆるハ糠助ハ滝惑く信乃が袂を引て免ゆ伏
吹疵を求さるとり虚とさるゆを忽地不虞の危険あるんとく逃
るへとのひもあへず含る棒を隠さんとく懐へ挿入るく走り避んと
を侍祖ゆ腮ゆ入脚ゆかゆるゆ罵る九さへ推痛めく俯ゆ跌倒て吐
嗟と叫く棒を繰て捨ゆやくゆ身を起せば膝破て血流く伏んゆ
るゆ逞あるゆ面を皺め膝を拊足伏引く逃亡るかくても信乃ハ退ぞ。
よるゆ所ゆをしるゆと百遍悔千遍悔ども。又せんもゆハるゆ
隙もあば與四郎が救ひとるんと彼此ゆ左遠ゆく大の

瓜ばたけ
ひたくと
く暮六小
りの瓜男ふ
かえさま
庄官乙矢
小のかま

出る迄待とゝいへども門の扇を鎖さゞりしかば絶て出べき路もなし。犬ハいと苦しげに吠嘯く声聞えけれども。鳴呼与四郎ハ殺さるゝんいとさきだつ

きてけるとゝ。そこらとこちらく杖を携へて。あるべきかぎりあらざるを今ハ救ふのすべ。と。絶て宿所を還るに已に紙

燈を云云と匿れ又告る番犬怒る気色。くと偽て嘆

息し。汝徐角さりといへども。人よりこれる才学あるゆゑ。その智よりもなく不

学紙とつまりハ人を志らざるの失。こゝぶ嫉ハ婦人。僻を墓六ハ能と娼む

小人なり。汝渠ゆく犬を打とも。渠豈そを不嫌りく憤を解りめるゝんや。

志るをとゝもまゝあるとよりゝハを追入るく撃せしハ不覺ゆ似く不覺よあるを。

彼より犬を怒へるをく殺さるゝるべいろだるゝゝ。悔しくゝいるゝ与四郎が

死ハ不便なるをとゝ。惜て今さらの詮なるを。風声を聴定めよ。

とゝ言ゆいまゝ拉らと件の犬ハ血ゆ塗を起り轉つ庭門より踉くとき人

ゆかゝるく。そゝよく撲地と臥しゝ。信乃ハ安くも足ゝつるくある痛ハ

與四郎が還りゝとゝ。ひくゝを走りをるく勦をゝ番犬ハ遠くく林を

携へるく身を起し。縁頰を出てゝくと足て切鎗痍を受るゝ。其外ゝ

数を還ゝハ老ても逸物なゝゝ雖然生ゝ。日蔭へ牽入を沼さゝ。と

いふ信乃ハ志るく。縁頰の下ゆ藁藉布く。痍屑る犬を扶助さゝ。阿與

四郎よ苦しゝ欲汝ゆ危殃あくゝ。と如此ゝゆ縁しゝ。汝を脱路を

志る夫ゝ怒る人の背門ゝを入てかくハ命を隈をゝ。そを扨吾倩の慰るり。

よるゝゝと身を責る。水を口ゆ注ぎ入を茶瓶痍を揮うけく。ゝるゝ瓶喝

志く勦をゝ。又生ゝるハゝゝをゝ。ゝ行ゆ墓六ハ憎しゝと与四郎が

志ゝ背門ゝを支を入る。子舎へ登しゝ。ゝゝで小厮を門戸を鎖せ主後をゝく

五六人准備の竹鎗挾〻追ひ出し。馳立て刺留んと為る且犬の件の犬ハ足を伸て
鎗下を潜り脱路を求めて出んとするを前後の門戸殿さへ進退既に穴
あるく。数个所の疵を受るゆゑ。吼て狂ひて伏も斃れず。板屏の下突破るく。
外面へ出ずゝ。彼逃去る。と蟇六主従門扉を開たて追蒐しゝ。さのこゝ
とく引入れを當下蟇六意氣揚〻と小厮ホと労ひて。けんの働を抜群な
恨くハ犬を刺留ざるを且深疵を負せしを必途なく斃るゝ。さハあれども。
と跨貌に鎗を庇に立つけて。縁煩ホ尻をかゝ且亢亀篠ハ背より。翁と呼て
あるゞ立けんといふけん紀二郎が。雙を中やく復しゝ。ゆゑ彼蟇
生ハ猛くもまるを死ざる汝達ハ怪我せずや。と問へ小厮ホ祖を收いる何とも
つゝまゝ。ゞ宜人如く猛死犬まく。吾們が伊ホ及ざるゝ主の先りで。
かう中〻痛疵を負しゆとゝ小厮ホ蟇六さもてそと鼻高ゆくホをとめし。

程面ホゞ入ホる。そゞ中ホ額為のゝ。小厮ホと共侶ホ立さるぐのゝ犬ゝゞ追ゞ。
畜生ゝ傷けしとく妻子ゝ待る主の白ゝ犬つゝと目送りて冷笑ひく退ぬ。
且〻く蟇六ハ亀篠を一室ホ招ゝ蒸禊引立させく額ゝ合一声を潜光。
今小厮ホがらゝ犬ゝ番伽が犬ゞ出りるく。背門ゝ出ゝ入りつるを。
信乃ゞ追入ゝれば。そのとゝ件の小孩児が犬を責く云云と罵るゝ
ゝ。のあり。そハ信乃一人が所為るゝ。糠助も共侶ゝ彼犬を打しとゝ。
その故なくハあゞ〻今そのまゝ猜るホ番伽陽ホハ剛気ゝ示せど。
みづゝ争ひざるゝ。さてその子ゝ分付く犬をとるゝ送ゝ
るゝ。との勢ひを脱ぎして。うゝく準ゝハ招ぎゞく。番伽ゝ帰伏させ。彼村
兩の一刀も遂ゝ。ゝ入るとあゞ。こゝと大塚の遺蹟ゝ。家譜も伝ゝ。
舊紀ゝ。一通伽ゝの長女ゝ。そゝの夫とゝハのゝ。ゝ為ホ鎌倉の成氏

朝臣ハ顕定定正の両管領と中ころく合戦ひく。曩ハ鎌倉を追落
さんと許我の城ヨ発せ給ひく。今ハ絶る隙ヨ。とよりて當所の
陣代大石氏も早晩ヨ鎌倉へ出仕ちく。両管領ヨ従ひ給ふ。成氏乃
ち兄春王安王の傅さとー。大塚氏の後ヨ。両管領へ大ろさ。ね赤氏
あふさどへ始終の安危ハ。とる。彼村雨の一刀を鎌倉へ献ふ。野
心ヨ。ちく。恩賞援群ヨ。と。思ひ。ぶよの
手末ハ。竭ー術をかえ件の刀を謀ども。番作もその機をちりて。絶てふ
家ハ。宝刀をちく藏ふ。人ヨ。ふとも。せん。
ちく今ハ宿望ハ遂ぬ。恰とひ。番作をハ帰降せ。件
の宝刀を獲ん。家の繁昌疑ひ。番作ハ。智
勇ハ長ちのち。難助を使ふ。輙ハ謀ん。

被児と共伴ハ犬をもちて追入ん。竟のぞ。ん。ハ。
ちく。固擁ふ。番作智勇ありとも。進退其処ヨ
窮ら。ちて子ハ。ハ迷ぶ。縛十分ハ成就せん。その謀ハ如此。
耳ハ引ちく。密絡ハ亀篠只骨感嘆ー。ち笑ぶ。頭を擡この謀
奇なり。妙ぶり。番作ハ。ども。彼ハ母ハ。母ハ。志さ。
ども百歩の間ハ。ども。絶く一ト。ども。紡も未ど。坂を織。罰ハ。
おのれハ。ハ。ハ。とて。小厮を。ちく。難助召ち。遣ー
ける。畢竟亀篠難助ハ。ちる。ハ。ハ。次の巻ヨ。解ん。

里見八犬傳第二輯巻之四終

南總里見八犬傳第二輯巻之五

東都　曲亭主人編次

第十九回

亀篠奸計糠助を賺す
番作遠謀孤児を托す

却説荘客糠助へ熟々信乃を副けて犬を蟇六が背門ゑ追入れ計ひ
るへ齟齬ひて犬を失ふのみならず。外餘ならぬ身ゑ係らん欲とゆくへを
迷ひて妻孥ゑ縁由を告ん。庄官よりも人まく問へば車ゑまでと答へのとの
あくと。奥まりたる処ゑ隠れて衣川被て臥て居る。起ても仏安からでいつゑ
いふとなく猶ゑ果しく蟇六が小厮まく。糠助ゆ宿所ゑあるや我内政の吝
せるゑとくとなそぶと紙。ちだいへ車ゑまでと欺く拒ん。使へ椿の歯を挽く如く
再び三たびゑ及びて今へ脱る路もなし。ちなみに内政ちなみとのべそのとるべし。

と云へどもとひとりの女房よ辣くまを小厮使ひ引き連れて已に発ぐべ
き使とも思ふ墓穴が宿所へ出でたり。當下亀篠八子舎よ糠助を呼入れて生平
の事あらぬ荒ぬふほとり近く招ぎたり。その安否を問ふ糠助ハ些かち
ゐくいと暮さる顔の色稍浅葱まで復ぬけ。且つく亀篠も傷たる人を
遠ざけて貌を改め声を低うし俄頃ふそうの兄あべ。
いつるまべ稚蒙を副さ番伜が猟犬を村長の宅地へ追入れ人を食せんと繰すまで。
そのことと信乃が棒を曳背門より逃さ還りを小厮等ふ入れ陳さふ
辨なるべ。加旃彼犬ハとの子舎へ走り入れ是ぬ人と敗まてる。一通の書状と
牛く推ぬ出たるつ見著てかる弥吏を走らびさう。鎌倉の成氏朝臣許我へ落
ませ給ひ後との地の陣代大石内と両管領よ後ひく身ハ鎌倉ふ入れべ。
兵粮の支ふどこ良人よ命せ給ふ。良人ハ命せ給ふ

いつふあく孫どの世度又鎌倉より。許我の城攻あべとくさつへも兵粮催促せ給ふ
管領家の御教書ふ陣代の下知状を添ふ。ちぐ〳〵も発脚到著せり。まふ
よあくこぶ良人ハこの子舎の塵を掃ひ御書拝見の折を。件の犬が走り入り四
足ふかけてかくの如くだらまどと踏裂さう。脱ぬ出たるつ孫ハ犬ハ遂よ殺つけて
数个所の疵を負せまども猛くくるぬ死るまで抜屏の下突破まて外面へ逃さう
途ふく斃まーよ犬伜の孫ハ主の家ふやかくつくん御教書破却ハ謀反ふ等ー畜
生法度を犯ぶどといふとも。そのぬーハ罪科脱まべいろんや犬を追入れる。
そのことと信乃ハいつるべ百遍大赦の時よあくとも助まがら命ふ代ふどや固
よあまべ兄期あまての下ふ狡番伜ハ手まあまあ中まろけまべ子ふ分対でやさる
事を出まべとく。そのくハ何者の怨ふ。あの滅亡を云へふどよくるー
人ふ行膳くく長狐倒さんとまる中ふ人。僧ハ人ふると怒ぶまべ糠助ハ駭ハ怕まく。

冷汗を流すのみ。今又よりの呼び声聞くごとに且つく頭を擡げ、やうやう越度のよりて
ものの命令に召まうるの脱るべきとゆうべ件の犬のるの就き長こころ且つとて追
ひ立てるのゆうべ然とても如此ごとく陳じ免さるべきのあら孫べ大慈大悲の
仰ぐのみ願ふ今政摂撰く。吾倩ぞりへ救ひ給ふ助けの人といふ声も枯野の
虫の鳴音よりも心細げの口説なり。亀篠笥く嘆息し人の頭さ落ちぬべきまで。
よのこころ憂たのへ(ぬ)ぬを反れも公の道のくを且つ郁る憎むべき人の私
ゆく人を恵めへ職の欽職を立ちべ邪怪の仍ちり綜一下さぢのさぶ。
そのこころさるる且つ番伽親子を特と捕捕鎌倉へ牽べる且つども可愛や
親の偏僻すく言一言もけさせ給信乃ハ現在こころが任る且つ憎しと思へど
番伽ハ莫延む身なり。そ然一朝よ罪のへ(ぬ)快愉とさるとそれへ入るめこそのの
あらどいと痛しく悲しくく怒る夫の決の携且法々勧解さけの一寸の追捕

の沙汰をとぶめさるとそれろ且つのしくその罪咎賞ぢへ脱且つ(ぬ)いぐ救人方も
ぐるとへ人ちらぬ曽を苦しめいと浅ちる陶女子の智恵まへ及ぬる所かへまく。
念じく僅の便り所なる。番伽が秘蔵せる村雨といふ一刀ハ持氏朝臣のもの佩刀
まで。春王君(滝せる)源家数代の重宝なる且つ管領家もよく知食るまへ(ぬ)と
思召よりの豫くその仕のえ有且つ今彼宝刀を鞘食献且件の罪科咎勧解きぶ。
そうるこのうへ且つ恐るく番伽親子も赦さ且つ。そ且つる事ぐ我を折て暮六どのの
と所身ぢへ雑ら又この願ふ所鎌倉へ上べ所。かくぐるへ(ぬ)ぬが滅をるのほ
僻心よ疑ひく自滅をちぶせんまべ(ぬ)。そるるも兄期ちへ(ぬ)。ちまるのの所
告んとくかくへ竊よ根所と真しちへ流示ぢへ糠助魂るまへ(ぬ)かへまく。ちるぐ
太所息を吹所言るけのるまるひぬ飲食まへ他人集且憂苦まへ親族聚へ世
常言ハ且あるる年まへ庇を摺せるへ人ぐ嫌るぐへ件人ちぢの危

窟を救人君を救ふも牙を咬む糠助かくこゝ人ハ舌の根のあゝん限り富貴那と
ぶんが辨をのゝく犬塚ぬのゝうゑ和げ。繰よくそのゝひとゝ見まハ第
一番ハ僕を救させ文善ハ忍げといふとあるもちや退らんと立あがるハ亀篠
雲時と引とゞめいふおぐるハあゝ孤ども成もるゝねもけハ一日そや長食幾よ
時紙程ゝゝ夜あけて後悔ゝるゝるといへバ頻ようち点頭其処ハ勿論女才ゐ
ゝゝ行くゝゝと庶も東ゝ隔亮を逆ひふどゝゝく遠ゝく引用んとて推外ゝ倒き
かゝる紙凡ゝゝゝ迷ゝゝゝく外面へ身を横ゝく出ゝハ亀篠吐嗟と身を起ゝく
倒ゝく隔亮を受とゞめさても亀忍の人ゝる。と嗟ゝゝゝ立著ゝハ次の間よ
竊聞せる。蕓ハ板戸を開ゝく。夫婦目と目を注ゝ。茫然と矣て亀篠欽
ゝゝ使ハとよく作ゝゝゝゝゝまして首尾よゝとゝゝ声ゝ目や見ゝけ蓋子
のゝゝゝ茶ゝ挽ゝけく無風ゝ顔義ゝ又挽ゝゝ臼の音ゝ驚ゝくゝ

夫婦ハ夕立雨の雷ゝ。旅人ゝゝ心地ゝく。密語ゝゝゝゝ共ゝ納戸のゝゝ隠れ
ゝゝゝ。ゝゝゝ揉助ハ踏む足更ゝ地ゝゝゝ備たきゝゝゝゝ犬塚ゝ宿所ゝ起き
件の繰のゝゝゝゝ亀篠ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ告童の智恵ゝ繼ゝ
ゝゝゝく死ゝゝゝ文死惹出せゝ。僕紙大人氣ゝゝく吐ゝゝゝ勸解もせゝ只勸解
ゝゝゝく免さゝゝゝゝゝゝ御教書の破損ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ彼鄙絡ゝ地獄ゝゝ
ゝゝ人ゝゝゝゝゝ寔ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

和殿その一通氏綱くかくいうてや。と問ふ。糠助既に擬ひたいるおん身ぬを
考へ見しー如く。吾倩八固より主を筆ふり。御教書とて仕のつるぐといへば番兆冷
笑ひさまたげとよ人の公ふさるくまく。測ふくたのぞ。笑の中ぬ刃を隠ふ。
今戦国の習俗ん親族えとく心放さず。臍を噬の悔あるん年来八鱧言歟
のおのひ氏考つる妻妻夫が猛ふ弟をいと惜ふ侄を愛ふ八さふ為ふこ。
又その事実ふく。村雨の刀を出ー罪氏贖人と謀るとも赦さまじ。孟の
所約ん大刀ぶふ出さふ差ふー氏仆人が定めーそも管領家の汾汰ふぞ八。
下より上を計るん。かふぶそれも遇ふ。ふ果ーく謀る如く。ふるさるも
あぶ鎌倉へ牽ふく後ふ大刀を進ふるとも遅ふまあぶ和殿のうへハ
いふたふ心ふーくぶくども女ーく子ぬふ駿胥ふく不覚とふぶ武士の
瑕疵ふりその後ふん後ふ。とふふ。ふく糠助勝ふち敵ふいふ。ふを

偏僻ふり。疑ふくけふ氏過ぶ。後悔其ぬふ立ぶ。親子とのべ三人が命ふ
一口の大刀を出ーて救ふくあふふ。半晌ふ。縲縛の恥ふ事
子を泣ー。彼此人ふ指氏ぶふ。辛ーて助ふふ。可惜武士ふ疵ぶ著。ふひふ
ー氏ん應とのん一声を発ふぶ宿所へ還ふ。ぶ堂合ーく拝むん。ふぶ
とふ氏口説繰果ぶふとあぶふ。番他ふとくあふ。子一人ふふ。
ふ創ふせふくとも。人の異見を何ぶきぶ。かふふも暁ふ和殿ふ周章ふ今
光ふふ由ふふ氏ふく考ふ。返答せん。日ふふく再び来ふん。ふふ糠助外ふん
ふ。背門の柳ふ緯日ふ落ふ氏ふ今ふや暮ふふ猶ふ夜食過ーふ又来ふん。
織ふん人ふ人を謀ふく。弟を殺ふふ。ふふ。あふふふ人を疑ふて。糠助ふ又ふ
殺ーふふふ且恨ふん。ふ氏膝氏立て安ふ安ふ。ふを起ふ足の痿痺を捺ふん。ふ歩
峯ふふ沓履ふ。人の草履を穿ふ足穿ふ氏。ふ足ハ穿ふ洗走馬憂ふ重荷ふ。ふ凍解ふ。

珍敵曳くかへり去。三月の天も冴ゆる。秩父おろしの夕風ふ衣ぬ冴ん。と親を思ふ。
信乃は一室ふ習の机を安く片つけ。花田色ある太織の臀中羽織背ゝ負ひ推
ゆるゆる父が肩ふ掛出居のくふ掛て置行燈ふたや点を灯の八隅隈なく照
さゆとも庭よ月明き夕月夜まど息絶ぬ与四郎が面つなげふさ〻覗き両
戸一枚繰ゆけく父がほとゝふ火桶をよせ。風がかゝるく猛ふ寒〻。日が長〻ゆ
ゆ〻過せ〻夜食の雑炊ヨヌくもよゆるゆ。拘ゆうゆりゆはどゆ。と問ゆ番仕
ゆ〻掉。刀を動ゆゆゆをるゆ。ゆ三ゆびのゆふ何ゆ食べゆ。宵越の雑炊ハせん
ゆゆのゆゆ餘ゆをあゆ復ゆゆゆ。冷ゆゆゆゆ温めよといひて火桶引よせて
ゆゆ埋火を掻起せゆいふあまりとゆゆゆゆゆゆゆ。拘食べくゆ
ゆゆゆゆゆゆゆゆ犬を枕んとゆくゆる難義ふ及ぶゆ。皆是ゆ不孝ゆ
ゆ全ゆきとゆゆゆ。今難助がゆひゆるゆゆゆゆゆゆゆゆ

掠略んぬるのち。いと浅からぬ所行なるべしや。抑この二十年年来渠さまくよ
ろづつ。盗尽しつ。村雨のちん佩刀を。奪ひとりんと志るゝ。幾遍とのゝ成志れども。或ハ
人をかゝふひて。利ゝ誘つ。價貴く。彼一刀を買んといひて。或ハ更闌人定まりて。
牆外踰鎖ゝ窺ひ盗ゝんとせ。夜もあり。渠百計を施せども。又百乃
備あり。この故ゝその悪念。今ハ至て果をゝ知ずいと朽をしく思ひ。
心侍ゝけんたゝまゝ渠ゝ犬ゝ傷けて。その臓腑を遣をのゝ。こゝゝ悪念
復起り。師教書破却ゝ假托て。宝刀をとりんと奸計ハ鏡ゝ写しゝ照るゝ。
抑年来墓六が望を宝刀ゝ被るゝ。ゝ志てその志ろ成猜ゝ。渠ゝ父の遺
跡と稱しゝ。荘官ゝ志ゝ。相傳の家譜舊録ゝ。ゝ志ゝ一件の大
刀をゝ。家督を弟ゝ。継ぎ。ゝんん。と。一ッ成氏朝臣没落のち。その地を
既ゝ鎌倉ゝ。両管領の處分ゝ。渠ハ則管領の歌方家臣の遺跡ゝ

志ゝ。舊功舊恩ゝ。ゝのゝ。新ゝ微忠を顯ゝ。ゝ荘園永く保ちゝ。
渠ゝ。ゝ。ゝ。村雨の一刀を鎌倉へ進上し。公私の鬼胎を殺除て。
心ゝ安くせんゝ。既ゝ妨ゝ。その荘園を弟ハ。ゝ。一口の大刀を
惜んゝ。ハ。ゝ件の宝刀ハ幼君のゝ像見亡父の遺命重ゝ。この為と
共ゝ滅ぶ。妨夫ゝ贈ゝ。又その初村雨ゝ成氏朝臣へ進ゝ。ハ
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。春王安王永寿丸。ゝ持氏のゝ子ゝ。ゝ父ハ
春王安王両公達の傳ゝ。この両公達ゝ。ゝ宝刀を君父の像見ゝ。
ゝ菩提を吊ゝ。ゝ親の遺訓を美ゝ。永寿王へ進ゝ。ゝ。
ゝハゝ。ゝ。ゝ。

番作遺訓
を授
犬塚番作
帶雨
南南楚
知春北
入無

釣り大竹の筒を目うけて一と打ハ釣索弗と打断て筒ハそぶまく礙と落西殿ハ割れてあらわれ出ハ是村雨の宝刀ハ番他ハ遠く錦の嚢の紐解うけて恭く額を推あて要時会ずく抜放せば信乃ハ間近く居るのほうく鍔根より刀尖まで瞬もせぬうち熟視る煌々る七星の文照耀て三尺の氷寒く露結び霜凝て半輪の月うと疑ひ邪を退け妖を治めて千載の宝と稱す唐山の太阿龍泉我邦の抜丸蒔鳩小烏鬼丸などいへども是まハ如何とも見えず且一番他ハ刀をかをて難を消め信乃ハこの宝刀の奇特をたのみ殺氣冷て抜放せば刀尖より露霜生て鱠を欲刀ハ鮮血その水まきく濆ぎて巻ハ隨ひ散落る壁言ハ彼村雨の樹枝狂風の拂ハが如くあまく村雨と名つけら侶これを所ふ所せんなそのざまをみてハ相応ふ所と髻を短く今より是まで大塚信乃戌孝と名告まじかりしハ二八の春をまちて。

こと是宿病ハ苦ゆうと。なかく存命ふるとも五十ハ翌死んより一や雪妻時ハ死ぬべくとも今茲の寒暑ハ必のとり只恨む汝僅ハ十一歳孤と成ふ一せんなそのざまをみてハ相応ふ所と髻を短く今より是まで大塚信乃戌孝と名告まじかりしハ二八の春をまちて。

ふ人工死といひつけく又嘆息を親の顔死うち瞻ふ。こハ何ぞ宣ハ女ん。縦ヨメ病ハ十ハ五十ハ満ぬうちぞ死ぬべ死ぬ死ぬよ。ハ年五十ハ満ぬうちぞ死ぬべ死ぬ死ぬよ。

翔ふ。よく〳〵ぬ祥を急せ給ふ御教書の支実ふく。捕ふ。ふ捕兵を引ふけく吾倚を救ひ給ふ人とハ。ハ底意ハ知ふとや勿体ふ。と

いハせと果ど。呵ことうち笑ひ御教書の事詐欺ふ。ハ捕ふ外ハ。

ふ。ふ。ふ。姑の詐欺ハ。ハ糠助ハ汝が事を懇切ふ。ハ末さ一ふを辛

ハ。ハ。死期遠ふぬ親が痩腹今面ふ切ふ汝を妨ふ托んだとハ。ハ

いよく呆ふ果ハ。ハ言葉ハ。ハ。ハ。

父へうち点改その疑ひハ理ア〻ンとなるぞ則ち遠渠村両の大刀も奪れば今ア〻
ア〻て〻ら　ア〻ン借ア〻く汝を人と成さんのこゝろかくても存命ア〻ル親ゞ自殺ハ子と
ヒヤ　ア〻く　ア〻ケ肥き苦肉の一計ア〻りとア〻ぞや。ア〻ゞ妻夫婦ハ利ゆ耽ア〻恩義をア〻ぬ性ア〻ア〻
ゞも。今番他ゞ自殺ア〻ゞ里人ハア〻長ア〻憎ア〻く。集合ア〻その非ア〻弥ア〻
ア〻りやあア〻んと阻むゞ。ア〻ア〻んまハ真實ゆ汝を家ゆ養とア〻実意と示して
里人ホゞ情ア〻解ア〻ゞ。又この宝刀ハ妻夫婦ゞ嫌ア〻ア〻ア〻素ア〻ア〻親の
送命ア〻人と成る後許我へ系ア〻く。督殿ゆ献らゆ。このア〻ア〻ア〻ア〻
固く阻ア〻く常住坐臥ゆその盗難を禦げゞ宝刀全く墓六ゞゆ入るゆあるゞ
とゝゞも亦その家ゆあるとア〻ハ奪ア〻ゆ易〻と心放〻く。緯急ゆハ逼るべ〻ず。
ア〻ア〻防ぐハ汝ゞ智ゆあア〻熟ゆ宝刀を隠さゞ奪んとする心弛ゞ防ぐとゝゞ
竟ゆ畧ア〻ん便ア〻黄叔度ゞ琴を鼓〻く群賊を退け〻とゝゞ群ゆ囲ゞ墓

兵成るゆ堪ざ〻く敵ゞ疑ひ危けゆ〻ゞ選〻く安く九死を出く一生を得ん〻
ゆ大智の徳ア〻ゆ機ゆ臨ゞ変ゆ應ゞ防ぐゞ禦ざ〻ゞ人念〻く〻れ紙ア〻
べ〻ゞ又ア〻ゞ妻夫婦漸ゆ志ア〻改め〻く實ゆ汝を憐ゞ汝も亦誠心ゆて仕て養
育く恩義ゆ報へよ又その害心已ゞ〻て遂ゆ禦ゞゆ術ア〻ハ宝刀を抱ア〻く速く
去ア〻五年七年養ア〻ゞ〻ゞ汝ハ大塚氏の嫡孫ア〻ア〻墓六ゞ職禄ハ汝ゞ祖父乃
賜ゆあア〻ア〻その禄ア〻く人とア〻ゞ伯母夫の恩ゆハあ〻ゞ縦報ゞく去れゞ
ゞく〻ア〻ア〻不義とハゞ〻ゞ〻ゞ〻ア〻ア〻の理義ゆあり〻ゞ呼かくのゞ長く
あ〻ぬ餘命を貪ア〻この期を過〻く後竟ゆ病の床ゆ息絶ア〻ゞ伯母も汝を養
ア〻ゞ宝刀も人のゆゆ落く。縁ア〻ア〻ア〻画餅とア〻ア〻この人佩刀ハ君父の像
見首陽ゆ薇を採ゞとゝゞ。二君ゆ仕ぬ番他ゞ。最期ゆとア〻ア〻借なア〻て。
奇特ア〻ア〻ん。と村雨の宝刀を再びとア〻あげく。援放さんとする彩ゆ信乃ハ勝く

拳を推乃至張こまぐ謀せるを豫こ先期のあん自害へ飽まぐ吾倚を思召とあん
いひ
惡こをこ死まへ為こぐ禁めなほまへいひるどよりや難治の病著るりたものが公の
及ん程良薬良医ゐるを死竭させこ者とる冊れなる遂こ届ぬめるべうちち
數死こも為べ〜。こまへ正〜こ定めこるるとこるれゐ腹切るぐ人ゐ狂死と
やうるこまま〜今宵ゐ限るとこんといろせも果ど声を激〜虚けれこ死のるる
死まぐ死時ゐ死ざまぐ死まこるゐもまゐ恥をるる乃嘉吉のむ〜結城まこ為死
ざまま〜ゐ君父の為蹇とる思とり。筑摩ゐ三年の僑居母の今果ゐあいざり
〜ゐ生ゐ甲斐るれ恨こるり。そまよめまこ北年あまり。なこるゐもるゐ〜偷
食の民とるるこる露命死食乃今又子孫のゐ人死思ひぐ〜いろまぐ〜存命べ死。
千曳の石ハ轉もここ乃ぶ心ハ轉まべうまど禁るゐ不孝こ今ゐもあまま〜棟助が為る
とあゐハ妨せん。其外退まぐや。と敦圍こ。左ゐを伸〜こ撫久せば。髻断離ま髻こ文

蓄まこ。轉輾つ推乃こ。右の拳死些も放さまど。あん叱乃死蒙こ。このゐの文
四七こゐゐ恃まて禁め為こ。ゐる。させゐ人と流著刀をとゐんと端逼まどゐ小
脇ゐ及ぬ必死の勢ひ放せこ。と怒の高声子ハるる度寅縁こ一生懸命果〜こ乃
まび番作ハこゐ子を楚と推伏こ。背ゐ尻をうちかこ為病衰てゐ男士の働き。
とハ何とせん哀〜やと信乃ハ岡てい〜遍こ及かへさんとつまとゐ思ゐの壓こ愛
著の枷も鉄輪も推居ゐまこ。又せんまんへるるまけり。その隙ゐ番他ハ襟こき
こゐるこ袿衣推祖死こ刃を引抜死右の秋死卷そそんこ。氷ゐるを刀尖を。
腹へ〜ぐと突まこ。まこゐ静ゐ引遠せば。ざと潰る鮮血の下ゐ布こるゐの子ハ
血の涙親ハ刃をとり直〜。さまぐゐ弱る右のゐゐ左の拳のちそそんこ。吭のあこりを
刺んこ。突外〜つ。ゐう。ゐ咽喉を劈き俯ゐ仆る親ハ身を起まと。信乃も
半身韓紅そゐまこ父の亡骸ゐ抱死著つゐと泣。その形勢ゐ秋寒死風ゐ

たちまちに鳥のみち。更ゐ枯木ゐ寄るが如し。造丸ゐ糠助ハ番作ゐ回答ゆえとて。
暮くゑ又来ゐ庭門ゑ近つく隨ゑ信乃ゐ泣声。縛ゆえ為ゑ。と抜足しゑ且外
面ゑ窺ハ。ゆえひ見ゆえあるゐ自殺ゑ驚ゆえ。ゆえて。古式巻き毛骨
いよ立歯根も合ず。戦生しく留らぬ膝式押さく裡面へハ入ゐ立えん
と思ハ。生平ゐハ。ゐく足重く。誰ハ留給ゐ腰を引きえ。ぬく心地
ゆえ。辛しく庭門のゐるゑ出て息式つえ先ゆ縛の越式長ゑ告人と裾
端折て飛ゐ去ゑ。信乃ハ涙の曝布の糸。ゆ数人ゐ。ゆえとも。ゆえ。
ゆく。哽ゑ。ゆえつ哭ゆえしゐ。ゆえて。ゆえ。ゆえゐ。ゆえ。ゆえ心。ゆえ直しく。
ゆえゆゐ式撫ゆ。ゆえゆ羊の今四ッ五ッゐ。ゆえ刃の下ゐ折敷て親
ゆえ。ゆえしゐ。ゆえ。ゆえ。ゆえ

阿弥四郎ハまゞ死ざるをけり。彼犬を護ゝるをまれ彼犬おそれふ父母喪ふそのもづめ成供繞成思へべ愛きべく又憎むべ。然ともこの畜生を捨おんゝ不便るのをよふ生ゝるそのの鎗痍通宵苦痛を甘んじよ速ゝ死を促もるかゝる宝刀を穢ゝるべいとも恐れるべきの鮮血ゝ染ぶる刀の奇特亦是雖ゞ為ふ惜人のでや苦痛を助けそるさせん竹ゝやいふと問ゝけゝ。大刀を引提ゝ縁頰よをを内をと下りゝふを場る刀ふおそをを與四郎ハ中前足を突立て項成伸ゝゝ成切をといぬだるをの健氣さふ大刀振あげ拳をゝるをゝるをゝ年も紀ゝるまゝ年未親の養さてのゝ馴も押著ー現身のいぬをいゝぐ砕るべを。と思ひありゝぐ躊躇ーゞさるふてこの物ゝ。雫時ハかくゝゝとても羽成ゝ為ゝゝぐ息絶ぶゝ又伯母夫のをよ死ゝをよを。如是畜生畜生畜生提心と念ゝ。内を刀の下ふ犬の頭ハ樸地と落さと潰る

鮮血の勢ひ五尺の紅絹を掛るゝ。激然とゝくその声あをを。猛然とゝく立沖る中ふ見ゝ物ゝそあをを。と左ふを伸ゝゝ受留をゝ。鮮血の勢ひ衰ゝて遂ふ再び潰ぶゞ。ーの信乃ハ留る刃の水氣を袖ふ拭ゝゝ遽ゝ納めゝ腰ふ帯。彼創口ふをを生る物成濃血拭除ゝゝつゝゝふ見ゝん一顆の白玉ゝ。その大さ豆ふ倍ゝゝ。紛融の孔さゝあをを。緒締ゝるどいふのゝるまゝハ必ふをを記總ゝゝ。思ふゝけるゝ物ふゝあをゝ。さゝゝふふ深ゝ研をゝゝゝと明ゝをけるを月の光をふさゝ翳ゝ復ゝをゝ玉の中ふ一丁の文字あり。方是孝の字ゝ。現刀ゝて鎬ゝゝふあゝを又漆ゝゝ書ゝゝあゝを。造化自然の工ふ似ゝをゝ。小膝成拍ゝ感嘆ー吁奇ゝゝゝゝゝこの白玉妙ゝををゝこの文字。ゝをゝそのよを。ふゝをどとゝゝゝ。借ふゝ合ゝををハゝ。母一子を祈ゝ。瀧の川ふをゝゝをふ。途ふこの犬をゝゝく愛ゝゝゝゝゝゝゝゝやあをゝん。ゝゝゝゝゝ又家路ふいこゞのふ。

きの
番作

起さく
乙丸六
自殺を決
きのう
て信乃與四
郎を砍る

現に神女を目撃し一顆の玉を授らるゝ所行恐く受外し玉は犬のほとりに輾ぶ所
とゝんとゝく雷の如く遂に又あるとき三この比よりとく有身あり次の年秋
のゝぐめふ吾倚を挙のひしそ母の告させのまゝ家母の長死
病著佛神に祝ひ驗ありしかの玉の失る故に年く病く遂に危窮に
至ぬ欲いとく索く件の玉を再び獲るべ母の病著順快のやと
思ふに被さとゞる人もせどこと玉と求めく出べしよりあるとは
家母へとの冬月あるとのひこれより三年のとの秋今霄家尊の自殺し
吾倚さ冥土の侶とせんとて犬の癩口より不思議に出る玉匣
二親ゆゝ喪ひつゝとゝ老期の今果に及びくゝ名を表る孝の一字の信乃が実名八
戊孝定ふに玉あるとも六日の菖蒲十日の菊ん行はゞ死とうち履
ゝ庭へ投石と投乗ゝ玉はそゞまく反くく懐へ死入ゝと怪しと

ゝと撥拂ゝとく又擲ゝば死ゝ玉ゝとび返ゝと三ゝび又及べば呆ゝ果てゝ死
又き雷時按ゝとうち点ゝこの玉寔に天あるの秋家母が病しとゝ死犬が
呑ゝとゝぶゝて十二年の今に至く齒牙堅固に毛の光澤枯せゝとの血気ゝ
豪ゝとゝ腹にこの玉あゝとゝぶゝ死ゝ是二ッゝ死世の重宝にぞあゝん
ゝとん緞階庭趙璧ゝとゝもゝぶ命ゝ惜ゝぬに宝ゝ惜ゝく死を止ま
らんや貴人の亡骸に珠を含ゝ事ゝ例ゝあゝど是も又宝を瘞く益の所為ゝ
宝刀に玉もゝぶゝ死後ゝ人とゝび取ゝ出のざゝ大人に追ゝ死ゝらん時移らぬ
と時ゝく舊の外ゝ人ゝ死ゝ父の死骸に推並び既ゝ最期の坐を占て宝刀を
三ゝびゝうち戴きゝゝ緒膚を推祖つゝと足ゝべゝぶ左の脇に大死ゝ傷痕ゝぞ
まく形狀牡丹の花に似ゝう。ゝ付磨ゝ痕に推拭に
ゝ習の墨ゝの苟ゝ塗ゝにあゝぞゝの色黒死痣ゝ出ゝゝゝ脇をうち

搗死きのふあでもけふまでも。こゝ迄ホこの疵あるとは。衢ホ人玉が死かゝるまゝ。
懐ホ入ゝ。と。左の腕へ礫と中まゝ。些痛をおぼえ。そは疵著べうを
あらぬ。國の傾人とこそ。ふらくの妖孽あゝ人の死んとさるとゝホ又
妖怪を見るとあり。と親のそゝえも。僕藉ホも豫くゝ人見ゝり。皆是
ちのが老びよ。そ。死ゝ。土ホあるの疵を黒子も厭んや。と勇氣挽ぬ
稀世の神童智恵も言語も古人ホ愧ぢ。甘羅孔融幼悟の才今又ホ
この子あゝ。自殺の覚期ぞいとそゝ。春の夜ゝ短くて。ものや初夜告る
寺々の撞も平常の音もなり。信乃ハ額の乱髪ホ。揚て宝刀をゆ把ゝ
嗚乎ゝ。ゝ後ゝホけゝ。考妣尊灵一蓮托生南無阿弥陀佛と唱へ。
刃を晃ゝと引抜て。腹ホ切ん。とする。ゝ忽地庭の樹蔭より。女ゝ信乃
等。ゝ人。といとも。せゝく。ゆびけく。男女三人ゝ。ゝ死が似ホ爆類

ゝ。齊一支ゝ入ホけゝ。

第二十回

一雙乃玉児義を結ぶ
三尺の童子志を演

信乃ハ庭ホ入ゝ。ゝ禁るその声を。ゝ。と。ゝ些を擬ぜ。てや
刺。そん。と刃を挙るホ筋縮ゝ脱離麻ゝ。ゝ死を速ホ。ゝ。ゝ
朽を。とく遍ゝ死ん。とする不ゝホ真先ゝ進むゝ是則別人のゝ
嚮ホもゝる擁助ゝ。吐嗟とゝゝ。驚ぐゝ。白刃ホやゝそゝ。
後のゝ人立遶ゝ。矢庭ホ信乃を抱禁ゝ。前ゝゝ蟇六亀篠左右ゝ
腕を攬ゝ。聊も動せ。ど且この刃を放てよ。とゝ人。ども信乃ハホを緩ゝ。ん
面ハ紙ゝ。ど。ホ。名告もあハ。ゝ伯母君ハ夫婦何とゝ。ゝ来ゝ。ゝ。とゝハ
ゝく亀篠酸鼻ゝつゝ。ゝ親ホ似ゝく。ゝ。ゝ。ゝ

ゐ且どもさらーげんみぶうりよく舞へ見。こゝに八毛素よりて女子の身どもーく身が呼帯を奪ひゐあまぢ父母者も討死せ。と風の便りゐ聞えーとゐ。切て出親の蹟を立んとゐふ。ちゐて八墓六どの父墓ゐ拒て幸又在園をゐうりて村長さんゐなりて登ーー。夫又科ゐるれぞとよ。今俗ゐ分八存命と。故郷よかゝとど。足蹠こう。職ゐ堪ざる身を見えくぐ。吾倚夫婦をいといこう。憎ミく我絶せーゐゐ。ものゞ色の僻ゐてそ強顔れ先方と多人ども。腐爛てを指ハきゝ見ぎど。世度御教書破却の越度いくぐ親子を救人と。少父盡を甲斐ゐるく。番外ハたや自殺ーく。そゐるゐも共ゐ。と衝前ーハ雑てゐゐ似げゐれ短慮死ゐゐ及ばぢど。この末を且貸てよと練ぢび墓六験をゐびされ番伴が生前ゐ。こぶ本来の赤心れちゐせざれ。ハ残念ゐ切くその子を養ひとりまく。女児濱路と妻せゐ。先祖の血絡断絶せど。世ゐゐ人ゐを憎ーゐゐ身ハ後ゐとゐまゐん。

加父且信乃よく貸けゐ御教書の真大ゐゐゐ。越度ゐとゐいひゐゐ。原畜生の所為ゐ。ゐ犬ハさゐゐそのゐゐる。番伴が命父隈ぢび一切後難あるべゐど。縦その子どもらゐ。ゐ谷あゐとゐゐ。ゐゐ亦ーゐゐくゐとれゐん嚮ゐ糠助が夫ゐまく。如此こと告ーゐ。固よゐ義絶の親族ゐりとゐ。自殺の変を貸ゐゐ。ゐ隠雙敵のゐひ父せんや。と言く見ゐびてそゐゐど色汝が必死と禁めゐゐ且ゐゐ刀をゐゐめよ。と言葉を竭せび糠助ゐ共伯ゐ練めゐ。信乃ハつゐくゐち貸くゐ。ゐゐ似ど伯母夫婦がよゐ憑ーれ慈愛教訓宝刀のゐゐ。一言ゐ。ゐゐざゐとゐゐ憎ーゐ。皆是ゐゐ且父父欺くゐゐゐ。寞ゐゐの親ゐゐ人を。ゐゐ父ゐ聖の如く来然を察ーゐひゐゐ。父が遺訓ハ二且てけ且。ゐ且ハ自殺戒ゐひとゐゐ且耳く伯母ゐ養ゐく。人とゐゐゐん。と尋思ーゐ。ゐゐかくゐゐち点頭ゐひ。かけゐれ方ざゐゐ。ゐん慈ゐ父蒙ゐて理り逼く禁めゐゐ。死後ゐくゐゐ鎌倉

制度ハ及ばず。大刀を出さぬ及ばざる命ハ後ひなく人とのべ墓六眉根を
よせ宝刀のつるぬき走りたるそれをハせんるの生賢ありて亀篠が忘れとるハ
せんとてそのひつるハ親よりも壌受くる物ハ和殿が隨意せざるうんや知らぬ解て
親族がよりも心まるく相撲べ。孤疑ハ散〻くるのよりふらち任せざるやと真
実こちらに二方より練るハ信乃ハいよ〻ますます晩れまく。ますますその身ハ放ち
ぬ使ふたてゆとのハ食欲びく。そが隨些退けハ。信乃ハ刃を難ハ納て懸ら
直せどおちつるぬ身の久後ハ多ひ難く。黙然ちく居さるける當下墓六亀
篠ハ棘助を宿所ハ走らせ。小斬一両人喚とるく。葬の事を指揮。その夜
番僧が亡骸をとり飲めり。墓六ハ宿所ハかへり。亀篠棘助ハさてまるく。
相ハ通夜しく信乃を慰め。次の日ますます人を菩提所へ送る行ハ里人ハ上を死悼
ハ世ちくの。面目ますます人こまのひろ。さても墓六亀篠ハ番兵が自殺を
ハ禁めり。その家ハ起ハ信乃が自殺を禁めり隊く番ハが謀ハ
遺つを。御教書の走ハ詐欺ますハ犬塚親子自殺せ里人ハ憤ますと
破るるとのやせん信乃をぶる養ハ。里人ハが疑念ハ解べくハが刃ハ差
ますべ。と夫婦猛ハ商量ます。実ハ知ハてるをあらハ信乃ハ素より
その性聰察。父の遺訓よりあハせくその詐欺を猜せよハ墓六
亀篠ちぶるハ打雨の大刀のるぬハ。信乃が大刀さ出さるとのひ
つるぬちやうけく。墓六ハ宝刀とひ。ますます走らぶとハ入りそ。ますます言
舌濁ますく。顔の色さ変りる。信乃ハ
さく自殺をぶ歩ハ。ますます由。ぶ信乃ハさるる。番兵ハ智勇の十
惜る不事ハ。表を消さりる。珠玉ハさぶハ泥中ハ埋るく名の

山青堂蔵

口碑を遺すけり。間結休題。葬の夜果しぬ。亀篠は又蟲六と商量しく。
信乃を召とゝ人とゝ。迎の人を遣せり。信乃はせめて亡親の中陰果て
後ゆこそ。命を捨ひなんも且く汗とせ及とのゝ。是も亦理ぞ。されども。
黄童一人は置ゝ。糠助へその宿所いとちゝそのゝれへ朝夕ゝよきを
さゝとゞ。額義は年幾も。信乃ゆへ恭ぞ勝りせど。言葉敵ゝるゝめの
るゝ人。然ゝば二の小厮をとゝく。薪水の労をよく佐けよと分付て。信乃が
かゝゝぞ遣しける。さゝを信乃へ是ゝゆ。ゝろ本心を探ゝんとゝの間監ゆ。
とおもひしゝへ苟ゆも心を放ゝど。ゝゞゝ火を打ゆゝ吸ゝ。父母の霊牌を
つゝゝ。喪ゆ龍ゝくゝを狐ゆ早晩ゆ花ちゝく。若果ゝよを青山辺ゆ
杜鵑鳴く比ゆゝるゝぬ。信乃は日来額義が言行ゆゝゝるゝゆゝ。ゝゞ
温頃ゆゝで村落の小厮と似ゝ。主ゝる庄官の虎威を借てゝれと侮る

氣ゝゝゝく。ゝと老実ゆ仕ゝゝゝゝゝゝゝゝ深く感佩ゝゝ。是ゝゝゝゝゝゝ疑ゝゝ。
有一日額義は信乃が垢つゝ汚ゝを洗ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ人の三七日もゝや過ゝせ
ゝゝゝゆ髪は結たまゝゝゝゝゝゝ行水ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

今日中に向ふ。信乃へ只笑て答ず。額蔡は又緑ある庭の樹に指しさし。彼処
なる梅樹の下に向ふ新に土を起せしと。ものしくく些高き処あり。彼へ什
麼何ぞと問ふ。信乃答てあれこそ其許ぬを殺れし犬を埋し処よと
いふ。額蔡慨嘆するおのゝ。ちゆく。さる仇ぬもあらざるふ。そう後足人へ畜生ふ。
傷けらるゝ由を綯ることあり。吾侍も亦彼犬を打もし。刺をもさぶんうと和
君と必れさるるべし。さもあらずやと事毎ふ心あるげふ。めいひかゝるど。
信乃ハ是ふとうち笑のゝ。亦その是非をいふとなかくて信乃ハ浴し果て。
あづその衣を揮ひしうべ忽地袂の間より。一顆の白玉轉び落るを額蔡
ちゆくとと目留めて。つくくと見て。不審や。和君ハこの玉獲ぬひし。扶抑亦
家傳の物歟由来を聞ぬかりけれとのひつ。脚て返をみぞ。信乃ハ玉を
ものゝ。これ一朝ふ親を喪ひこころの憂ひ。さるくて。この玉と遠れ

たり。そもさぐの縁故あり。とぞ答て詳ふ告ぶ額蔡ところ歎ぶ。数回
歎息し。人面同じからざれども。他人ぬもよく似るものあり。人公同じからざる
ども。又知己ありといふべきなど。和君吾侍を疑ひあるや。吾聊を蔽さるる
是を見ぬとのひけく。虜ある獲身囊より。一顆の玉をとり出せば。信
乃も又紙ぬ。これを掌ふ受て見るに。ぶ玉と一点異なることなし。但
その文字同じからで。義の字鮮ふ続ぬこと。感悟し。
恭しくその玉を額蔡ふ返して。いへり。吾年少く。才足ざれハ眼あれども
ある色ゲ如く。安く足下を恕らぶして。初ハ疑ひ。日ごろ歴る隨その
言と行を紙つふ。ぶ及ざる所多し。元人ぬ人ぶとのうふ。素性を
問ふよるくて。けふまぐハ黙止さう。今ぶ日ハ相似ざる
痕をとゝつ。又この玉の等しをあり。必見宿因の致を所。一朝の縁ぬハ

先ゴ玉の由来を糺べ。この玉ハ筒様ニ。如此ゝこの事あり。と神女影向のちゞめより。與四郎犬ガ死を促して。ゆゑ〻もその創口より。玉を獲る終よ〻。猛き痣のいぐ来ー支父ガ先見送訓の趣些も蔽さゞ顕示せり。藏ハ耳を側て。坐ゐ膝の進むを。ゑゞ且嘆じ。且感じ。落涙を禁めあゝぢ且ーて貌を改め。世ゐ薄命ゑるるのゴ主のゑるゆ和君ガうゝを笑けバ又後ゑゐも。元心地せり。折吾倩ハ伊豆國北條の莊官ゴ犬川衛二則任ガ一子ゐ。乳名莊之助と呼ぶーゐ。嘗吾倩ガ生ゴーとゑゐ。家の老僕ありけるゐ。その胞衣を埋んとゝ。國の下を掘けるゐ。ゑくゑの玉を獲ゑり。ゑゝ未曾有の祥瑞ゑるゝんと人ハゑるのゐゐ。ゴ。ゴ背みあ平ーげゑる。痣あるをゐて父ハゑるゐ。ゑゝ。ゑゝひけゝその吉凶を問ゝとゑるゐ伊豆ゐゝさゐる博士ゴ。但郷の黄檗寺ゐ関帝の廟あゴ。ゑゞ父年来信じゐけれハゐゐゑゝく為ゐ久後の命運を問ゑり。念ゞ神籤を拈ゑるゐ第九十八籤を獲ゑり。その詞ゐ

経営百事費精神　南北奔馳運未新
玉兎交時當得意　恰如枯木再逢春

とあり。ゑゞ父聊文字あり。詞のゑゑゴ判ゑるゐ。起句の文吉ゑゞゴ只その結句ゐ頼あり。玉兎八月の異名ゑり。交ゑゴゑハ満月ゐゴ。十五夜をいゑゑゞ。かれバゑの子十二三才まゞ。多病ゑゞゐゐ。あゝんゴゑゝんゴゑれゞゐ年十五より。田陽本復ーて。如意延命の祥ゑゝんゴゑゝ。莊之助ゴ名ケーゴ。母の物ゑゑゐゐ。ゐゝ。莊ハ莊盛ゑゑゐゐゑゑゞ。ゑる程ゐ鎌倉の武將戍氏朝臣。京都將軍ゴあゝ中ゑゑゞ。両管領ゐ攻られて。行我へゞがゑゐ。ゐひゑゑゞ。寛正二年ゐ京都より。前將軍普廣院殿の第四男。政

知とあらせ給を右兵衛督ふ拜任せられて伊豆の北條へ下させ給ひし堀越の御所と唱て諸国の賞罰を掌せる政知朝臣武威ふ募て民を憐むの心薄く驕奢を極めゆふ狂ふ不時の徭役いと多うつゞく父荘官なるをめく舊例を援て苛政を練めゑべく宥免をこひ〻ゝ絶者の為ふ弾れて御所のあゝ怒り酷〻く絲せうべ〻と宣へ〻ゝ父ハよもゝくうち熟きて一通の書を送〻つ母ものもゝさで自殺せり時ふ寛正六年秋九月十日吾倩ハ僅ふ七歳なり荘園家財ハ没官せられ後類奴婢ハ東西ふ離散〻て身ふ隨ふのもるゝ。さも豪家といはれしる犬川の水畑果て妻子を追放せられ〻ゝ母ハ泣〻て吾倩がもと掖て昇首の由縁彼首の相織と彼此ふ身を置るてゝいとゞ悲〻ゝその秋を客宿ふ送り〻霜降るゝもるるべるるふ粤ふ安房の國司里見の家臣蛋崎十郎輝武といへるハ原ハ彼処の豪民なり母の後妻でありしゝ。彼蛋崎を心あてふ母ハ吾倩を扶掖き吾倩ハ母を慰め〻辛〻て鎌倉ふ赴ゝ安房へ便船を求ふけれども今戦國の最中なれば海陸の通路さえゝく彼処より船を出さゞ下総なる行徳の港口ふハ上総へ渡る船あり。と人ゞ海てゆハ又行徳をこそ。稍ゝ狭まで来る程ふ路費を賊ふ掠とられて宿借るべうもあぐれハ已ゝ得ゞ村長の宿所ふ赴ゝ。三〻のよを告てその夜の宿をこゝとゝ乞ゝ長夫婦ゝの残るゝ彼待客舎もひ付ゞ小厮ふさゝ叱懲ゝてうけ引べうもあぐれハ切〻一夜を柴小屋の裡ふるりとも明さゞ見とかゝ口説くふも許されゞ小厮〻て追出さゞ門さゝ扶て見〻ゝゞ日ハ暮て雪ハ〻〻来ぬ。進退其処ふ究まゝく。親ハ音ふるく夜の鶴子ハ又擔の寒蓑

七歳の小
児客路に
母を喪ふ

犬川荘二郎妻

荘之助

時ふ迷ふ行路の艱難強顔き人の門ぐるゝ。門呼入をとめやとあぐつゝ
ゑのくも立在び雪ハまとくと安こゝ。雪吹ふ五體を吹きこれ。風ふとゝ
破笠の骨まで冰る冬の夜ふ母ハ固より持病ふ積あり。秋より後の患苦
心労。客宿と共ふつゞりく。病著ふとり逼られいとも危くえ〳〵ず。
勦り騒げど七才児が何せんをゞも去ら雪ふ。先ゞ親ハ果敢なく滅て
よふゝるえ人の員ふ入ぬ。ハ十一月廿九日のゝるゝ。空〳〵ゑ骸ふとり著て跣
天つ天を明せば長ハその為体をそゞめく。ゝりてゝち咲ゑ吾倩を裡面へ
呼び入ぬて。本貫を問ぬ〳〵ゑ。医ど告るふゝちも騒ゝどゝ。ゞ母の
亡骸を葬るが如く埋させ。その日吾倩と呂半。汝ハ母を旅ふ喪ひゝる
べゑ家もゝく。又ゆくべき里もあゞ。安房の里見ハ成氏方ふて。當所ハ
管領家の米地ゝり。かれば安房へハ渡〳〵がゝ。汝が母路費を喪ひゝぶ

門ふく死ゑれハ。葬の事何ゑれとゝく。諸雑費駿の没残ゝり。汝今ゝりゝふ
仕へて。勉くこれを報ぶハ。久後とてもよゑゝるゝ。あゞ。さられ年ゝる月幼稚〳〵三四年ハ
食損之物の用ふハ立かゝゝゝ。ゝれば年限も定めゝ〳〵。夏ハ貲布の帷子一ツ。
冬ハ小妻の布子一ツとゝをべ。それを過分の給料とゝひとゝ。一生涯奉公
せよ。給銀とゝせぬそのかえふハ。養殺〳〵ふ〳〵ゝ。時ハ恨〳〵く。
朽をゝえゝ限りゝれど。鑿ぬ舟の楫を絶よゝるゝ。ゝふハいゝるともいゝれど。
これより長が小厮ふせゝれて。五年あゝりを送りふゑゝれども志農業貨
殖を願ふとゝる。今戦國の時ふ生れて。身を立家を興さゞどハよふ男子ゝる
甲斐もゝる〳〵。ともかくゝて武士ふゝるゝん。と思ひ決〳〵ハ十才の春ゝり。素より長ハ
孤疑ゝく。物始をゝる人ゝるゝ。コゝ本心を顕さゞど。善悪ゝ就て主命ゝ違ハ
ゝゝく愚直を示せべいとで苛どく使ゝ。奉公の足ゝ業夜ハ深ゝるまゞゝ習〳〵

盈ハ秣を外庭ゐ人目とをのびくつ。石を拳。木を折てひとり擊剣養法と試こ。教るゐ志をとゐうかゐ。大刀をぢを曉得ゐ。固よりあゐ志を傷葷ゐ尚ゐ世ゐ人ゐ朝ゐて愚蠢といふ。彼ホハ小弟一鄉輿ゐ謀ゐ是ゐ。夢ゐぞゐ君ゐ俊才その孝行ゐ文ゆゐ。見ゐ世ゐ墓ーく。ゐゐの人と交ゐ。億萬人ゐ値偶せんより。選ーかんとゐ。長ゐ美絶の親族ゐ。その人の子でゐゐとれハ間ちく住ゐ物もいつゐ。おもあゐいゐでゐ志をゐ世ん。とゐひーハゐゐけんのゐゐ。ゐゐゐ大人の自殺ゐよりゐ。忽地ゐ路ひゐけ。賸和君の間人ゐゐ。吾倘ゐ。ゐゐけとゐ主命ハゐゐ為ゐ千金ゐ。ゐを賜ゐ。之天の祐と竊ゐ教ゐ。ゐゐ。ゐゐ来てゐれハ和君ハゐく疑ひて自ゐゐ。ゐ繋れども。ゐゐ解ゐハ。吾倘ゐ。ゐゐ意を猜ーて。ゐ忽ゐ宿志を告ゐゐ。ゐゐ且ゐ時節を俟ゐ。ゐゐ良縁竟ゐ空ゐゐ。ゐゐ異ゐ

肝膽の痣。又一雙の白玉ゐ。媒妙とゐ。ゐ。肝膽と吐ゐを得ゐ。方是病崔花を咬ゐて。飛騰の翅を搏ゐて。轍魚兩ゐ受て。逢遇の吻を潤ゐ。仰ゐ。一生の歡會。何ゐとれゐ過ん。望ゐてゐと綽綽ゐ物ゐて志を示ゐゐん信乃ハその薄命をゐゐ。ゐゐ毎ゐ嘆賞ー驚ゐ。ゐゐ和殿の大志ゐゐ及ゐ所ゐゐ。ゐゐ。ゐ。ゐ。

枯木の春よあらぬあらぬどや。後栄共よ為べきのこ。神ハ人の求るぶ為ぶ鑒納を垂ぬふ関帝の神慮いとかしこ。又もじめの二句のところへ考る大人自裁して和殿毋ヱ南北よ奔走し。命運且く吉ならざるを示ーぬり。されべ経営百事費精神。南北奔馳運未新とゝり。豈亦奇ならずとや。と説示せば。額義詞の意を感悟して。信乃が才学の大ならざるを稱賛し。且蓋く額を指吾倆ハ僅ふ俗字を綴ド得るのこ文と学ぶの餘力る。和君の解せるふよあらぬハかくもぶ神慮の灼然るるとゝ知くるよあらん。願ふハ今より和君を師とせ。竊ふ学問を奬んふ教ぬくうとゝふ信乃ぬく頭を掉吾倆ハ僅ふ十一歳襁褓の中より学ぶとゝふとも。何度とゝるふ見ふ人幸ふ父の送書あり。和殿ぬ。学んとゝろうべ。賦ぶ。顧ふふ人ハ善悪を友とと。善ふ善友あり。悪ふ悪友あり。揮て

同きとゝハ四海こゝ兄弟あり。吾倆ハ孤とゝろつ。和殿も又同胞ぶ。今より我を結ぶ兄弟とゝろんと願ふのこ和殿のこゝろいふぞと問きて額義大ふ歎ぶ。固より願ふ所ぬり。よゝ楽を共ふせどとも憂を與ふせざるとゝ。艱難死をぬく相救んぬ。耶もこの盟ふ背ふ天雷立地ふこられを誓ぬこゝふ恭ーく上天ふ告急。如律令。と天ふ向ひく誓ひこゝ信乃も又大ふ歎ぶ。ぬろ共ふ誓ひつ水とぬく酒ふ擬へ。汲ぬくその約を固ー。さてその年の春ふを問ふ額義ハ長禄三年（代明自殺の翌年ぬり）十二月朔日ふ生れて十二才ぬ。信乃ハ七月朔ぬ則額義を兄と。信乃ハ再拜ぬくみづぬ身と攝ーつ。共ふ歎ぶを竭ーぬり。さられ額義ハ上坐ふとぬど。信乃又頻ふすむれ。額義頭をうち掉ぬ年の多ふとゝれかくまれ。そのオとゝそバぬ弟とそぬど兄ぬれ莫逆をぬく兄弟ぬう長少の座ハ定むべぬど。嚮ふ告たるごぬど。乳

名ハ莊之助入いまゞ實名をつけられぎ。おりふしあん男ハ孝をもて一郷ふやゝえ
ゆゑ。且その実名ハ成孝るべきやと問ふ由てる彼白玉ゑ孝の字あるも寔ふ
幸入又こゝ玉るハ義の字あり。父ハ犬川衛二則任といひ。よりてつゝぶ乳名莊
之助の之の字を省き。犬川莊助義任と名告るべ。ちゝとゞもとまゝのはと
人ふ告べ元とあるあゞ只ゝまとあん男とのゝ欲さる所業ふ仗て名を汚さゞ
とゆゆいつふと問さゝ信乃ハうち点頭名ハ主人ふ後よりのゝ義任ゝ元ゝ人
めゞゝアえるゆ額義とゆゞを廿入ゆ是ゝといへ莞尓とうち笑てそハ勿論の
るゝ。あん男とゝれと月をかさねゝ起ゞ共つふせゝ陽ゝ親しくさゞゝゞ
長夫婦ふ對ひてハゝれをゝくあん男ハ吾倩を嘲ゝ是かゝの
如くもゝとゝれハ嫌疑とその間ゝ置ゞ迭ゝ後ゝとかりるゝゝれ既ゝ他の
とあり。その故ハ箇様ゝ。と難助ゞ亀篠ゝ嫌されてかゝゝとゝれ蟇六ゞらひつる

るゝその為体を詳ふ告。そのとゝれ吾倩ハ甚子の間ふ陽睦しゝく縛ゝるゝ。
寔ふあん男の先考ハ人をゝるの先見卓しゝ行状國士ゝ雙といはゞ。てむ
べゝゝ。といひあへゞ頗ふ嗟嘆ゝゝ信乃も共ふ嘆息し。吾倩ゝ父の
迭命ふゝゝゞ宝刀を護ゝ。腹ゝゝゝ伯母の家ゝ同居せゞあん男ゞ
資ふよゝゞゝゝ宝刀を奪ゝゞゝと難し示さゝ縛の類。そのゝゝゝを
ゝゝゝと恭しゝく諾ひしゝゝ額義且く沈吟しゝゝゝハゝとゝあん男とゝふ
久くゝゝゝ在んゝゝ後ゝのゝふゝ。翌ハ病ふ假托ゝ。一ゝゝゞ母屋へ帰りゝん。
あん男も中陰果ゝ元まゝゞ元三十五日ゝゝゝ。ゝゝ伯母ハふ男をゝゝ
ゝ既ふ喪を結びてハあん男ゞ父ハゝゞ父ゝけゝより心喪ふ服ゝ報恩
謝德の信ゝ竭さん何でふ女ゝしく花をゝ向経を誦のゝ孝ゝと廿入やと奬ゝく。
共ふ番化ゞ霊牌を拝しゝ。この日のゝ元告ゝ折ゝゝ。碧瑤と足音しゝて外面ゝり

山青堂蔵

まうめあり。この人ハ誰そ者官三輯嗣次の日を等更ホ次の巻の端ホ解る。
他者ニ予ニこの巻を草さるとも或人側より閲ーと難ぞ云信乃壮助ホ
英智宏才あるといふとも原是黄口の孺子その年いまぞ十五ホ足
らぬ。ちゝ母ホ智辨甚卓ー。絶く童子の氣象る。寓言といふとも
甚過ぎ。蓋小説ハよく人情を鑿をりく。又る人倦ぞ。今この二子
の偽の如く情ヨ恃るホあらぞやといふ。予答ていふ。ちゝぞ藍衣ハ
八才ゆく鮮の師ぞ。畢子ハ五歳ゆく禹を佐く伯益五才ホ
火を掌る。項橐五歳ゆく孔子の師ぞ。いホーへの聖賢生るゝ
明智俊才億万人ホ傑出を固よる風惠の列ゆあらぞこの他の神童又
多るヨ謝在杭嘗集録ぞく。一編の文来をるせり今毛挙ぬホ
あらぞ五雑組中ホいく見ぞ八犬士の如も亦ヨ亜ホ抜便且

予ぞ戯ヨその列傳を作る所以
又ハ蜑崎十郎輝武ぞ弱死ハ長禄二年のるえ又犬川荘助ぞ父
二ぞ自殺せ[illegible]ヨハ年を歴く。寛正六年のるえ。ぞる且ども
海陸の路絶く。澎二ぞ妻ハ輝ぞ死をぞる安房へ赴んとて逆
旅ヨ才ゆる且る。婦幼の疑惑を解ん為筆の序ホ自評をといふ

家傳神女湯 一包代百銅 婦人諸病の良剤ホ一産前産後ちのみちホ助功ありホあつ絶ぞ出来と同ぞ功のうこの書の前集ぞ我れ世ぞ畧す
精製奇應丸 俗某をのぞ[illegible]法ホ老ぞ製方ぞ[illegible]大包代銀弐匁 中包代[illegible]五分 小包代[illegible]
婦人つゞむの妙薬 毎月つゞむ[illegible]ホ用ひく即功神のど産後のそりめ[illegible]用ひく[illegible] 三包六十四匁 半包三十匁
製藥并弘所 江戸元飯田町中阪下南側四方丸を指向 瀧澤氏製
取次所 江戸神明前いつゝや市兵衛 大坂敏橋筋唐物町かゞちや太助

里見八犬傳第二輯巻之五終